佐久市埋蔵文化財調査報告書　第165集

森平遺跡
北近津遺跡Ⅱ
西一里塚遺跡Ⅲ
大豆田遺跡Ⅲ

2009.3

佐久市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第165集

森　平　遺　跡
北近津遺跡Ⅱ
西一里塚遺跡Ⅲ
大豆田遺跡Ⅲ

2009.3

佐　久　市
佐久市教育委員会

例　　言

1．本書は、佐久市が行う市道改良工事に伴う森平・北近津Ⅱ・西一里塚Ⅲ・大豆田Ⅲの各遺跡の発掘調査報告書である。

2．調 査 原 因 者　　佐久市　高速交通課

3．調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会

4．遺跡名及び所在地

	森平遺跡	（ＹＭＤ）	佐久市横和字森平936-1他
北近津遺跡群	北近津遺跡Ⅱ	（ＮＣＫⅡ）	佐久市長土呂1069-8他
	西一里塚遺跡Ⅲ	（ＮＩⅢ）	佐久市平塚字屋敷前210
周防畑遺跡群	大豆田遺跡Ⅲ	（ＮＳＯⅢ）	佐久市長土呂1704-6

5．調査期間及び面積

発掘調査	森平遺跡	平成18年12月 4日～平成19年 1月25日	
	北近津遺跡Ⅱ	平成18年 9月 5日～平成18年11月14日	
	西一里塚遺跡Ⅲ	平成18年11月27日～平成18年12月21日	
	大豆田遺跡Ⅲ	平成19年 1月 5日～平成19年 1月19日	
整理作業		平成20年 4月 1日～平成21年 3月31日	
調査面積	森平遺跡	471㎡	市道Ｓ15-50号線（新田川原）
	北近津遺跡Ⅱ	769㎡	ひばりケ丘側道
	西一里塚遺跡Ⅲ	540㎡	市道Ｓ2-232号線（平塚）
	大豆田遺跡Ⅲ	127㎡	市道Ｓ１-99号線（常田線北）

6．本遺跡の航空測量・出土遺物の鑑定･保存処理･実測等の委託は以下の通りである。
獣骨鑑定　　株式会社　パレオ・ラボ

7．調査担当者は以下の通りである。

森平遺跡	冨沢一明
北近津遺跡Ⅱ・大豆田遺跡Ⅲ	林　幸彦　佐々木宗昭
西一里塚遺跡Ⅲ	森泉かよ子

8．各遺跡の整理作業は基本となる部分を各担当者がおこない、編集作業を冨沢がおこなった。
原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集･執筆を冨沢が行った。

9．調査から報告書作成に至る過程で以下の方々並びに各機関のご指導･ご協力を頂いた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。(順不同･敬称略)
(財)長野県埋蔵文化財センター、長野県考古学会、佐久考古学会、横和区の皆さん

10．本書及び森平・北近津Ⅱ・西一里塚Ⅲ・大豆田Ⅲからの出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

４遺跡は各章立てにより記載したが凡例は以下をもって共通とする。

1．遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)・竪穴状遺構（Ｔａ）特殊遺構(T)・単独ピット(P) である。

2．挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
竪穴住居址・掘立柱建物址1/80　カマド・炉1/40　土坑1/80
土器1/4　石器1/4・1/3　金属製品・土製品1/2　石製模造品1/1

3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

4．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。

5．遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。

6．調査区グリットは各遺跡での区割りに従い、間隔は４×４ｍに設定した。
7．住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、炉は面積に含め計測してある。
8．遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
9．挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。その他の指定については本文中で個々に示す。

地　山　　焼　土　　貼　床

赤　彩　　須恵器断面　　柱痕・黒色処理・石器すり面

目　次

例　言・凡　例
第１編　発掘調査の経緯と経過
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査組織 …… 1
第３節　調査日誌 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
第１節　自然的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第２編　森平遺跡
第Ⅰ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要 …… 5
第２節　基本層序 …… 5
第３節　検出遺構と遺物の概要 …… 6
第Ⅱ章　遺構と遺物
第１節　竪穴住居址 …… 7
第２節　土　坑 …… 15
第３節　溝状遺構 …… 18
第４節　ピット …… 20
第５節　遺構外出土遺物 …… 20
第６節　調査のまとめ …… 20
写真図版

第３編　北近津遺跡Ⅱ
第Ⅰ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要 …… 27
第２節　基本層序 …… 28
第３節　検出遺構と遺物の概要 …… 28
第Ⅱ章　遺構と遺物
第１節　竪穴住居址 …… 29
第２節　土　坑 …… 34
第３節　溝状遺構 …… 36
第４節　ピット …… 37
第５節　遺構外出土遺物 …… 37
第６節　調査地点東地区 …… 38
第７節　調査のまとめ …… 38
写真図版

第４編　西一里塚遺跡Ⅲ
第Ⅰ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要 …… 43
第２節　基本層序 …… 44
第３節　検出遺構と遺物の概要 …… 44
第Ⅱ章　遺構と遺物
第１節　竪穴住居址 …… 45
第２節　土　坑 …… 55
第３節　溝状遺構 …… 56
第４節　遺構外出土遺物 …… 63
第５節　調査のまとめ …… 63
第６節　北側調査区 …… 64
写真図版

第５編　大豆田遺跡Ⅲ
第Ⅰ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要 …… 73
第２節　基本層序 …… 73
第３節　検出遺構と遺物の概要 …… 74
第Ⅱ章　遺構と遺物
第１節　溝状遺構 …… 74
写真図版

付編　科学分析
１．獣骨鑑定
２．人骨鑑定

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯

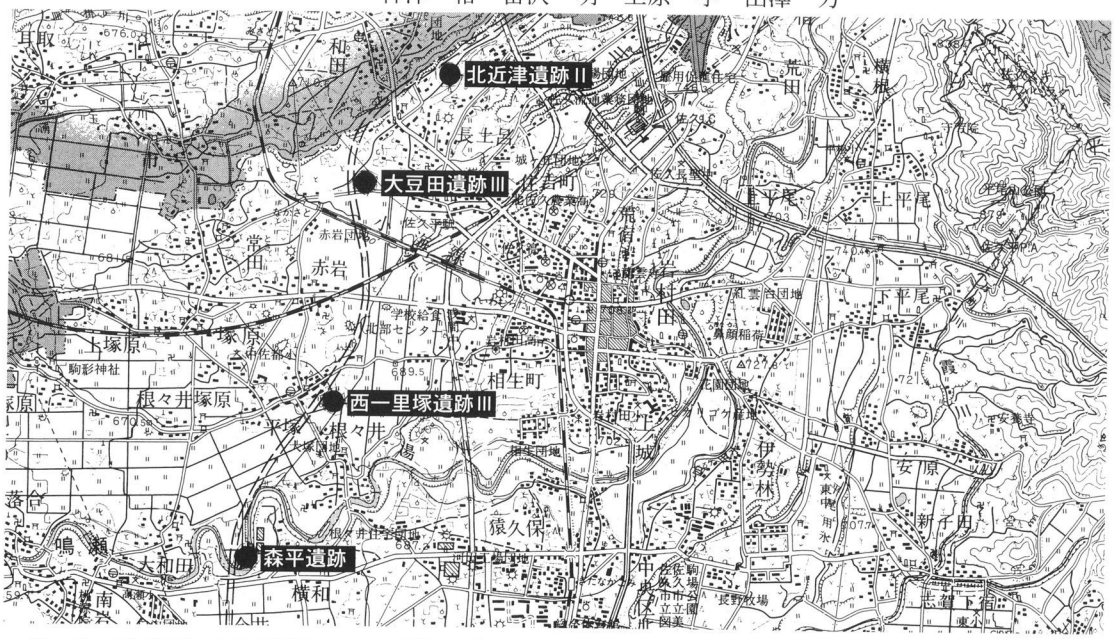
４遺跡が所在する佐久市は長野県の東端に位置し、北に浅間山、南に八ヶ岳連峰、東に荒船山塊などの山並みに抱かれた海抜700m前後に広がる高原都市である。佐久市は平成17年4月1日に1市2町1村が合併した。新市の重点課題の一つとしては4地域の融合が上げられ、地域間の基幹道路の整備が急務となっている。市内の基幹道としては東西に走る国道254号と142号、南北に貫く国道141号がある。折しも『中部横断自動車道』の建設が始まり佐久平の南玄関口として「佐久南インター」が計画された。

このため市内各所では平成18年に高速道路建設関連の道路工事が多数計画された。佐久市高速交通課は当教育委員会に工事箇所4ヶ所について遺跡有無の照会を行った。教育委員会では予定地に森平遺跡・北近津遺跡・西一里塚遺跡・大豆田遺跡が存在することを回答した。よって、保護協議を行った結果、遺跡の存在する部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。各遺跡は平成18年秋より順次調査が開始され、冬に発掘調査は終了した。整理作業は平成20年度におこなわれ報告書を刊行した。

第２節　調査組織

調査主体者　佐久市教育委員会

	教　育　長	三石昌彦（平成17年5月就任）	木内　清（平成19年4月就任）	
事務局	社会教育部長	柳沢義春（平成18年度より組織改正）	工藤孝徳（平成20年度～）	
	社会教育部次長	山崎明敏（平成19年度）	柳澤本樹（平成20年度～）	
	文化財課長	中山　悟（平成19年６月迄）	森角吉晴（平成19年７月～）	
	文化財調査係長	高柳正人（平成18年度）	三石宗一（平成19年度～）	
	文化財調査係	林　幸彦　並木節子　須藤隆司	小林眞寿　羽毛田卓也	
		神津　格　冨沢一明　上原　学	出澤　力	



第１図　森平遺跡・北近津遺跡Ⅱ・西一里塚遺跡Ⅲ・大豆田遺跡Ⅲ位置図　(1:50,000)

調査体制

森平遺跡

調査担当者　冨沢一明

調　査　員　浅沼ノブ江　小林よしみ　小林妙子　清水澄生　橋詰勝子　橋詰信子
比田井久美子　依田三男　佐藤瑞希　井出孝子　柳田晴美　横尾敏雄
土屋武士　安藤孝司　柳沢かおり　浅沼勝男　堺　益子　田中ひさ子

北近津遺跡Ⅱ

調査担当者　林　幸彦

調査主任　佐々木宗昭

調　査　員　浅沼ノブ江　岩崎重子　清水澄生　大工原達江　広瀬梨恵子　林　まゆみ
依田三男　斉藤恵李　井出孝子　柳田晴美　清水律子　狩野小百合
浅沼勝男　磯貝律子　市川明子　上原悦子　楜澤文康　森泉こずえ
春原圭介　春原幸子　土屋武士　中山清美　荻原宮子
堀篭保子　山元有美子　横尾敏雄　柳沢かおり　比田井久美子

西一里塚遺跡Ⅲ

調査担当者　森泉かよ子

調　査　員　阿部和人　市川　昭　碓氷知子　林　美智子　菊池喜重　市川明子
小林百合子　羽田貴恵　細谷秀子　渡辺久美子　里見理生

大豆田遺跡Ⅲ

調査担当者　林　幸彦

調　査　員　清水澄生　日向昭次　澤井知春

第３節　調査日誌

森平遺跡

平成18年

12月４日　表土剥ぎ開始
12月６日　Ｈ１号住居址より調査開始
12月25日　全体写真撮影
12月26日　機材撤収

平成19年

１月25日　調査区の埋め戻し終了

北近津遺跡Ⅱ

平成18年

９月５日　表土剥ぎ開始
９月29日　西区と東区に分け遺構調査開始
11月14日　全体図を作成し調査終了

平成19年度

３月30日　本年度の室内整理作業終了

大豆田遺跡Ⅲ

平成19年

１月５日　溝状遺構を調査開始
１月19日　調査終了し埋め戻す

西一里塚遺跡Ⅲ

平成18年

11月27日　北区と南区に分けて調査開始
12月21日　全体写真撮影と機材撤収

整理作業

平成20・21年

４月より遺物復元・実測・図面修正・トレース版下作成・遺物写真撮影・写真図版作成・表作成・原稿執筆を行い報告書を刊行する。

森平遺跡調査風景

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然的環境

佐久平は長野県内を流れる大河千曲川の上流部に位置し、浅間山･八ヶ岳･荒船山などの山々に囲まれた海抜700mを平均とする盆地である。この盆地の中央部には南から千曲川が先の山々から流れ出た湯川･滑津川･片貝川などの中小河川を集め北流している。佐久平の地形は大きく北と南で異なる。北側は浅間山の火山活動により形成された火山灰台地が浅間山麓より広がり、特に佐久市長土呂･小諸市耳取付近では火山灰台地特有の「田切り」地形が発達している。これとは趣を異にして、南側は蓼科･八ヶ岳山麓から筋状に延びる尾根とそれらの谷筋より流れ出る小河川が造り出す小規模な扇状地と千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積低地が広がり、のどかな水田風景が広がっている。

森平遺跡･北近津遺跡Ⅱ･西一里塚遺跡Ⅲ･大豆田遺跡Ⅲはこの千曲川右岸の北部地域に所在する。各遺跡の立地であるが、まず森平遺跡は横和地籍に所在し、湯川が大きく蛇行した右岸第1河岸段丘面縁に位置する。海抜は661m、湯川との比高差は9mを測る。遺跡周辺はほぼ平坦な地形であるが南西方向に緩やかに傾斜する。次に西一里塚遺跡Ⅲは平塚地籍に所在する。遺跡周辺は浅間山火山活動の一過程である第一次黒斑火山の大爆発による山体破壊の熱泥流（通称･塚原泥流）を基盤層に持つ台地上に位置する。「流山」は基盤層が地表に姿を現している部分で、地表に小島のように点在する。遺跡部分はこの基盤層の上に第二次前掛山噴火時の降下軽石や火砕流による堆積物に覆われた部分である。北近津遺跡Ⅱと大豆田遺跡Ⅲは長土呂地積に所在し、前掛山噴火の降下火山灰や軽石、また火砕流の堆積した火山灰台地上に位置する。この台地は前述した田切り地形の発達した台地で、北近津遺跡の西側には湧玉川にそう大きな田切が存在する。大豆田遺跡Ⅲは田切地形が消滅した台地末端に位置する。

第２節　歴史的環境

４つの遺跡が所在する北部地域には数多くの遺跡が散在する。火山灰台地上の遺跡を中心に時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡は北部台地上には皆無に等しい。前述した台地全体を覆う浅間山火山の噴出物は11000年～14000年前のものと考えられこの軽石流は千曲川を堰き止め、佐久平を一時堰き止め湖としたほどの大規模なものであった。この事から台地上に存在したであろう先土器時代の遺跡は火山灰に埋没しているか或いは火砕流により押し流されてしまったと考えられる。

続く縄文時代の遺跡も台地上では大規模な集落遺跡が発見されていない。集落遺跡が濃密に分布するのは浅間山麓地帯と佐久平の東山地域である。浅間山麓側では小諸市の郷土遺跡や石神遺跡、また焼町式土器で有名な御代田町の川原田遺跡などが上げられる。佐久市の東山地域は湯川左岸の山地と丘陵地帯からなる地域で、吹付遺跡や権現平遺跡、和田上遺跡などが上げられる。このように縄文時代の人々にとって火砕流の流下地帯は居住には不適格な地とされていたようである。それを物語るように爪形文土器と石器群がまとまって出土した猿久保地籍の寺畑遺跡も湯川左岸に位置し、湯川を挟んで北部の火山灰台地を見渡せる位置にあたる。しかし、台地上で縄文時代の痕跡が全く発見されない訳ではない。聖原遺跡周辺では縄文期の落とし穴と考えられる遺構が発見され、また西近津遺跡付近では湧玉川に望む田切の台地上から縄文中期後半から後期の土器とともに土坑などが発見されている。今後、常田地籍等で集落址の発見が期待できる。

次の弥生時代になると地域の様相は一変する。弥生前期から中期前半の集落は発見されていないものの、下信濃石遺跡からは縄文晩期から弥生前期の土器片がまとまって出土し注目される。弥生中期後半になると集落が形成されはじめる。その地域は湯川流域が上げられる。特に湯川の右岸地域で根々井から一本柳地籍には集落が集中する。この内、西一本柳遺跡は現在までに数次の調査が行われ、弥生中期後半の住居址が230軒以上調査されている。弥生後期になると集落が台地の奥へ展開するようになる。中心は岩村田地籍の円正坊遺跡周辺、長土呂地籍の周防畑遺跡、そして中期から引き続き

西一本柳遺跡周辺である。これらの遺跡は田切地形が消滅した常田・塚原地区を取り囲む様に集落が展開しており、生産基盤としての水田を営むに都合の良い場所に選地したと考えられる。また、この弥生時代後期になると中期にもまして集落規模が大きくなる。当遺跡から濁川を挟んで東へ1500mに所在する上直路遺跡からは焼失した住居内より墓坑が発見され、墓坑内からは左手に10点、右手に5点の帯状円環型銅釧を付けた人骨と箱清水式の土器類が出土した。埋葬された人物はその埋葬形態や身につけた装飾品から集落や地域の中で特別な立場にあった人物と考えられる。

次の古墳時代であるが前期は逆に弥生時代後期より集落規模が縮小する。またその立地も弥生箱清水期の中心的な集落のより外側、湯川や千曲川縁又は田切の縁のような所に選地している。遺跡としては5-6軒ほどの小規模な遺跡である藤塚遺跡や松の木遺跡・栗毛坂遺跡などである。墳墓として根々井大塚古墳、藤塚古墳群などが上げられるが、前述した中部横断道建設に伴う西近津遺跡で4世紀代と考えられる一辺17mほどの方墳が2基発見された。周辺には同規模の墳墓が広がる可能性があり群在するようである。いずれにしても前期の墳墓は佐久地域全体でも非常に少数で希少な発見である。中期後半から後期に入ると集落はより田切台地の奥にまで進出し集落規模も拡大する。上聖端遺跡・円正坊遺跡・聖原遺跡などその後古代に続く集落遺跡と同じような立地を示す。台地上の後期古墳は湯川縁の北西の久保古墳群や塚原地籍の「流山」を利用した塚原・鷺沼古墳群などがある。この内、北西の久保古墳群からは朝顔型埴輪や円筒埴輪とともに家・盾・太刀などの器財型埴輪や馬・鶏・鹿といった動物埴輪、また五鈴鏡を腰に付けた人物や帽子をかぶった人物、或いは鷹匠といった人物埴輪など非常に種類豊富な埴輪群が出土し注目されている。これらの埴輪群は形態などの特徴から群馬地域との交流により生みだされたものと考えられている。

次に古代に入ると集落が一段と大きくなる傾向にある。また、これら大規模な集落は田切台地全面に及ぶ遺跡も存在する。長土呂地籍において上信越自動車道建設に伴って調査された芝宮遺跡群や中原遺跡群、また平成元年度から７年間調査され、竪穴住居址818軒・掘立柱建物址869棟が検出された聖原遺跡のような大規模な集落が発見されている。特に聖原遺跡からは皇朝十二銭をはじめ腰帯金具、八稜鏡、馬鈴、金銅製鈴、銅鋺、瓦塔、石製私印などが出土し、集落内寺院の存在も推測されている。これら大規模な遺跡群の北側には浅間山麓を抜け碓氷峠に向かう東山道が通過しており、それに伴い長倉駅が置かれていたと考えられている。またその周辺には御牧である塩野牧や長倉牧が存在した。田切台地上では水田経営には不向きと考えられ、これらの大規模な集落は駅や牧を支えた人々の集落であったとも考えられる。

中世以降としては、北西の久保遺跡に隣接して鎌倉中期から後期の五輪塔などからなる石造塔婆群が存在する。館跡としては長土呂地籍に方形の地割を持つ長土呂館跡がある。また、湯川西岸の段丘上に石並城・王城・黒岩城跡がある。これら城郭は中世前期に佐久平で活躍した大井氏の本拠地として推定され「大井城跡」とも呼ばれている。大井氏は承久の乱（1221年）後佐久に勢力をのばした地方豪族で信濃国守護小笠原氏を祖とする一党である。この大井城跡のうち王城の一部と黒岩城の一部が昭和54・55・59年にそれぞれ発掘調査が行われている。検出された遺構はそれぞれ15・16世紀と考えられている。特に掘立柱建物址は大型のもので注目される。出土遺物としては石臼・金属製品・国産陶磁器・舶載青白磁器・鉄滓などが出土している。これら遺物と遺構から調査された遺構は城郭主要部分の建物址ではなく、城に付随した周辺の工房であった可能性が指摘されている。

近世に入ると江戸幕府により整備された「中山道」が台地を横切るように小田井から塚原地籍を通過しており、元岩村田市街地に宿場町が形成された。当時の建物は殆ど残されていないが、現在でも地割りに町屋としての面影を残している部分もある。この内、中宿地籍で発掘調査がなされている。調査面積は450㎡と狭い範囲であったが、織部大皿(16世紀前半～17世紀前半)と志野織部向付(16世紀末～17世紀)の破片がそれぞれ出土したことは注目される。織部が出土した特殊遺構からは「寛永通宝」を含む19世紀代の遺物も出土していることから、中宿遺跡も敷地内に含まれる可能性がある岩村田陣屋（成立は遅くとも18世紀初頭）や宿場整備後（17世紀初頭）に成立した問屋衆との関連も考えられる。以上、台地上の調査された遺跡を中心に時代をおって歴史的環境を概観してみた。

第Ⅰ章　遺跡の概要

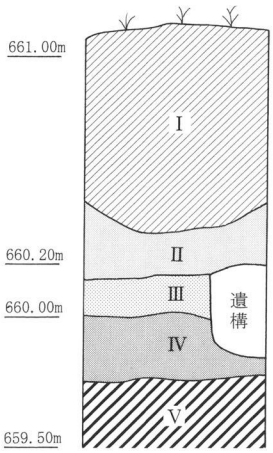
第１節　遺跡の概要

森平遺跡は市道改良に伴う発掘調査のため、調査区は幅5m長さ94mの南北方向に細長い調査区である。調査区の東側は畑地を挟んで湯川が流れ、西側には中部横断自動車道が併走している。調査区は蛇行した湯川に飛び出るように延びた舌状の台地を呈する。この台地は湯川の河岸段丘第１面であるが、北側に広がる台地との接点において、北側台地上より流れ出たと考えられる自然流路により開削され、台地地形は旧流路跡に向い北方向に落ち込んでいる。

台地の高い部分を中心に長野県埋蔵文化財センターにより中部横断道部分の発掘調査がなされ、弥生時代中期栗林期の住居址と平安時代の住居址がそれぞれ検出されている。特に弥生時代と平安時代の遺構確認は30～50cmの深さの違いがあり、いわゆる二面調査が行われている。

第２節　基本層序

基本層序は5層に分かれる。Ⅰ層とⅡ層は盛土及び耕作土であり、Ⅲ層は黒褐色土で、Ⅲ層上面で平安時代の遺構が確認できた。また、このⅢ層とⅣ層中からは弥生中期の土器片が出土し包含層化していた。よって本来は長野県埋蔵文化財センターの調査地点と同じく、平安時代と弥生時代の遺構確認面にレベル差があったと考えられるが、調査区幅の関係で、各時代による調査区全体の面調査は行えなかった。



基本層序

Ⅰ．褐灰色土層(10YR6/1)　盛土。砕石を含む。

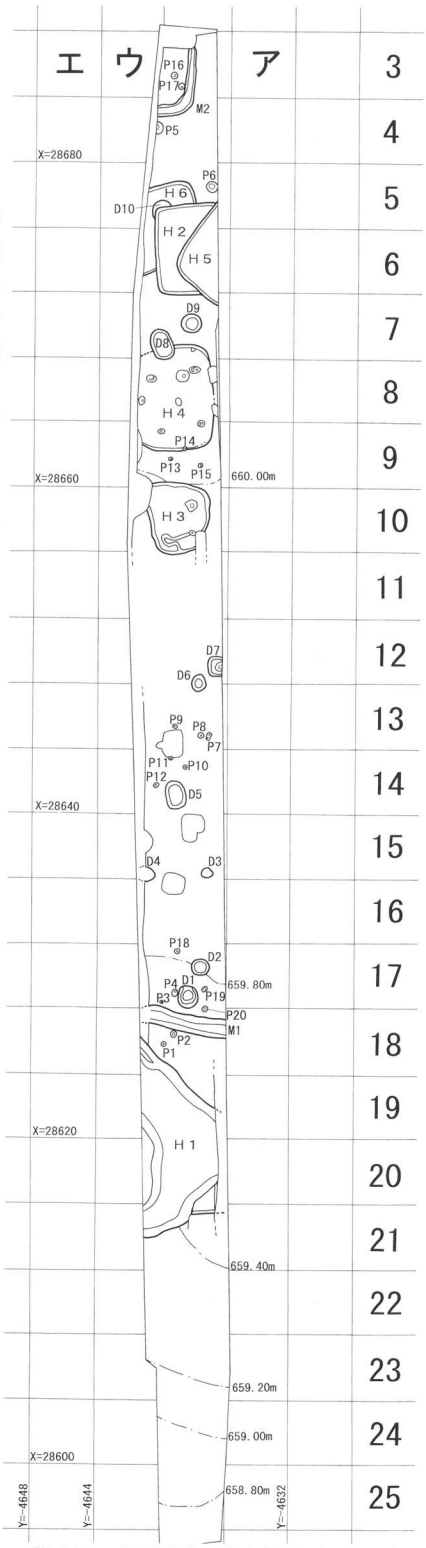
Ⅱ．褐灰色土層(10YR4/1)　耕作土。しまり・粘性弱く、ボソボソしている。

Ⅲ．黒褐色土層(10YR3/1)　しまり・粘性あり。土器を含む。

Ⅳ．黒褐色土層(10YR3/2)　しまり・粘性あり。褐色土の色が強い。

Ⅴ．黄褐色土層(10YR5/S)　しまり・粘性あり。下層は軽石・砂を含む。

第２図　標準土層模式図

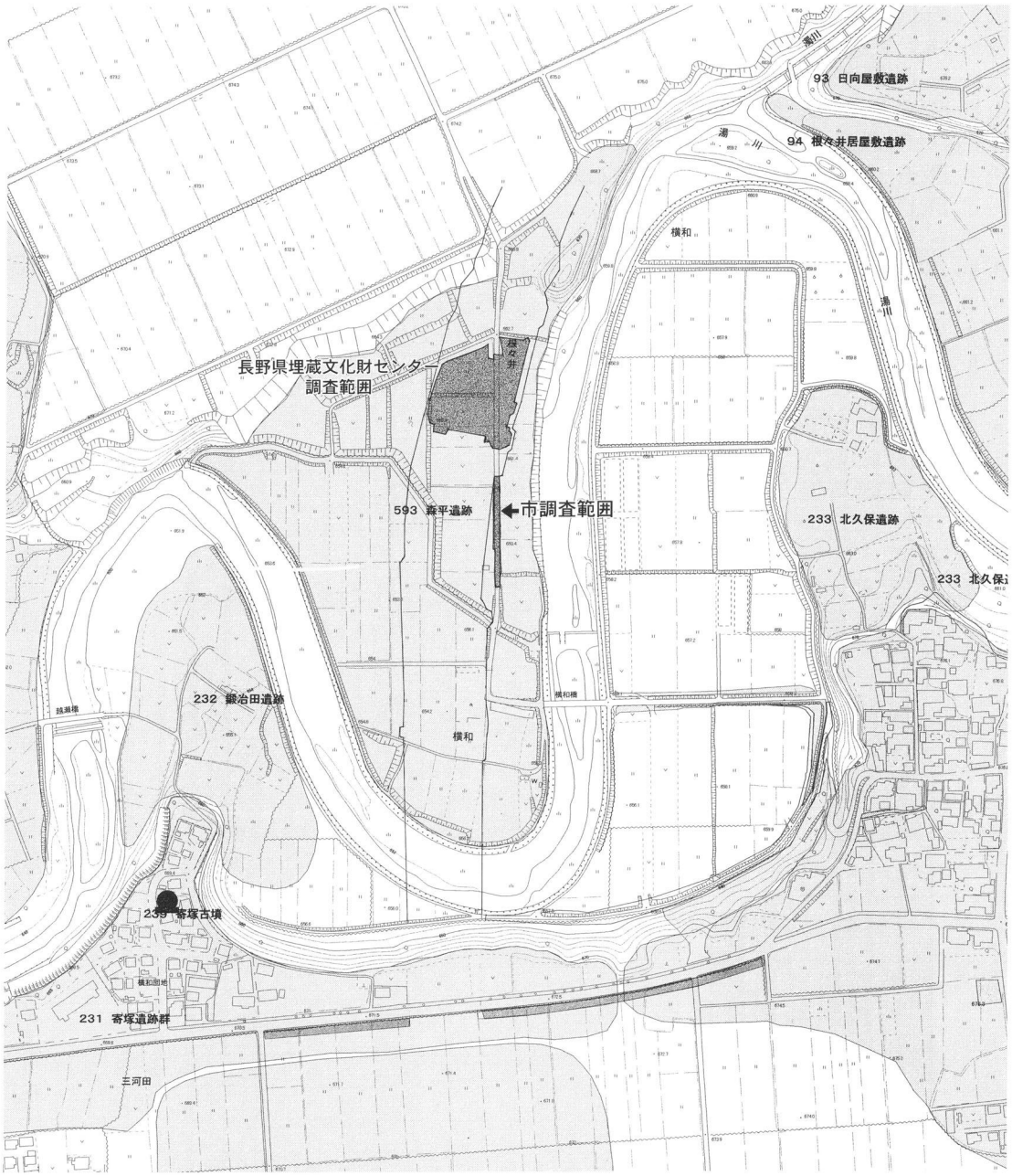


第３図　森平遺跡調査全体図（1：400）

第３節　検出遺構と遺物の概要

遺　構　　住居址　　６軒
（弥生中期3　平安2　不明1）
土　　坑　　10基
溝状遺構　　２本
ピット　　20

遺　物　　弥生中期 栗林式
土師器　須恵器
石器（磨製石斧・石鏃）
獣骨・人骨



第４図　　森平遺跡周辺遺跡位置図（1：5000）

第Ⅱ章　　遺構と遺物

第１節　　竪穴住居址

（１）Ｈ１号住居址　（第５図）

本住居址は、調査区南側端であるア-19・20・21、イ-18・19・20・21、ウ-18・19・20・21Grに位置する。残存状態は検出された部分は良好である。

形態は東西が調査区域外となるため確定はできないが北西方向から南東方向に長軸を持つ遺構と考えられる。規模は検出部分で北壁6.06m・南壁5.70mで、壁高さは北壁中央で最大75cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は28.0㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であるが、AA′間のセクションに現れたＡ層は中世と考えられる土坑の覆土であり別遺構である。ピット等は確認されなかった。また、床部分については調査時5層或いは7層上面と考えていたが、遺構全体を掘り下げ精査した段階で硬質部分もなく床面という確証は得られなかった。なお、この下層部分から遺構全体に散らばるような形で獣骨の歯が出土した（科学分析参照）。また、炉跡や柱穴といった施設も発見されなかった。5層と7層下は地山の砂層となる。

出土遺物は覆土中のものが多く、また所産時期も幅のあるものであった。1は弥生中期栗林の壺口縁部であり、頸部に篦描平行沈線文と縄文を施し、口唇部に縄文による刻み風の施文が施されている。2は内外面赤彩の弥生高坏脚部で、坏部側の端部は二次再生と考えられ、割れ口を綺麗に面取りを施している。3は小型の弥生高坏脚部と考えられる。赤彩が施されている。4は土師器甕の口縁部分で、口縁部が「く」の字に曲がるいわゆる「く」の字甕の範疇に入るものである。5は土師器高坏坏部で外面と内面に放射状のミガキを施す。6は小型の台付甕脚部と考えられる。7と8は敲石でいずれも先端部に敲き痕がある。9は石鏃である。10は剥片石器であるが一部研磨部分が確認できる。

これらの多様な時期の遺物や床面や柱穴が確認できない事から、本址の性格は住居址ではない可能性が非常に高い。なお、調査時に地元周辺の方の話しより本址脇の西側に圃場整備前まで大きな塚が存在したという話しを聞いた。本址より古墳時代の遺物も出土していることからこの塚に何らかの関係がある遺構とも考えられるが、湯川縁の段丘で第一段丘面への古墳の築造は今まで確認されていないため、「塚」が古墳であり本址が周溝とするには現況では資料不十分である。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	14.8	－	－	口唇部:縄文LR・刻み 頸部:縄文LR・ヘラ描沈線・ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅳ区
2	弥生	高坏	6.5	－	－	ヘラミガキ　赤色塗彩	坏部:ヘラミガキ・赤色塗彩　脚部:ナデ	完全実測	Ⅳ区
3	弥生	高坏	－	7.2	－	ハケ目→ヘラミガキ　赤色塗彩	坏部:ヘラミガキ・赤色塗彩　脚部:ハケ目	回転実測	Ⅳ区
4	土師器	甕	15.8	－	－	ナデ	ナデ	回転実測	Ⅳ区
5	土師器	高坏	17.2	－	－	暗文	暗文	回転実測	Ⅳ区
6	土師器	台付甕	－	6.4	(3.4)	ナデ	ナデ		Ⅳ区

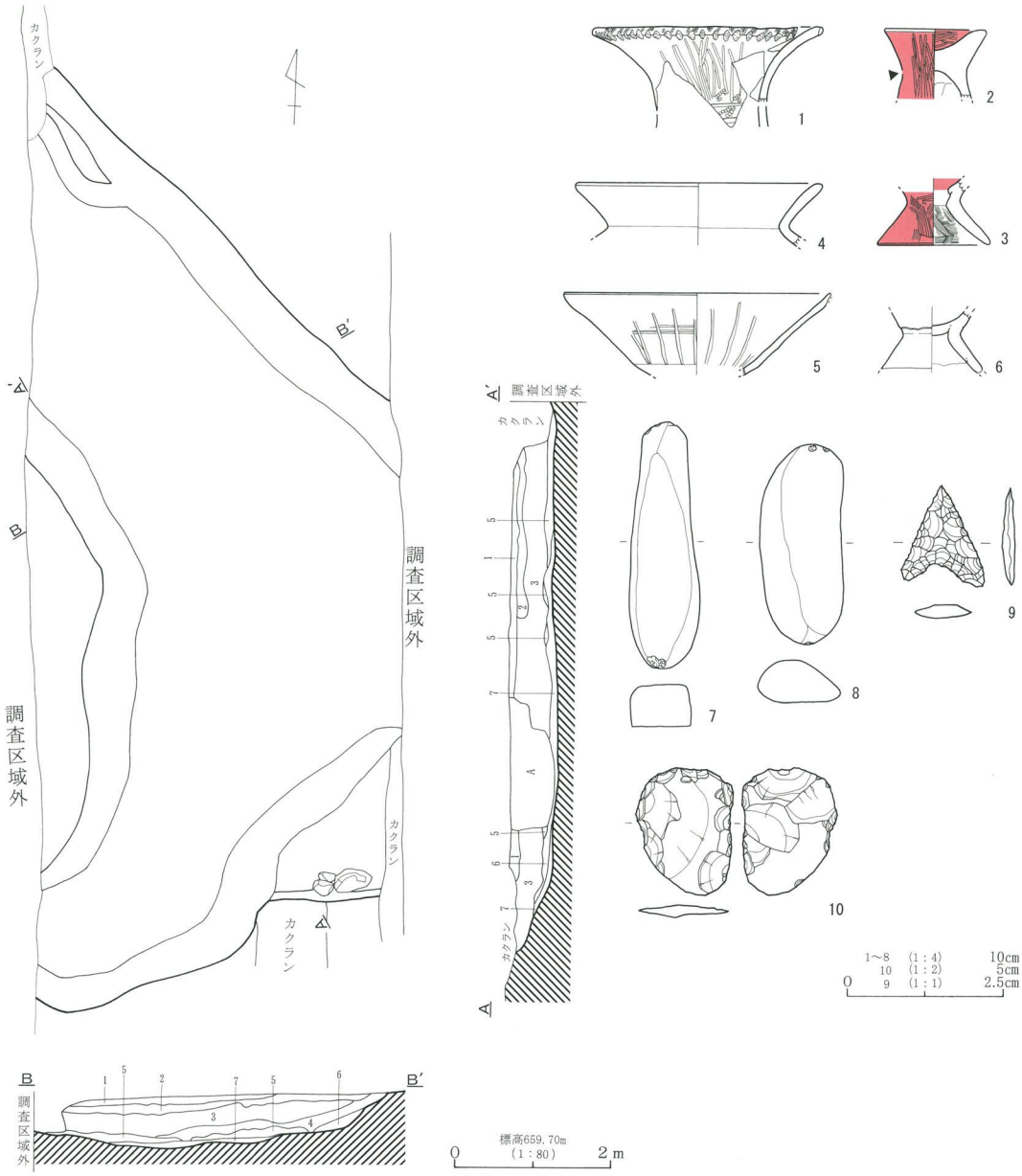
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
7	敲石	硬質砂岩	1/1	15.8	4.5	3.7	380.0	下端部に敲打痕	Ⅰ区
8	敲石	角閃石安山岩	1/1	12.8	5.4	2.7	237.0		Ⅰ区
9	石鏃	黒耀石	1/1	1.6	1.3	0.2	0.3	無茎	Ⅳ区
10	剥片	輝石安山岩	1/1	4.1	3.1	0.5	6.6	刃先に磨滅痕	Ⅳ区

第１表　H1号住居址出土遺物観察表

（２）Ｈ２号住居址　（第６図）

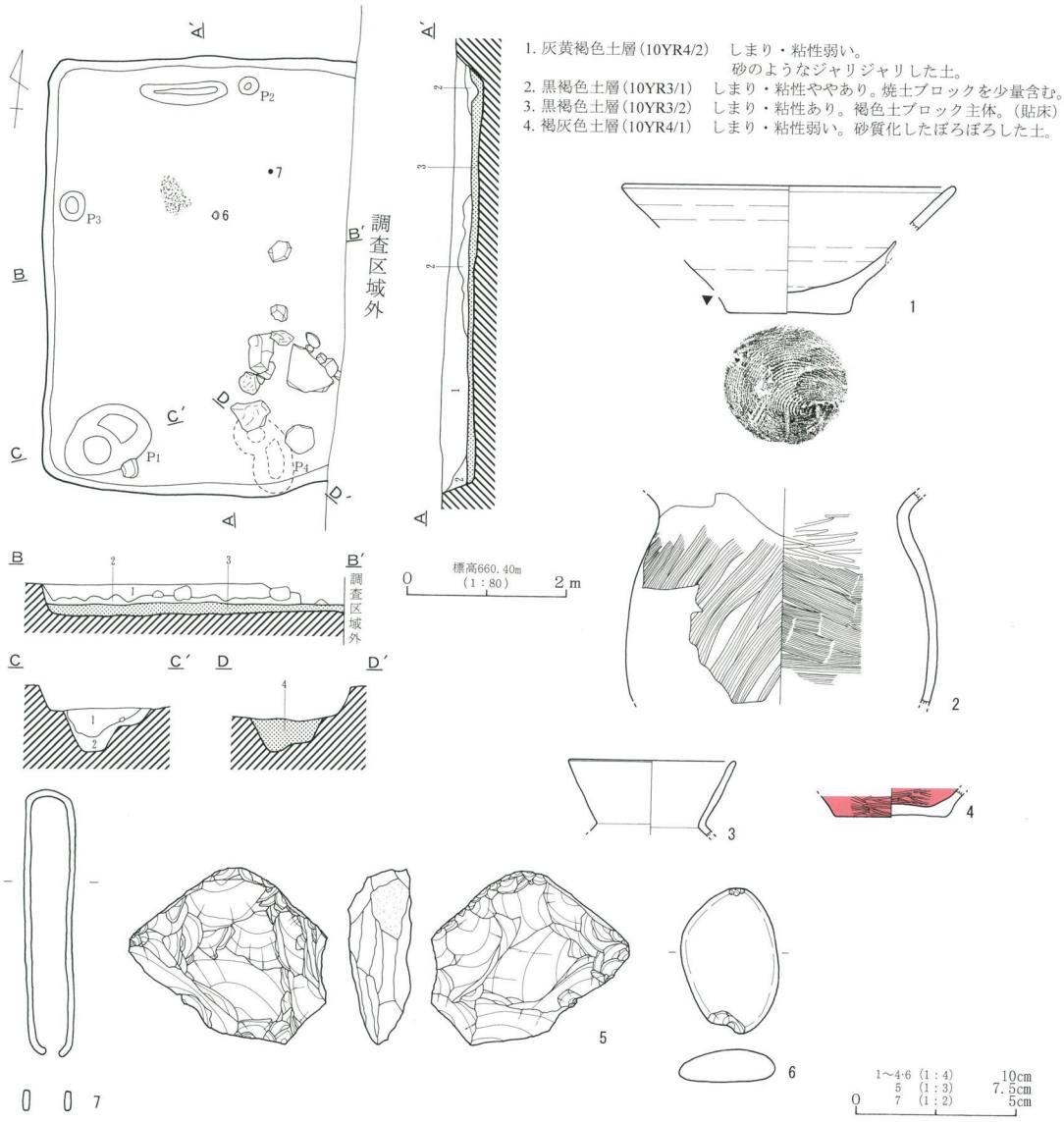
本住居址は、調査区北側であるイ-6・7、ウ-6・7Grに位置する。残存状態は住居址東側1/3が調査区外となる。その他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁検出3.72m・南壁検出3.47m・西壁5.08mで、壁高さは南壁中央部で最大32cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－4°－Ｗを示す。住居址の床面積は検出部分で18.7㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体



A. 褐灰色土層(10YR6/1)　しまり・粘性弱い。軽石を多く含む。
1. 褐灰色土層(10YR4/1)　しまり・粘性弱い。砂層で軽石を含む。
2. 黄褐色土層(10YR5/6)　しまり・粘性あり。黄色ローム粒子を多く含む。
3. 黒褐色土層(10YR3/2)　しまり・粘性ややあり。砂質化している。
4. 黒色土層(10YR2/1)　しまり・粘性あり。黒みが強い。
5. 褐色土層(10YR4/4)　しまり・粘性弱い。砂質化しており、下層は地山?
6. 黄褐色土層(10YR5/6)　しまり・粘性弱い。黒色土・ローム粒子の混合土。
7. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　しまり・粘性弱い。
砂層で一部褐色土ブロックを含む。

第５図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図



第6図　H2号住居址及び出土遺物実測図

に2～18cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約22～27cm・深さ11cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め4ヶ所確認され、規模はP1が径112cm・深さ54cm、P2が径23cm・深さ13cm、P3が径37cm・深さ13cm、P4が径106cm・深さ44cmを測る。

カマドは検出されなかったが住居址中央西よりに焼土の塊が径50cmほどの範囲で床面上に検出された。また、住居址中央南東よりに大型の礫が床面に散乱した状態で出土した。礫周辺部に焼土が検出されたことからカマドの意図的な破壊の状況とも考えられる。

出土遺物は比較的少なかった。1は土師器鉢で、ロクロ成形が強く胎土はよく精錬されている。いわゆる土師質系の範疇に含まれるものと考えられる。2は弥生中期栗林期の甕である。胴部に櫛描に

よる斜線文が描かれている。3は土師器で小型丸底壺の口縁部と考えられる。器面が荒れていて調整は不明。4は内外面赤彩の弥生鉢の底部である。5はいわゆる八風山原産の黒色緻密安山岩の石核である。6は敲石で両端に敲き痕が確認できる。7は鉄製品で鑷と考えられる。ほぼ完形である。

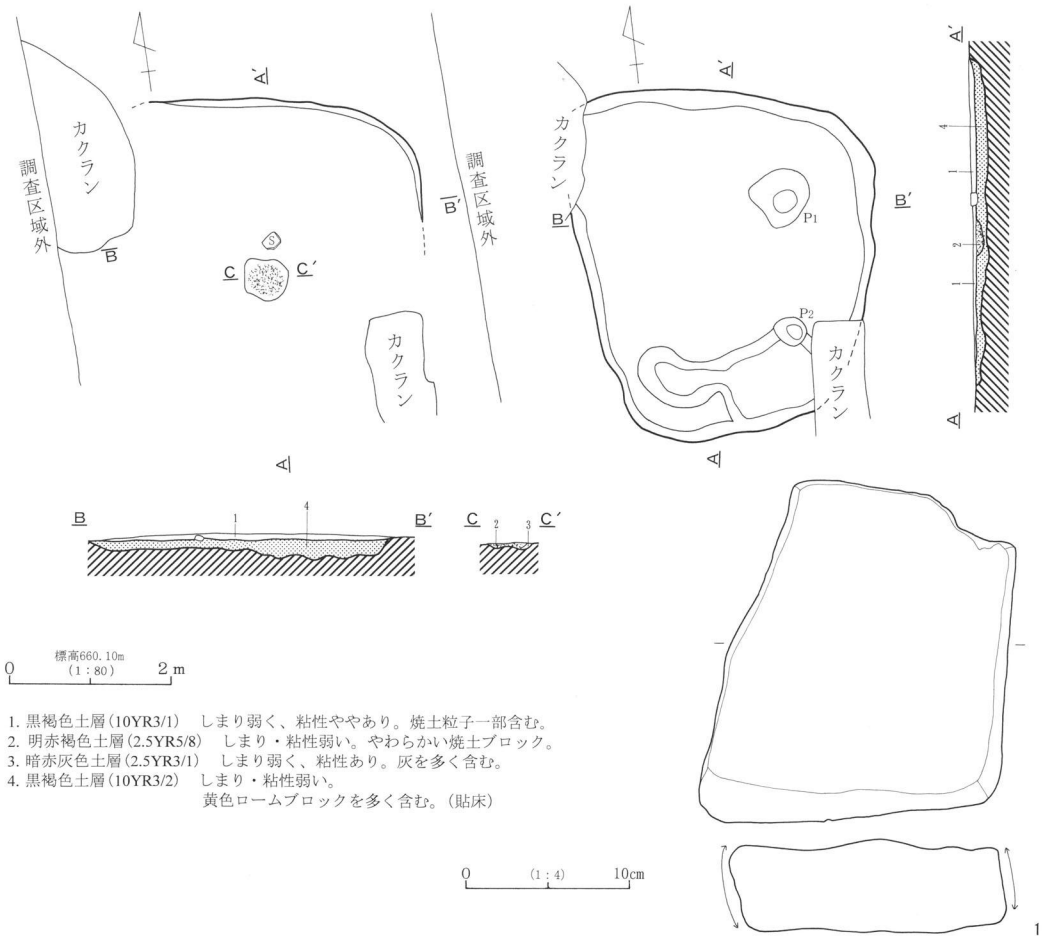
本址は出土遺物が多時期にわたり所産時期を確定することが難しいが、周辺部に広がる集落が弥生中期と平安期の住居址であることから、本址は住居形態から平安後期と考えられる。とすると住居内での礫群は出土位置より南東カマドが構築されていた可能性も指摘できる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	土師器	鉢	21.0	7.7	−	ロクロナデ　底部:右回転糸切り	ロクロナデ	回転実測	Ⅳ区
2	弥生	甕	−	−	〈13.4〉	ハケ目　櫛描斜走文(6本?)	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区
3	土師器	壺	10.4	−	〈4.7〉			回転実測	Ⅱ・Ⅳ区
4	弥生	鉢	−	7.0	〈1.8〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	完全実測	Ⅰ区

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
5	石核	黒色緻密安山岩		8.1	9.2	2.9	213.0	八風山安山岩原石	Ⅳ区
6	敲石	安山岩	1/1	9.1	6.1	2.0	142.0		
7	鑷	鉄	1/1	(8.4)	(1.6)	(0.6)	10.9		

第２表　Ｈ２号出土遺物観察表

（３）Ｈ３号住居址　（第７図）



第７図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査区中央であるイ-9・10・11、ウ-9・10Grに位置する。残存状態は西側と南側がカクランにより壊されている。

本址は精査時の段階で炉と北東コーナー壁の一部しか確認できなかったが、掘り方検出時に南北方向に長軸を持つ不整形の掘り込みを確認した。掘り方の規模は北壁3.20m（残存）・南壁2.00m（残存）・西壁2.73m（残存）・東壁2.36m（残存）で、壁高さは掘り方時の北東コーナーで22cmを測る。掘り方は緩やかに上がる。主軸方位はN－5°－Eを示す。住居址の床面積は掘り方時で11.18㎡を測る。覆土は自然堆積であった。ピットは掘り方検出時も含め2ヶ所確認され、規模はP1が径66cm・深さ23cm、P2が径41cm・深さ36cmを測る。

炉は住居址中央に検出された。形態は円形で、規模は長軸60cmで焼土の厚みは9cmを測る。焼土は焼けていたが柔らかく、焼土周辺には灰が多く出土した。

出土遺物は非常に少なく、図示した石器1点と写真に示した鉄滓があったのみである。1は磨り面のある台石と考えられる。本址は遺構の形態や鉄滓の出土状況などから小鍛冶遺構と考えられる。

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	所　見	出土位置
1	台石(すり石)	輝石安山岩	1/1	21.0	19.2	7.2	4070.0	被熱あり、両側面にすり面	

第３表　Ｈ３号住居址出土遺物観察表

（４）Ｈ４号住居址　（第8・9図）

本住居址は、調査区中央であるイ-7・8・9、ウ-7・8・9Grに位置する。残存状況は良好であるが、西側が調査区域外となる。また、Ｄ8号土坑と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は南北方向に長軸を持つ隅丸方形を呈する。炉は住居址のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.98m（残存）・南壁4.10m・西壁1.00m（検出）・東壁5.52mで、壁高さは掘り方時の北東コーナーで24cmを測る。掘り方時の壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－2°－Wを示す。住居址の床面積は掘り方検出部分で24.7㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体に軟質であったが、床の厚みは最大19cmあった。ピットは掘り方時のものも含め12ヶ所確認され、Ｐ2～Ｐ5が主柱穴と考えられる。規模はP1が径85cm・深さ25cm、P2が径67cm・深さ61cm、P3が径64cm・深さ52cm、P4が径40cm・深さ56cm、P5が径46cm・深さ58cm、P6が径55cm・深さ38cm、P7が径25cm・深さ17cm、P8が径22cm・深さ11cm、P9が径50cm・深さ14cm、P10が径38cm・深さ33cm、P11が径85cm・深さ30cm、P12が径38cm・深さ13cmを測る。また掘り方検出時に南北方向に長軸を持つ床下土坑が発見された。長軸286cm・短軸95cmで、深さは32cmを測る。

炉は住居址中央に検出された。形態は円形で、規模は長さ48cm・幅39cmを測る。また、焼土は良く焼け、礫を「コ」の字状に使った枕石が発見された。

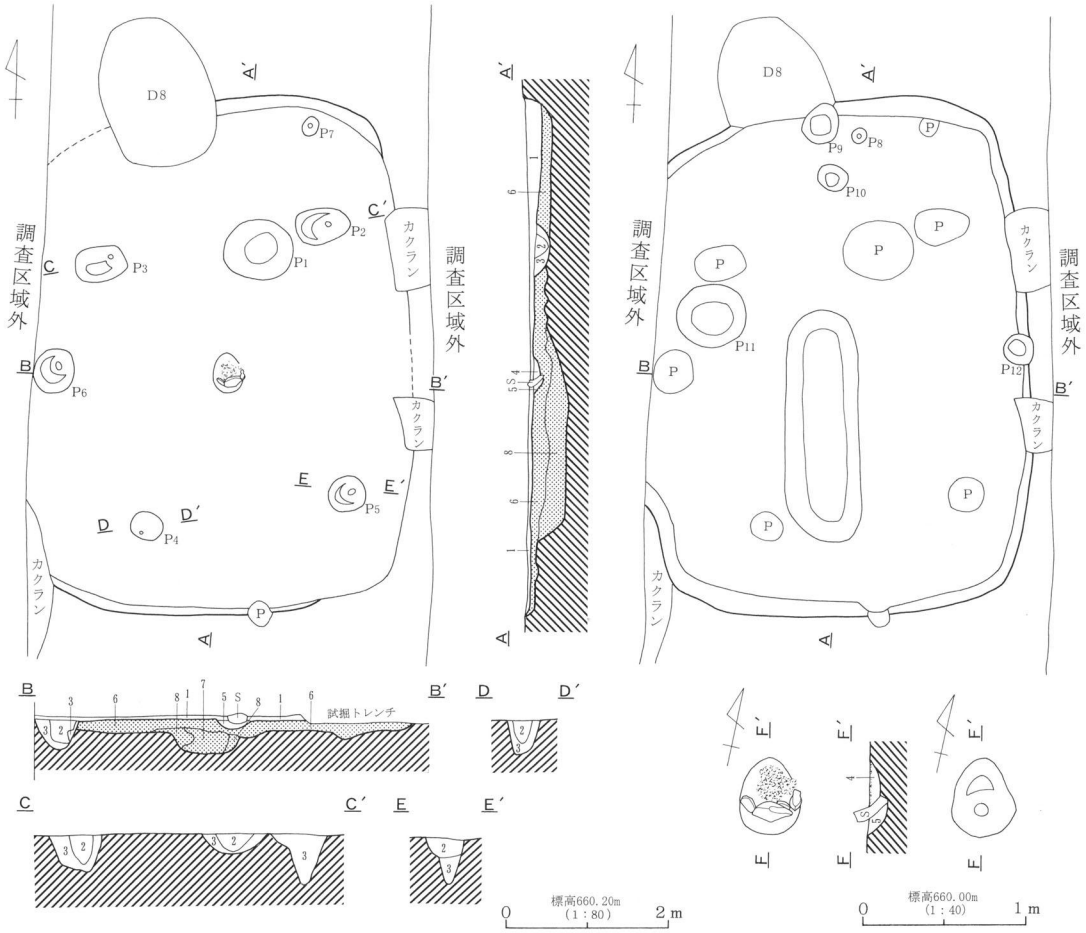
出土遺物は少なかったが6点を図示した。1は弥生壺の頸部である。縄文施文の後、2本の篦描平行沈線が施されている。2は弥生壺の胴部破片である。篦描による山形文と押し引き列点文が上段に施文され、胴部最大径の部分には縄文施文の後、横走沈線文に円形貼付文、篦描連弧文が施されている。3と4は小型の甕の口縁部破片で、3は頸部に穿孔がある。口唇部に縄文を施す。4は頸部に櫛描波状文、口唇部にも施文されているが原体は不明。5は磨石、6は敲石である。

本址はこれらの出土遺物より弥生時代中期後半に位置づけられる。

No.	種　別	器　種	法　量			成　形　・　調　整　・　文　様		備　考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外　面	内　面		
1	弥生	壺	－	－	〈12.5〉	ハケ目→ヘラミガキ　縄文LR ヘラ描沈線(2段)	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	
2	弥生	壺	－	－	〈7.6〉	ヘラ描山形文　押し引き列点文 縄文LR 横走沈線文→円形貼付文 ヘラ描連弧文	ハケ目	回転実測	
3	弥生	甕	－	－	〈2.3〉	ヘラミガキ　赤色塗彩　口唇部:縄文LR	ヘラミガキ　赤色塗彩	破片実測	床
4	弥生	甕	－	－	〈2.5〉	櫛描波状文　口唇部:刻み	ナデ	断面実測	Ⅱ区

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	所　見	出土位置
5	擦り石	輝石安山岩	1/1	5.6	4.9	1.9	81.0	正面・裏面にすり面	P1
6	敲石	角閃石安山岩	1/1	11.1	4.7	2.5	165.3	下端部に敲打痕	床直

第４表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表



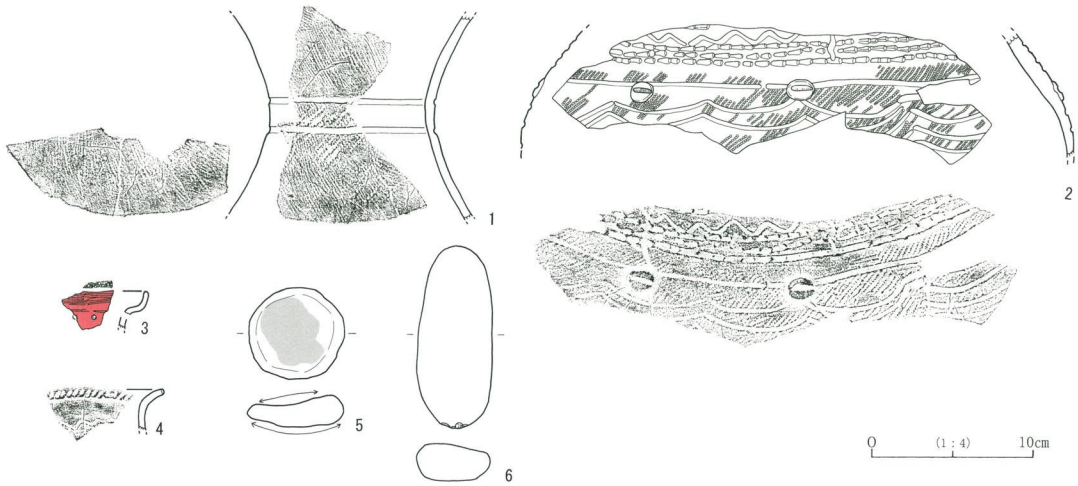
1. 黒褐色土層(10YR3/1)　しまり・粘性あり。
　黄色ロームの小さなブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層(10YR3/1)　しまり弱く、粘性あり。
3. 褐色土層(10YR4/4)　しまり・粘性あり。黄色ロームブロックを多く含む。
4. 黒褐色土層(10YR3/2)　しまり・粘性ややあり。焼土粒子を多く含む。
5. 暗褐色土層(10YR3/3)　しまり・粘性弱い。さらさらした土。
6. 暗褐色土層(10YR3/4)　しまり・粘性ややあり。
　黄色ローム粒子を多く含む。(貼床)
7. 黒色土層(10YR2/1)　2層に似る。しまり・粘性強い。
8. 褐色土層(10YR4/4)　しまり・粘性ややあり。
　黄色シルトブロックを多く含む。

第８図　Ｈ４号住居址実測図

（５）Ｈ５号住居址　（第10図）

本住居址は、調査区北側であるイ-5・6・7Grに位置する。残存状態は住居址のほとんどが調査区域外となり住居址南西コーナーの一部が検出されたのみである。H2号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は不明であり、規模は南壁3.42m（検出）・西壁4.36m（検出）で、壁高さは南壁で最大14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.14㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であったが、貼床は8～20cmの厚さで貼られていた。ピットは2ヶ所検出され、規模はP1が径88cm・深さ50cm、P2が径50cm・深さ32cmを測る。



第９図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

出土遺物は覆土中から少量出土した。1は弥生壺の胴部から頸部の破片で、頸部に横走沈線文が施されている。2と3は甕の破片で、2は櫛描波状文が施されている。3は円形貼付文と櫛描直線文・櫛描波状文が施されている。4は高坏の脚部破片であり、内外面赤彩が施されている。5は台付甕脚部の破片と考えられる。6は小型の片刃磨製石斧である。7は敲石である。本址はこれらの出土遺物から弥生時代中期後半と考えられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	－	－	〈6.4〉	ハケ目→ヘラミガキ 頸部:櫛描横線文	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
2	弥生	甕	－	－	－	口唇部:縄文LR　櫛描波状文	ヘラミガキ	断面実測	P1、Ⅱ区
3	弥生	甕	－	－	〈4.6〉	ヘラミガキ　櫛描波状文 櫛描横線文　円形浮文貼付	ハケ目→ヘラミガキ	断面実測	Ⅱ区
4	弥生	高坏	－	8.4	〈7.4〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	完全実測	
5	弥生	甕	－	8.2	〈2.4〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
6	片刃磨製石斧	蛇紋岩	1/1	4.0	2.4	0.5	10.4	全面よく研磨されている	
7	敲石	黒色多孔質安山岩	1/1	7.9	12.7	8.5	642.2	長辺の一辺に敲打痕	

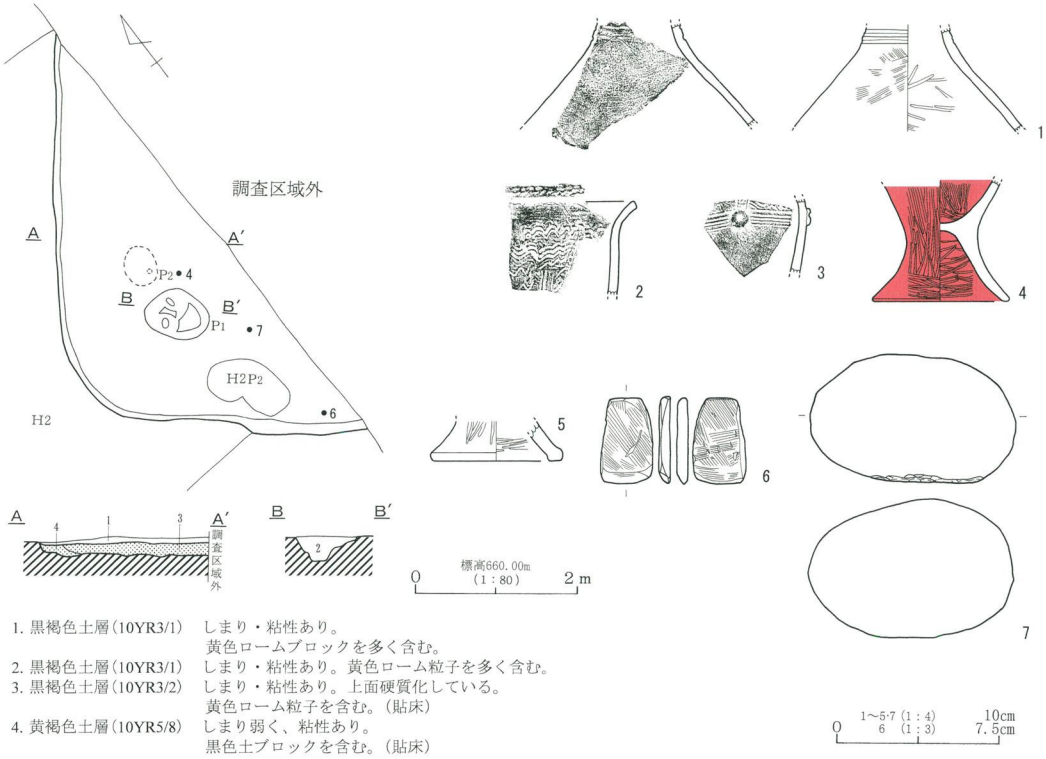
第５表　Ｈ５号住居址出土遺物観察表

（６）Ｈ６号住居址　（第11図）

本住居址は、調査区北側であるイ-5・6、ウ-5・6Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外、南側がH2号住居址に削平されている。重複関係では本址が一番古い。

形態は不明である。規模は北壁2.43m（検出）・南壁0.98m（残存）・東壁1.18m（残存）で、壁高さは南壁で最大9cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で5.23㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体的に軟質であった。貼床は3～15cmの厚みで貼られていた。ピットは2ヶ所確認された。規模はP1が径47cm・深さ32cm、P2が径33cm・深さ12cmを測る。

出土遺物は住居址北東コーナーよりまとまって出土した。10点を図示した。1と3は弥生壺の口縁部と頸部である。1は口縁部外面に縄文施文の後2本の篦描山形文を施す。口唇部には縄文を施す。2は縄文施文の後、篦描の平行沈線と山形文を施す。2は小型の甕口縁部である。縄文施文の後、篦描山形文を施す。4は壺の胴部下半で縄文と篦描連弧文を施す。5～7は壺の底部付近と胴部の破片であ



1. 黒褐色土層(10YR3/1)　しまり・粘性あり。
　黄色ロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層(10YR3/1)　しまり・粘性あり。黄色ローム粒子を多く含む。
3. 黒褐色土層(10YR3/2)　しまり・粘性あり。上面硬質化している。
　黄色ローム粒子を含む。(貼床)
4. 黄褐色土層(10YR5/8)　しまり弱く、粘性あり。
　黒色土ブロックを含む。(貼床)

第10図　H５号住居址及び出土遺物実測図

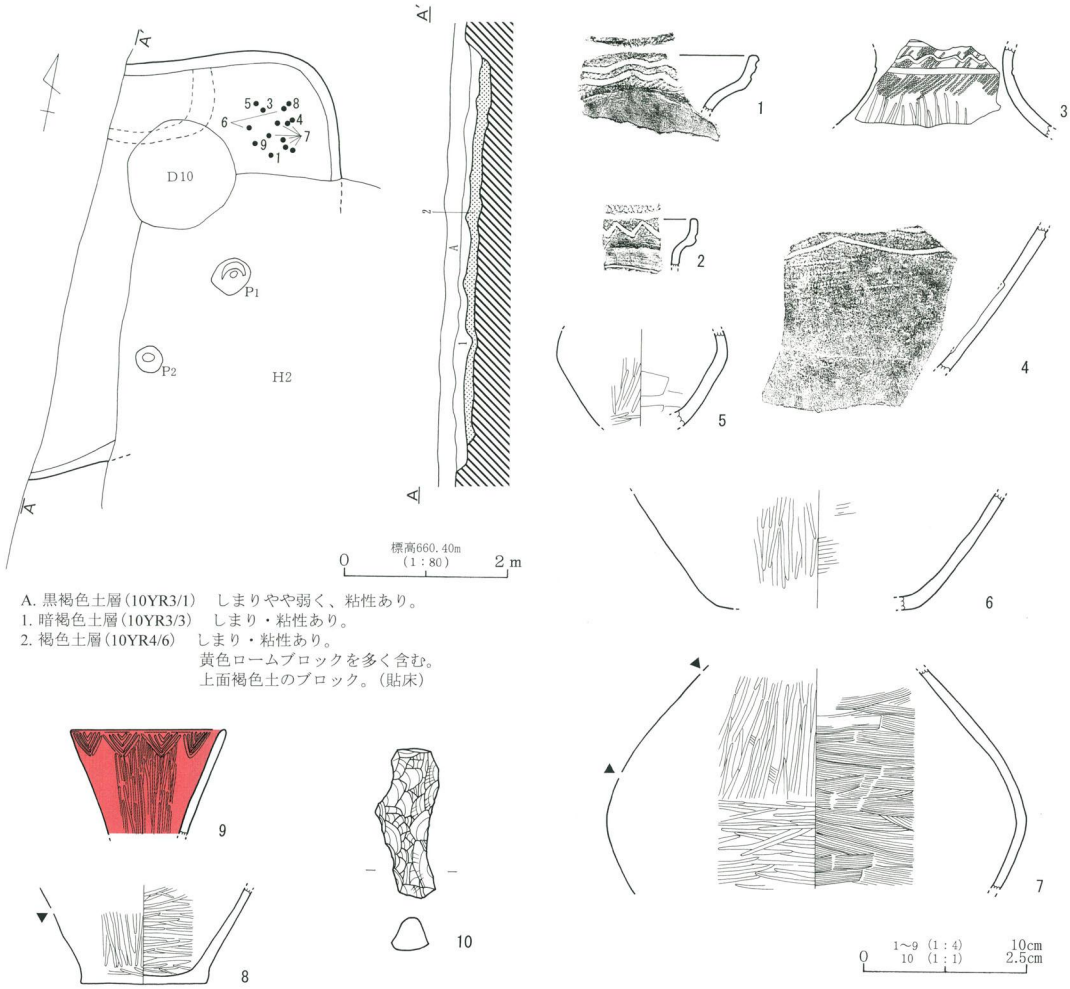
る。9は高坏坏部の破片であり、内外面に赤彩と、口縁部に篦描の重三角文を施す。8は甕の底部と考えられる。10は黒耀石製の錐と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より弥生時代中期後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	−	−	〈3.5〉	ヘラミガキ　口縁・口唇部:縄文 ヘラ描山形文(2段)	ヘラミガキ	断面実測	
2	弥生	甕	−	−	〈2.9〉	口唇・口縁部:縄文　ヘラ描山形文	ヘラミガキ	断面実測	
3	弥生	壺	−	−	〈5.6〉	縄文LR　ヘラミガキ ヘラ描波状文　ヘラ描沈線	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	
4	弥生	壺	−	−	〈8.7〉	縄文　ヘラ描連弧文	ハケ目	断面実測	
5	弥生	壺	−	−	〈5.9〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	回転実測	
6	弥生	甕	−	12.2	〈7.3〉	ヘラミガキ	ハケ目	回転実測	
7	弥生	壺	−	−	〈13.5〉	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目	完全実測	
8	弥生	甕	−	7.8	〈5.9〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	
9	弥生	高坏	9.6	−	〈6.5〉	ヘラミガキ　赤色塗彩　ヘラ描重三角文	ヘラミガキ　赤色塗彩	回転実測	

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
10	石錐	黒耀石	3/4	(2.3)	1.0	0.6	1.2	先端部欠損	

第６表　H６号住居址出土遺物観察表



第11図　H６号住居址及び出土遺物実測図

第２節　　土　坑

（１）Ｄ1号土坑　　（第12図）

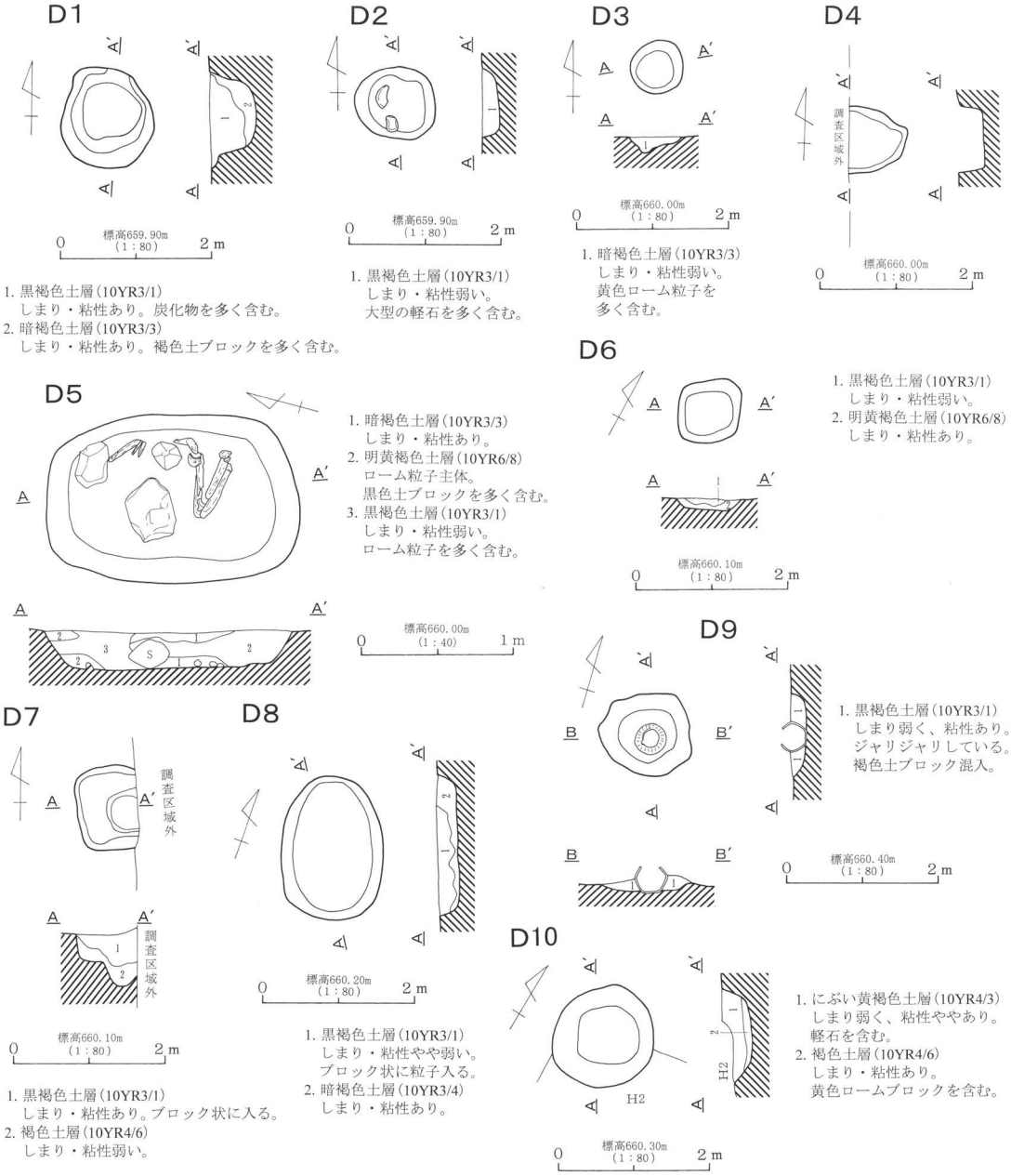
本址は、調査区南側のイ-17Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN－4°－Wを示す。規模は長軸1.30m・短軸1.23m・深さ63cmを測る。

本址からの出土遺物は図示できるものはなかったが、弥生甕片、古墳中期高坏片、土師器甕片等が出土した。しかし、本址の帰属時期を確定できるものはなかった。

（２）Ｄ２号土坑　　（第12図）

本址は、調査区南側のイ-17Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN－88°－Wを示す。規模は長軸1.05m・短軸0.94m・深さ22cmを測る。

本址より出土遺物は図示した石臼の他に土師器甕5点があった。



第12図　土坑実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様					備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面				内面		
1	須恵器	甕	－	17.7	(38.2)	ロクロナデ　タタキ				ヘラナデ	完全実測	D9
3	土師器	土鍋？	－	－	(4.1)	ナデ				ナデ	破片実測	D7
No.	器種		素材		残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置
2	石臼		石英安山岩		1/2	(26.5)	(15.4)	(9.5)	(3770.0)	下臼　目はすり減っていって不鮮明		D2

第７表　土坑出土遺物観察表

（3）Ｄ３号土坑　　（第12図）

本址は、調査区中央部のイ-15Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はＮ－65°－Ｅを示す。規模は長軸0.74m・短軸0.69m・深さ15cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

（4）Ｄ４号土坑　　（第12図）

本址は、調査区中央部のウ-15・16Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側が調査区域外となる。形態は不明で、長軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。規模は長軸0.78m（検出）・短軸0.88m・深さ38cmを測る。本址より図示できる出土遺物は無く、土師器甕片と壺片が5点あったのみである。帰属時期も不明である。

（5）Ｄ５号土坑　　（第12図）

本址は、調査区中央部のイ-14Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長軸を持つ長方形で、長軸方位はＮ－16°－Ｗを示す。規模は長軸1.66m・短軸1.12m・深さ27cmを測る。本址からは図に示したように骨が出土した。骨の詳細については科学分析を参照。

本址よりの出土遺物は弥生甕片1点、古墳中期高坏片1点、土師器甕片1点があったのみである。帰属時期も不明である。

（6）Ｄ６号土坑　　（第12図）

本址は、調査区中央部のイ-12・13Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はＮ－60°－Ｅを示す。規模は長軸0.84m・短軸0.82m・深さ16cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示できるものはなく弥生片1点、土師器甕片1点があり、帰属時期も不明である。

（7）Ｄ７号土坑　　（第12図）

本址は、調査区中央部のイ-12Grに位置する。残存状態は東側が調査区外となる。形態は方形であり、底面に一段掘り込まれた深さ68cmのピットが検出された。規模は長軸1.11m・短軸0.80m（検出）・深さ41cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した土鍋の口縁部があった。

（8）Ｄ８号土坑　　（第12図）

本址は、調査区北側のイ-7・8、ウ-7・8Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はＮ－21°－Ｗを示す。規模は長軸1.88m・短軸0.82m・深さ33cmを測る。

本址からの出土遺物は、小片の弥生壺片10点、甕片1点があったのみである。

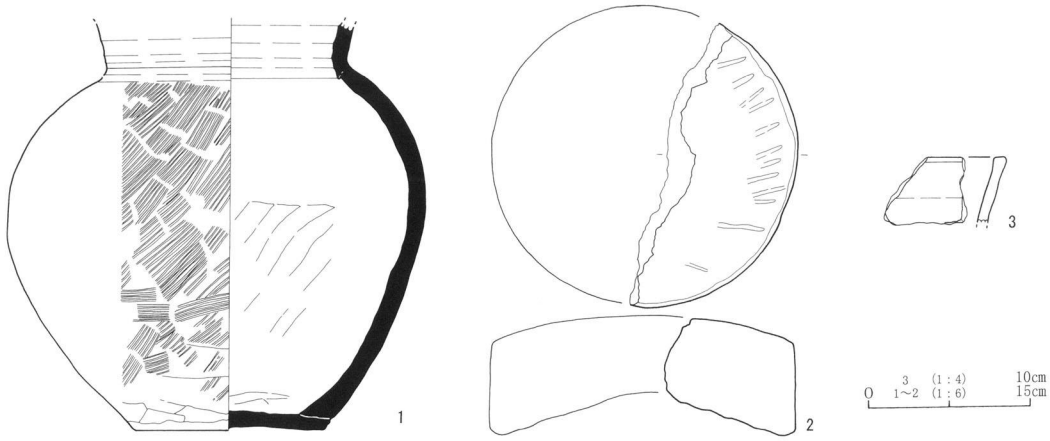
（9）Ｄ９号土坑　　（第12図）

本址は、調査区北側のイ-7Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、掘り込みは不明瞭である。長軸方位はＮ－75°－Ｅを示す。規模は長軸1.19m・短軸1.06m・深さ20cmを測る。本址からは図示した須恵器甕が置かれたような状態で出土した。1の須恵器甕は口縁部は欠損するが頸部から底部は完形であり、外面には平行タタキ目が残る。

（10）Ｄ10号土坑　　（第12図）

本址は、調査区北側のイ-5、ウ-5Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はＮ－22°－Ｗを示す。規模は長軸1.36m・短軸1.30m・深さ45cmを測る。

本址からの出土遺物は弥生甕・壺・鉢片が少量あった。



第13図　土坑出土遺物実測図

遺構名	出土位置	長径×短径×深さ	形　態	覆　土	出土遺物
P1	イ・ウ－18	３３×３３×１４	円形	黒褐色土(10YR3/1)　砂を含む。	
P2	イ－18	４６×３８×１６	楕円形	黒褐色土(10YR3/1)	弥生・壺(栗林)
P3	イ・ウ－17	３７×３２×１９	円形	黒褐色土(10YR3/1)	
P4	イ－17	４３×３５×１９	楕円形	黒褐色土(10YR3/1)	土師器・甕(口縁)
P5	ウ－4	〈７５×３４〉×３３	?	褐灰色土(10YR4/1)砂を含みジャリジャリ、炭化物を含む。	弥生鉢(内赤・外黒)壺片２
P6	イ－5	６８×６０×１６	楕円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P7	イ－13	５５×３６×１１	８の字	黒褐色土(10YR3/1)	
P8	イ－13	３６×３５×９	円形	黒褐色土(10YR3/1)	
P9	イ－13	３０×２７×１２.５	円形	黒褐色土(10YR3/1)	
P10	イ－14	２３×２２×４	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P11	イ－14	２５×２５×５	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P12	ウ－14	３０×２８×８	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P13	イ－9	２３×２２×１３	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P14	イ－9	２８×２６×１０	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P15	イ－9	３０×２６×１８	円形	褐灰色土(10YR4/1)	
P16	イ－3	４４×３７×１９	円形	黒褐色土(10YR3/2)	
P17	イ－3	４５×４２×１７	円形	黒褐色土(10YR3/2)	
P18	イ－17	３７×３３×２６	円形	黒褐色土(10YR3/2)	
P19	イ－17	３６×３２×１１	円形	黒褐色土(10YR3/2)	
P20	イ－18	３８×３４×１４	円形	黒褐色土(10YR3/2)	

第８表　ピット計測表

第３節　　溝状遺構

（１）Ｍ1号溝状遺構　　（第14図）

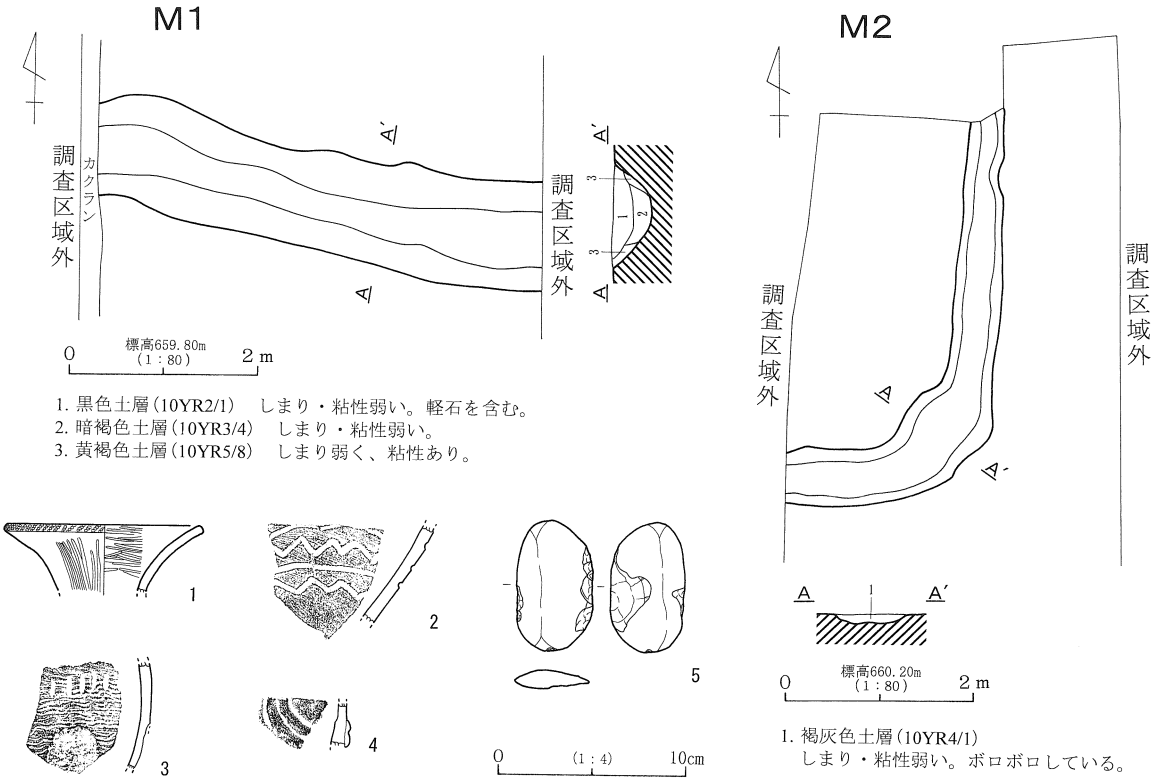
本址は、調査区南側のイ-18、ウ-17・18Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側と西側が調査区域外となる。溝は東西方向に延び、溝断面形状は逆台形を示す。規模は検出部分で全長4.80m、幅0.98～1.18m、深さ28～39㎝を測る。

本址からの出土遺物は5点を図示した。1は弥生壺の口縁部で口唇部に縄文を施文する。2は弥生壺胴部の破片で、篦描による横走沈線文と山形文が施されている。3は弥生甕の胴部破片で櫛描波状文の後、列点文が施される。4は縄文片と考えられる。5は敲石である。

（２）Ｍ２号溝状遺構　　（第14図）

本址は、調査区北端のイ-3・4、ウ-4Grに位置する。残存状態は良好である。溝は南北方向から西方向にＬ字に屈曲する形態で、溝断面形状は皿状を示す。規模は検出部分で全長5.23m、幅0.35～0.85m、深さ1～11㎝を測る。

本址より出土遺物は弥生中期壺片6点が出土したのみである。



第14図　溝状遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	10.6	−	〈3.6〉	ヘラミガキ　口唇部:縄文LR	ヘラミガキ	回転実測	ホリカタ
2	弥生	壺	−	−	〈5.3〉	ヘラ描横走沈線文　山形文	ハケ目→ヘラミガキ	断面実測	
3	弥生	甕	−	−	〈5.7〉	櫛描波状文→列点文	ヘラミガキ	断面実測	
4	縄文	?	−	−	〈2.3〉		ヘラミガキ	断面実測	

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
5	敲石	砂岩	1/1	6.8	4.0	1.2	34.5	左右側面・下端部に敲打痕	

第９表　Ｍ１号溝状遺構出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	−	−	〈5.1〉	ハケ目→ヘラミガキ　口唇部:縄文LR	ハケ目→ヘラミガキ	断面実測	
2	弥生	甕	−	−	〈3.4〉	縄文LR　ヘラ描山形文	ヘラミガキ	断面実測	
3	弥生	甕	12.8	−	〈6.0〉	ヘラナデ	ハケ目	回転実測	ｲ−5
4	弥生	壺	−	−	〈5.0〉	縄文LR　ヘラ描沈線	ヘラミガキ	回転実測	ｳ−3
5	弥生	甕	−	−	〈3.3〉	口唇部:縄文 口縁部:櫛描波状文・櫛描横線文	ヘラミガキ	断面実測	
6	弥生	甕	−	−	〈2.6〉	口唇部:刻み　櫛描横線文	ヘラミガキ	断面実測	ｲ−3
7	弥生	甕	−	−	〈4.3〉	口唇部:縄文　頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	断面実測	
8	弥生	甕	−	−	〈3.8〉		ヘラミガキ	断面実測	
9	弥生	甕	−	−	〈4.9〉	櫛描波状文	ヘラミガキ	断面実測	
10	弥生	甕	−	3.9	〈1.1〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	
11	弥生	壺	−	−	〈9.8〉	縄文　ヘラ描連弧文	剥落	断面実測	ｲ−5
12	弥生	高杯	−	9.8	〈5.7〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	坏部:ヘラミガキ　赤色塗彩 脚部:ハケナデ	完全実測	ｳ−4
13	弥生	鉢	11.0	4.8	〈5.4〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	回転実測	
14	弥生	甕	−	14.0	〈8.2〉	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ハケ目	回転実測	
15	土師器	カワラケ	10.6	5.6	〈2.7〉	ロクロナデ　底部:回転糸切り	ロクロナデ	回転実測　中世	
16	陶器	甕	−	14.0	〈4.7〉	ヘラナデ	ロクロナデ	回転実測　中世	

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
17	石鏃	黒曜石	1/1	2.5	1.5	0.4	1.2	無茎	ｳ−4
18	磨製石斧	砂岩	1/1	5.6	4.8	0.7	34.0	未完成品	ｲ−5
19	擦り石	安山岩	1/1	6.4	3.1	2.0	47.5	正面・裏面にすり面	ｲ−5
20	磨き石	輝石安山岩	1/1	4.3	1.3	0.6	4.2		ｳ−6

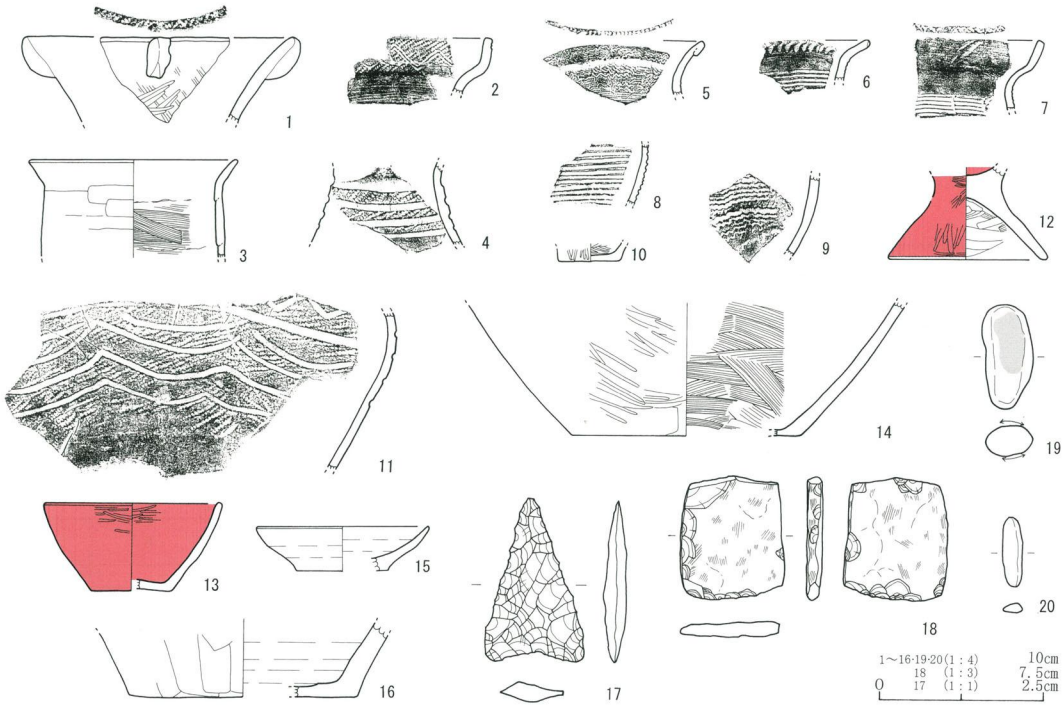
第10表　遺構外出土遺物観察表

第４節　　ピット

ピットは20個検出されたが調査範囲が道路幅という制約から性格を解明できるものは無かった。

第５節　遺構外出土遺物　（第15図）

本遺跡は弥生時代中期後半の遺構検出時に包含層化した黒色土から多くの弥生栗林期の土器と石器が出土した。ここでは遺構に伴わない資料であるが実測し提示しておく。



第15図　遺構外出土遺物実測図

第６節　調査のまとめ

今回の発掘調査では住居址6軒の検出に止まったが、長野県埋蔵文化財センターが行った「中部横断自動車道予定地」の調査結果と合わせると弥生中期栗林期の集落の南端を確認した事となろう。この集落は巨視的に見ると湯川縁に展開する栗林期の集落遺跡群の一角を担う。つまり下流より川原端遺跡、対岸の根々井芝宮遺跡や寄塚遺跡、上流の北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、更に上流の西八日町遺跡と栗林期集落が湯川両岸に展開する。これら遺跡群の時期は根々井芝宮が古相である他はほぼ同時期と考えられ、弥生中期後半に展開する集落群として捉えられる。

なぜ、これほどまでに湯川下流域に栗林期集落が集中するのかは不明であるが、長野市の松原遺跡のように一極に集中居住しないのが、逆に佐久地域の特徴とも考えられる。いずれにしても、森平遺跡の栗林期集落の詳細な分析は県埋蔵文化財センター調査分が報告された後行われるべきであろう。

森平遺跡全景　（奥にみえるのは浅間山、台地中央を右から左に湯川が流れる。）

森平遺跡全景（北より）

H1号住居址全景

H2号住居址全景

H3号住居址全景

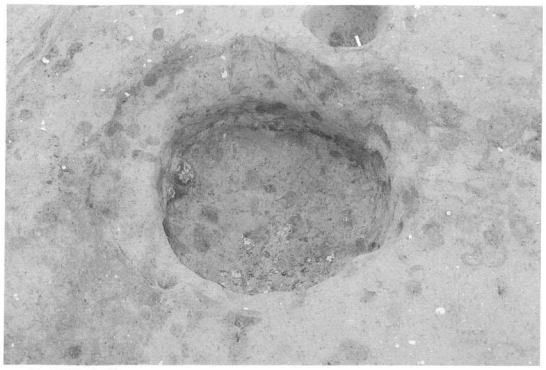
H4号住居址全景

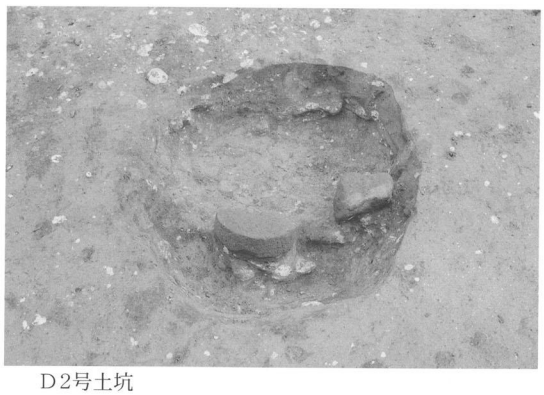
H4号住居址掘り方全景

H5号住居址全景

H6号住居址全景

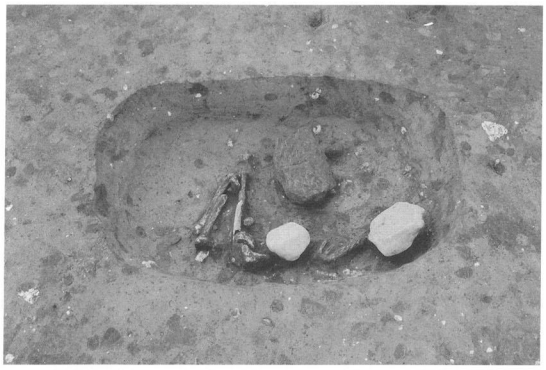
H6号住居址遺物出土状況


D1号土坑


D2号土坑

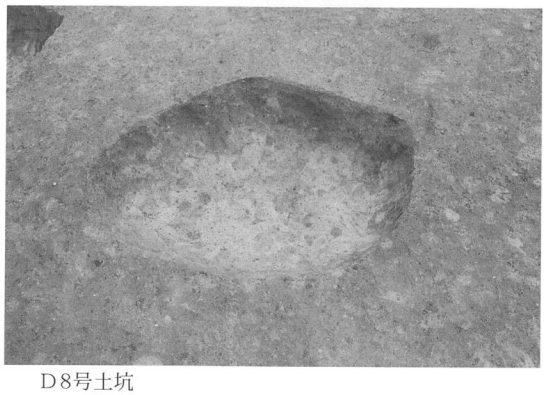
D3号土坑

D4号土坑


D5号土坑

D6号土坑

D7号土坑

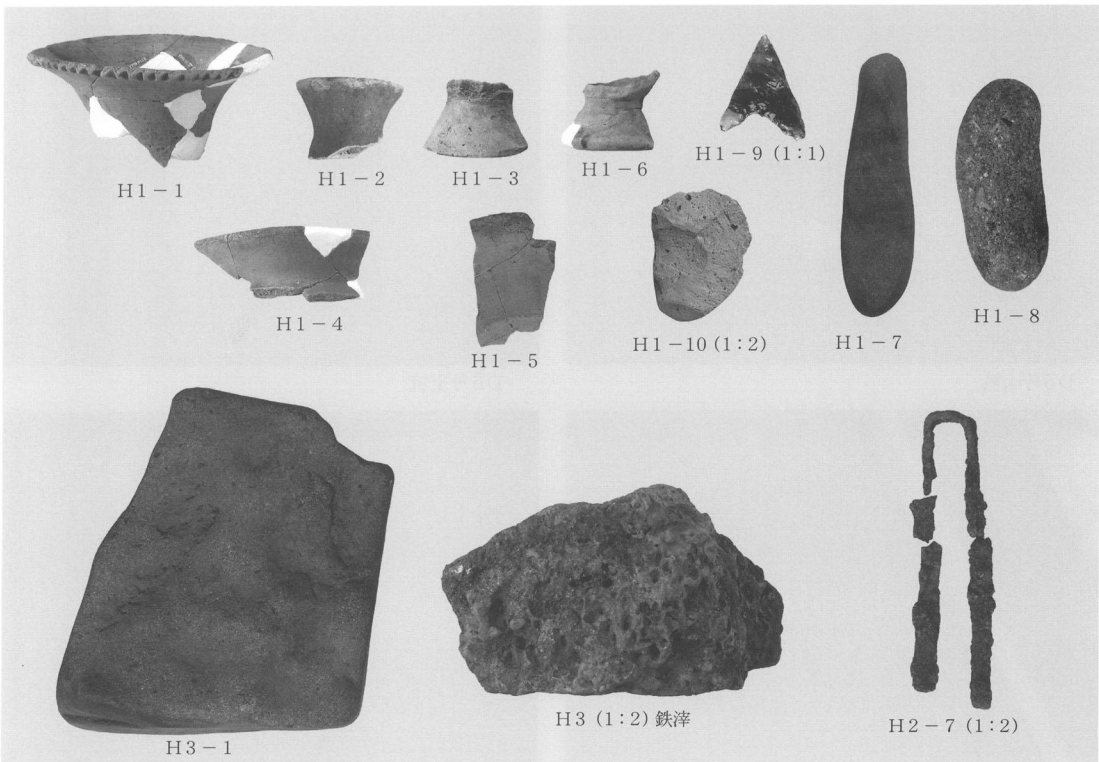

D8号土坑

D9号土坑

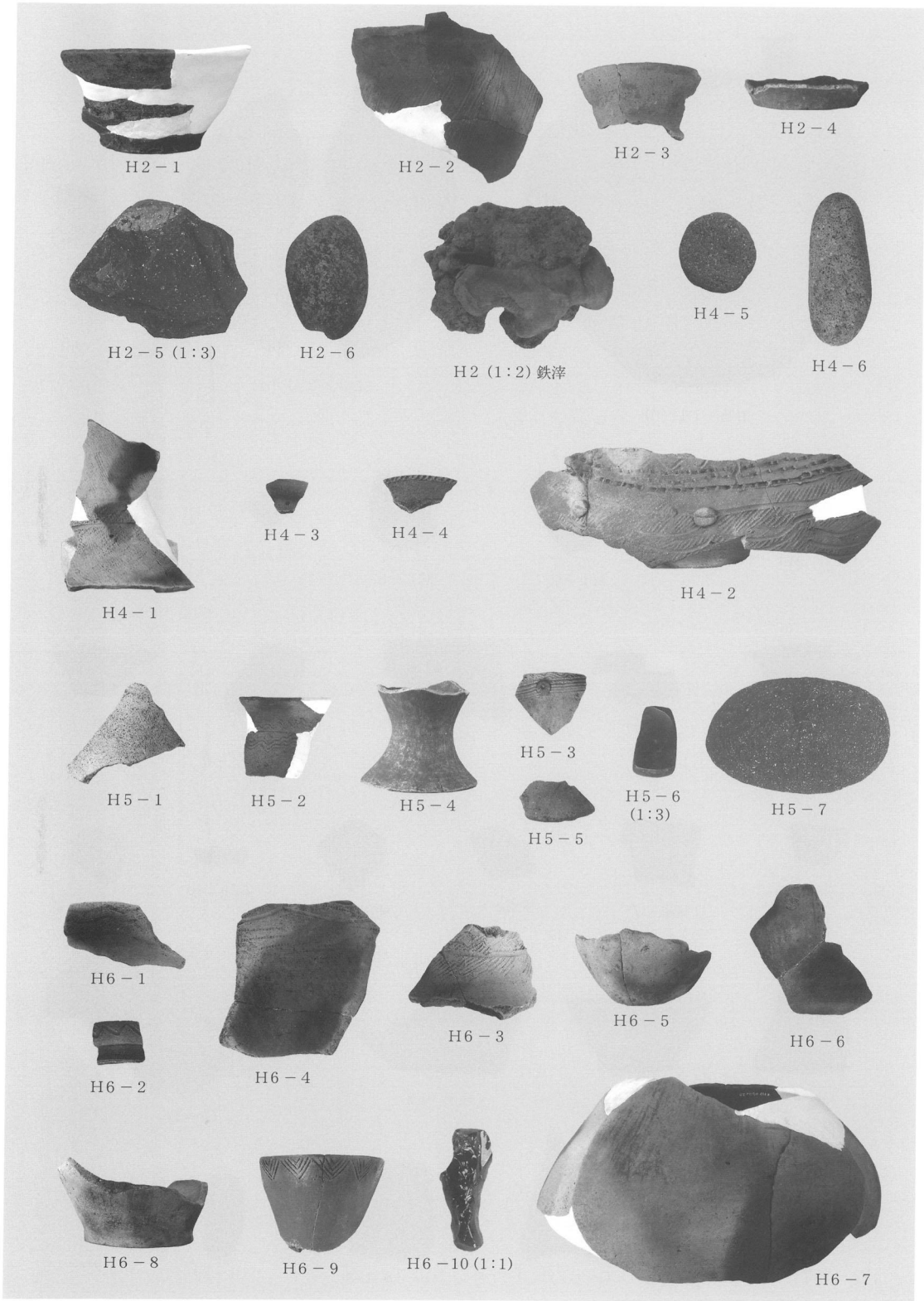
D10号土坑

M1号溝状遺構

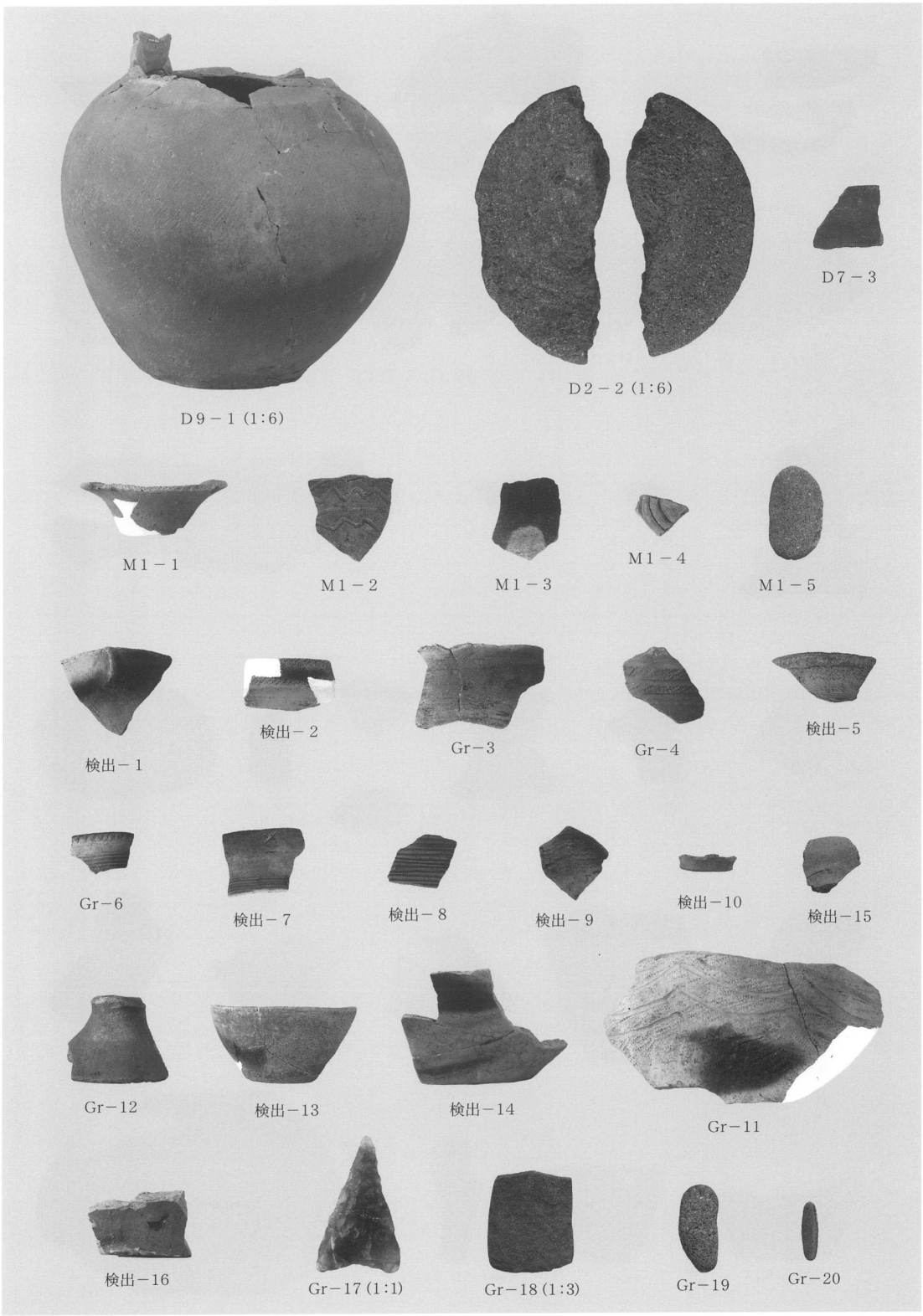
M2号溝状遺構



H1・H2・H3号住居址出土遺物



H2・H4・H5・H6号住居址出土遺物

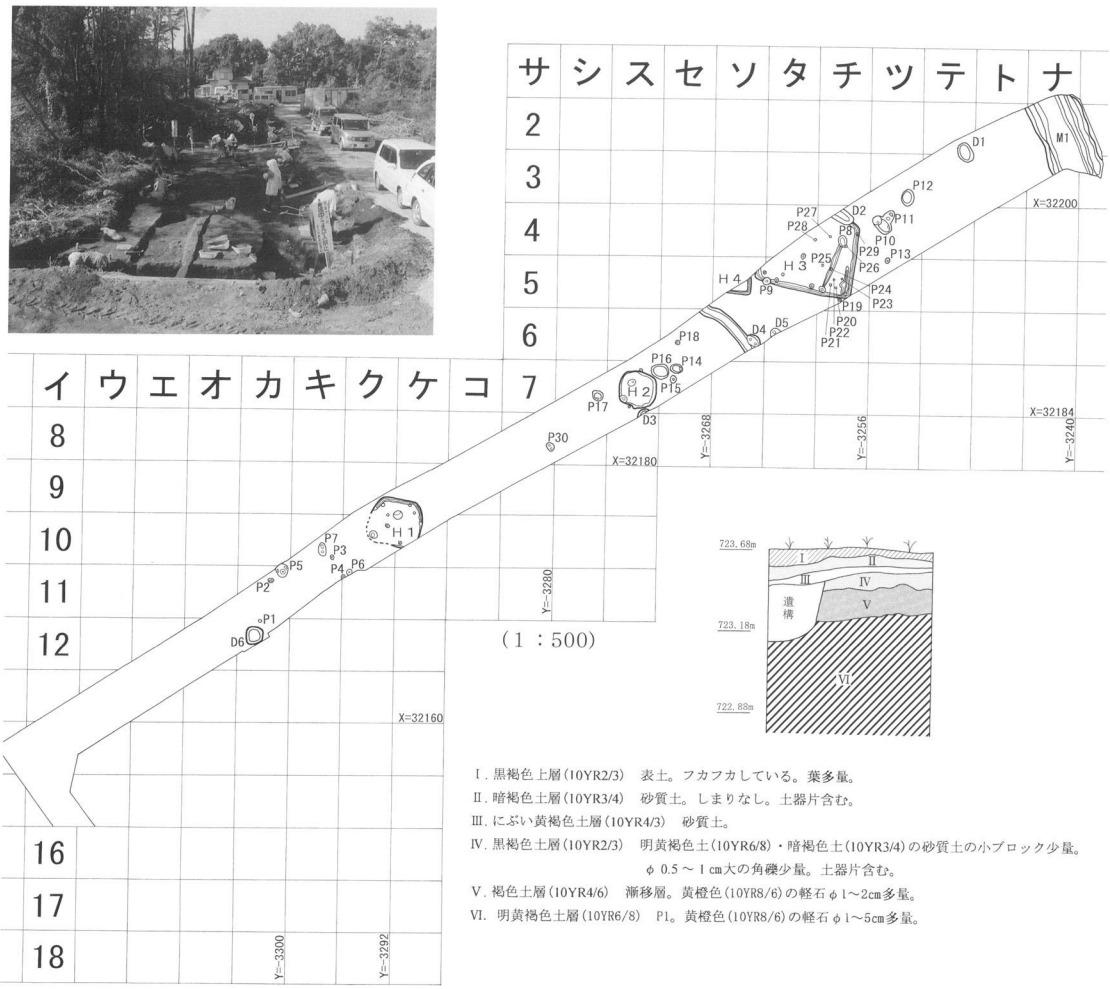


D2・D7・D9・M1遺構外出土遺物

第Ⅰ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

北近津遺跡Ⅱは湧玉川を望む田切台地の中央北よりに位置し、北側に中部横断自動車道用地が併走する。市道改良に伴う発掘調査のため、調査区は幅5m・長さ96mの西区と幅5m・長さ65mの東区に分かれる。この内、集落址が発見されたのは西区である。調査区の周辺は宅地及び畑地と山林になっている。地形は南西方向に傾斜し海抜723m内外である。周辺部では何ヶ所かの調査履歴があり、今回の調査地点に近接して北近津遺跡が調査されている。調査面積648㎡で佐久市の埋蔵文化財調査としては先駆けの時期にあたる昭和47年冬に行われている。検出遺構は住居址4軒と土坑3基であり、住居址の所産時期は5世紀後半から6世紀代と考えられる。この調査結果は古墳時代中期である5世紀代に集落が田切台地の奥まで進出している状況をよく示している。また、今回の調査区北側は「中部横断自動車道路」の建設予定地であり、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われている。調査は途中であるが、湧玉川により開析された田切台地の縁辺部を中心に弥生時代末から古墳時代初



Ⅰ. 黒褐色上層(10YR2/3)　表土。フカフカしている。葉多量。
Ⅱ. 暗褐色土層(10YR3/4)　砂質土。しまりなし。土器片含む。
Ⅲ. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　砂質土。
Ⅳ. 黒褐色土層(10YR2/3)　明黄褐色土(10YR6/8)・暗褐色土(10YR3/4)の砂質土の小ブロック少量。
φ 0.5 ～ 1 cm大の角礫少量。土器片含む。
Ⅴ. 褐色土層(10YR4/6)　漸移層。黄橙色(10YR8/6)の軽石φ1～2cm多量。
Ⅵ. 明黄褐色土層(10YR6/8)　P1。黄橙色(10YR8/6)の軽石φ1～5cm多量。

第16図　北近津遺跡Ⅱ西区調査全体図及び標準土層図

頭の集落及び南東コーナーにカマドを持つ古代末の小規模な集落址が発見されている。昭和47年に調査された地点とは明らかに遺構の密度も時代も異なり、古代における台地の利用変遷に興味が持たれる結果となっている。

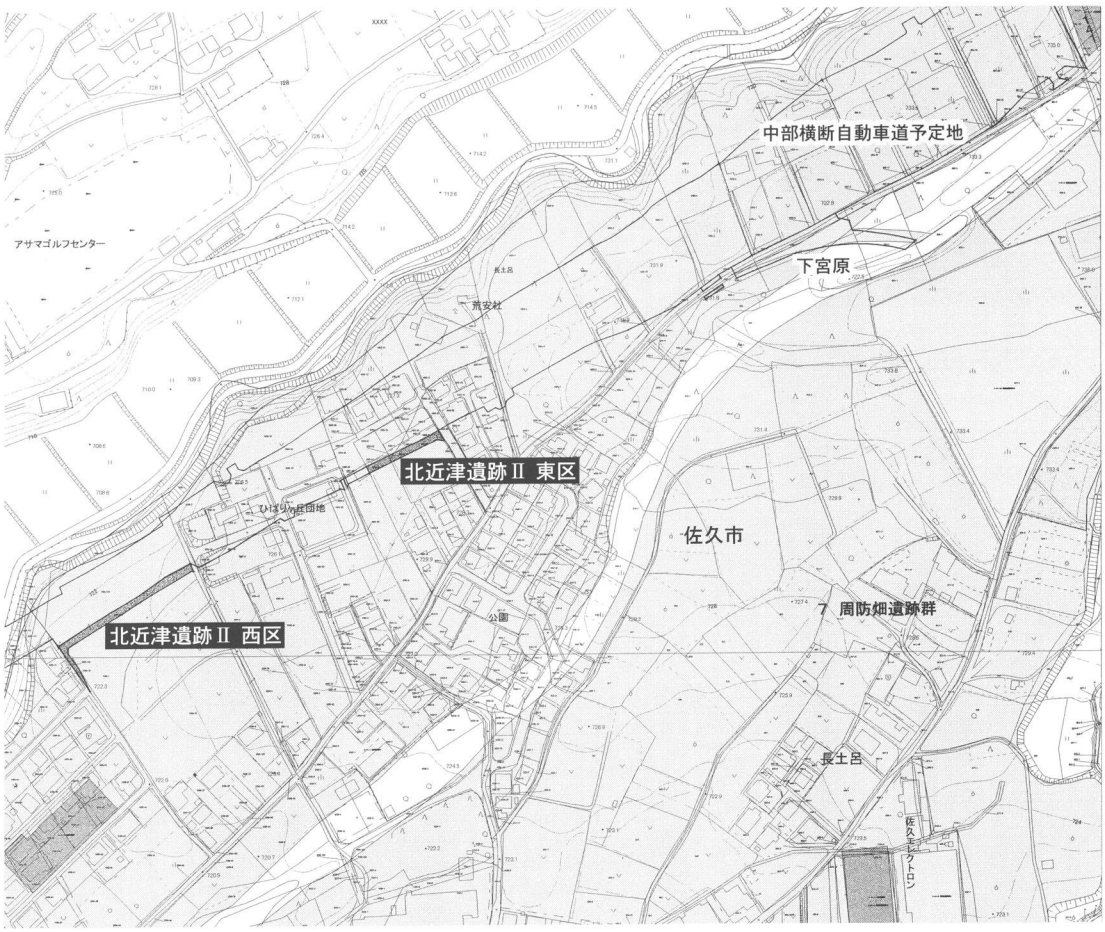
第２節　基本層序

基本層序は6層に分かれる。Ⅳ～Ⅵ層は浅間山噴火に起因する火山灰層であり、Ⅳ層上面が遺構確認面であった。また、東西の調査区では現在の地表はほぼ平坦であったが、東地区は東に向かって大きく地形が落ち込み、黒色土が厚く堆積していた。

第３節　検出遺構と遺物の概要

遺　構　　住居址　　4軒
　　弥生末～古墳初頭2　不明2
　　土　坑　　6基
　　溝状遺構　2本
　　ピット　　30個

遺　物　　弥生（箱清水式・Ｓ字甕）
　　土師器　須恵器
　　石　器



第17図　北近津遺跡周辺遺跡位置図（1：4000）

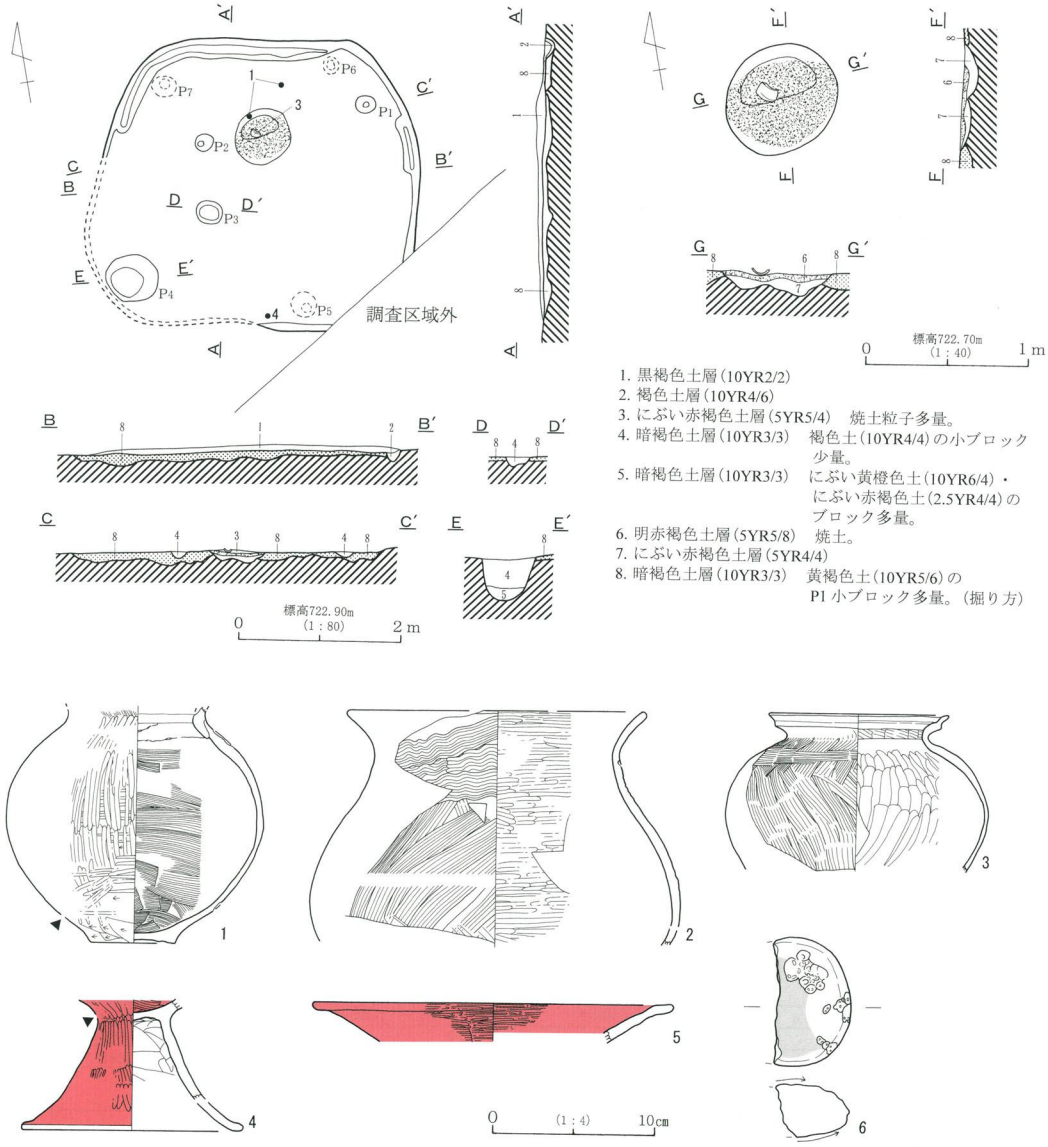
第Ⅱ章　　遺構と遺物

第１節　　竪穴住居址

（１）Ｈ１号住居址　（第18図）

本住居址は、西調査区中央であるク-9・10、ケ-9・10Grに位置する。残存状態は検出された部分は良好であるが、南東コーナー部は調査区域外となる。

形態は隅丸方形で、規模は検出部分で北壁2.66m・南壁2.40m（推定）・西壁3.17m（推定）・東壁2.50mである。壁高さは南壁中央で最大8cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積



第18図　H1号住居址及び出土遺物実測図

は11.5㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は全体に硬質で、貼り床の厚みは3～19cm、掘り方は非常に小さな凹凸が激しく掘り込まれていた。壁溝は北壁と東壁の一部で確認された。幅は17～24cm、深さは15cmを測る。ピット等は掘り方検出時も含め7ヶ所確認された。規模はP1が径24cm・深さ8cm、P2が径22cm・深さ9cm、P3が径32cm・深さ11cm、P4が径65cm・深さ50cm、P5が径31cm・深さ38cm、P6が径20cm・深さ8cm、P7が径31cm・深さ7cmを測る。

炉は住居址中央やや北寄りで検出された。形態は円形で、住居址規模に比べて大きかった。規模は長軸70cm・短軸65cm、焼土の厚みは5cmで良く焼けていた。

出土遺物は覆土中のものが多かったが6点を図示した。1はやや小型の壺で口縁部を欠損している。胴部は丁寧なミガキが施されているが無文である。2は甕の胴部から口縁部の破片である。頸部から口縁部には櫛描波状文、胴部には羽状構成をとると考えられる櫛描文が施されている。3はいわゆる「S字甕」と呼ばれる口縁部が特徴的な甕である。胴部上半の頸部に近い部分に横方向のハケ目調整が行われている。4と5は高坏の脚部と坏部であり、同一個体と考えられるが接合点が見いだせない。いずれも赤彩が施されている。6はすり面と敲き痕がある石器である。

これらの遺物より本址は弥生時代末から古墳時代初頭に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	－	5.1	〈14.5〉	頸部:ハケ目　胴部:ヘラケズリ→ミガキ 底部:ヘラケズリ	ハケ目	完全実測　底部完存 ※外面胴部上半:赤色塗彩？	P5
2	弥生	甕	18.4	－	〈13.2〉	口縁:ヨコナデ・櫛描波状文(9本) 胴部:ハケ目・櫛描斜走文(8～9本)羽状	ミガキ	回転実測　口縁一部	
3	弥生	S字甕	11.0	－	〈9.6〉	口縁:ヨコナデ　頸部～胴部:ハケ目	口縁:ヨコナデ　頸部:ハケ目 胴部:ヘラナデ	回転実測 口縁1/5	
4	弥生	高坏	－	13.6	〈8.0〉	ミガキ→赤色塗彩	坏部:ミガキ→赤色塗彩 脚部:ヘラナデ　裾部:ヨコナデ	完全実測　脚部破片	
5	弥生	高坏	22.0	－	〈2.4〉	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測	P5

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
6	敲石	安山岩	1/2	7.9	〈4.7〉	3.2	162.4	擦り面と敲き痕がある。	

第11表　H1号住居址遺物観察表

（2）H2号住居址　（第19図）

本住居址は、西調査区東よりであるス-7Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は隅丸方形を呈する。規模は北壁2.46m・南壁1.90m・西壁2.12m・東壁2.18mを測る。壁高さは東壁南よりで最大14cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－10°－Eを示す。住居址の床面積は5.6㎡を測り、一般的な住居址に比べ非常に小さい。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1～11cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁と北壁東よりの一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約13～31cm・深さ4.5～13cmを測る。ピットは住居址外側も含め3ヶ所確認され、規模はP1が径47cm・深さ19cm、P2が径26cm・深さ11cm、P3が径22cm・深さ7cmを測る。また、P１からは図示した1の甕が破砕した状態で出土した。

炉は住居址中央西よりに検出された。形態は円形で、規模は径62cmを測る。住居址の規模に比べ

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	甕	19.7	7.6	28.2	櫛描波状文(7～9本)　口縁:ヨコナデ 胴部:ハケ目・ミガキ　底部:ミガキ	ミガキ	完全実測　口縁2/3　底部完存	P1、ス－7
2	弥生	甕	16.2	－	〈13.1〉	ハケ目・ミガキ 口縁上部:櫛描波状文(4～5本) 口縁部:櫛描斜走文(9本)　頸部:櫛描簾状文(4連止10本)　胴部:櫛描斜走文(羽状7～9本)	ミガキ	回転実測　口縁1/3	
3	弥生	台付甕	－	8.4	〈12.8〉	ハケ目　櫛描斜走文(5本)	甕部:ヘラナデ　台部:ヘラナデ	回転実測　底部1/3	Ⅲ区、D3Ⅲ・Ⅳ区、ス-7
4	弥生	高坏	24.8	－	〈6.2〉	ミガキ	ミガキ	完全実測　口縁1/4・底部はほぼ完存	Ⅱ区
5	弥生	高坏	12.6	－	〈5.2〉	ヨコナデ→ハケ目→ヘラケズリ	ヘラナデ	完全実測　坏部完存	
6	弥生	高坏	13.7	－	〈5.9〉	ヘラケズリ→ミガキ	坏部:ハケ目→ミガキ 脚部:ハケ目→黒色処理	完全実測	Ⅱ・Ⅳ区
7	弥生	高坏	9.6	7.8	8.1	ハケ目→口縁ヨコナデ→ミガキ	坏部:ヘラナデ→ミガキ 脚部:ハケ目→裾部:ヨコナデ	底部ほぼ完存・口縁3/4	Ⅰ区

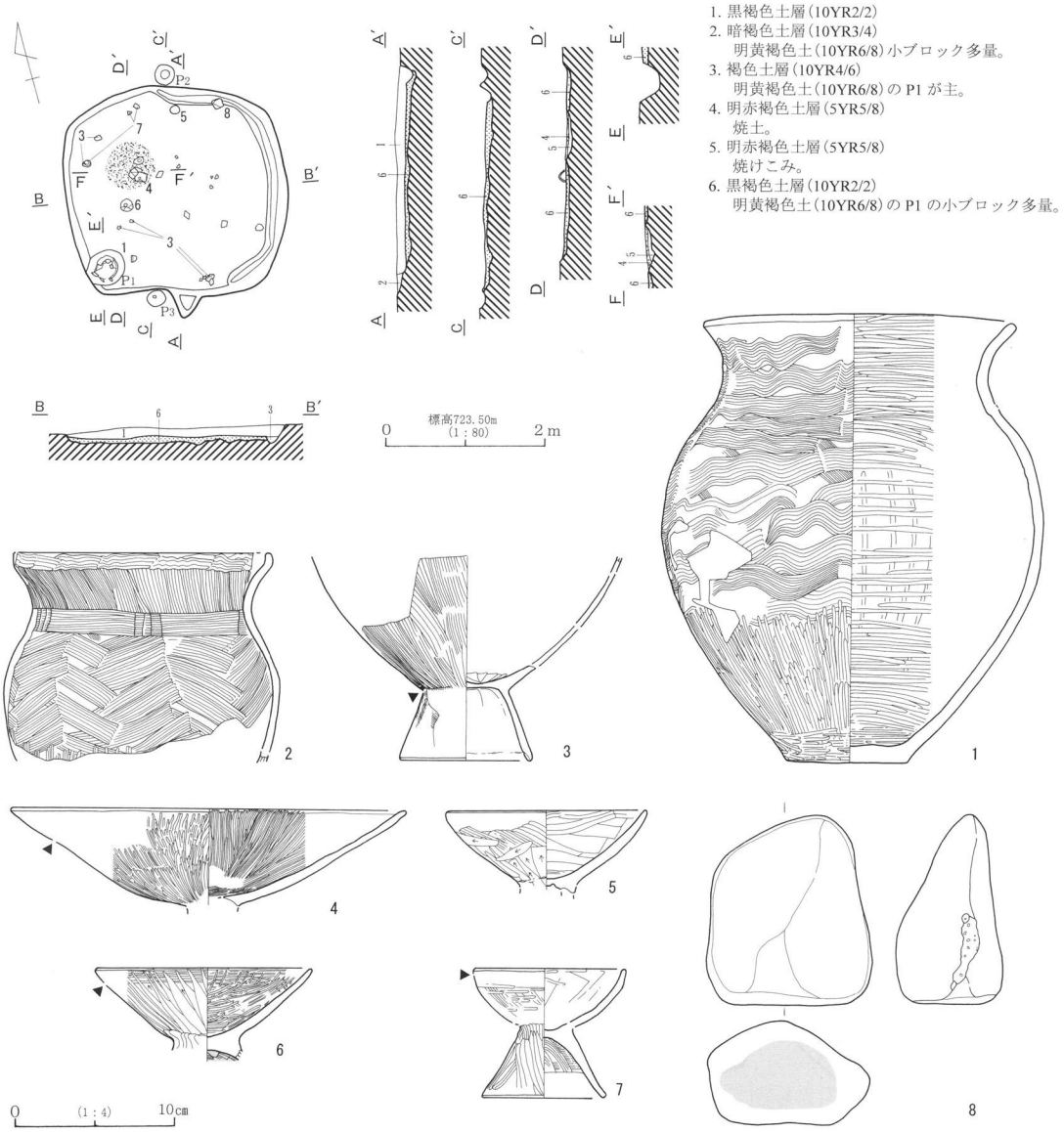
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
8	磨り石	輝石安山岩	1/1	11.9	10.3	6.4	1023.5	非常によく擦られている。	

第12表　H2号住居址出土遺物観察表

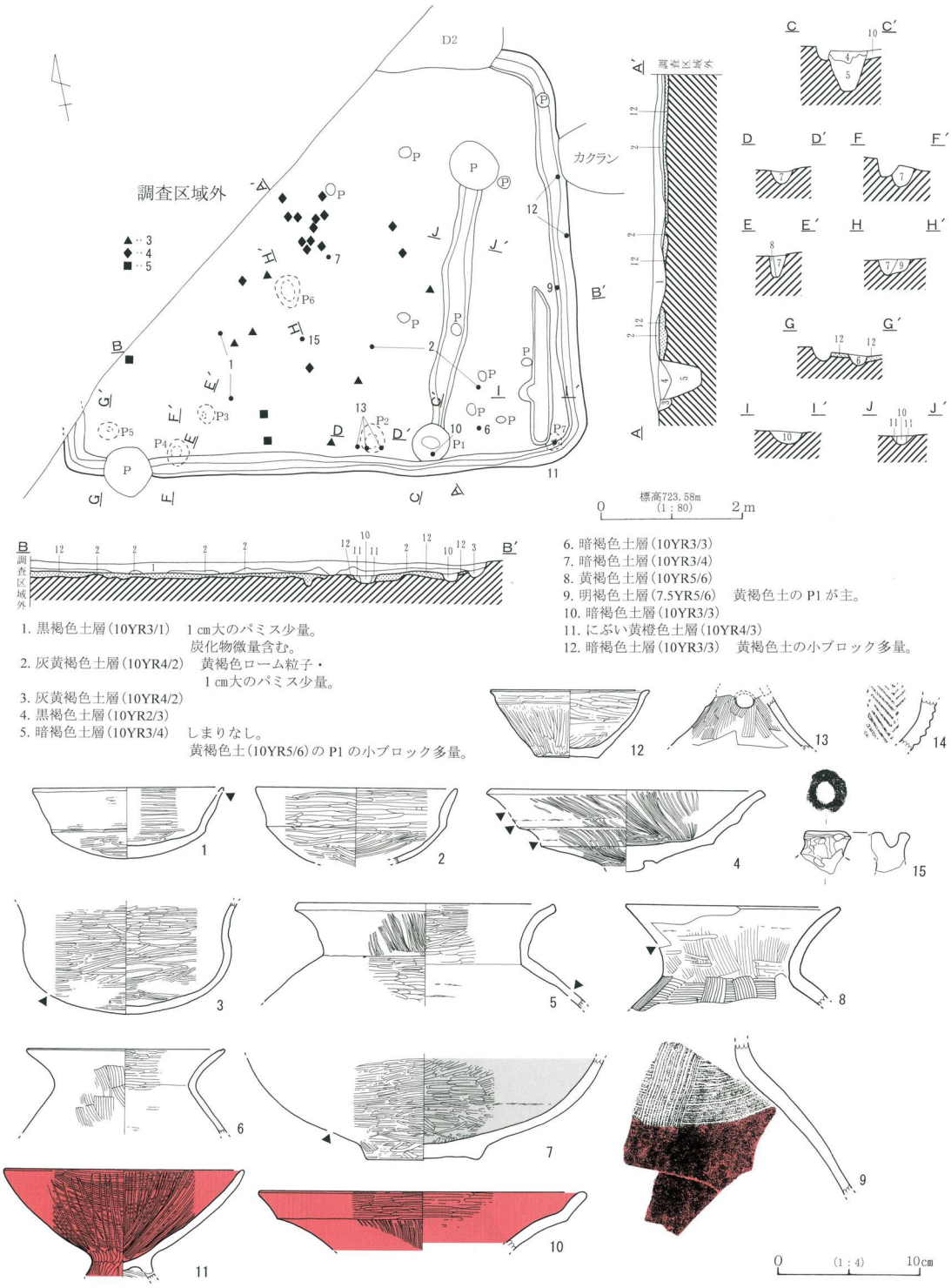
て比較的大きい。焼土の厚さは4cmを測る。

出土遺物は比較的多かった。1は甕で口縁部から胴部中位まで櫛描波状文が施されている。2は甕で頸部に櫛描簾状文、胴部に縦方向の羽状構成をとる櫛描文、口唇部に横方向の櫛描文を施す。3は特徴からＳ字甕の脚部と胴部と考えられる。胴部に細かなハケ目を施す。4は高坏の坏部で内外面丁寧なミガキを施す。5～7は小型の高坏で、7は全容が把握できる。いずれもミガキとハケ目の残るナデにより調整が行われている。8は磨り石である。

これらの遺物より本址は弥生時代末から古墳時代初頭に位置づけられると考える。



第19図　H2号住居址及び出土遺物実測図



1. 黒褐色土層(10YR3/1)　1cm大のパミス少量。炭化物微量含む。
2. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄褐色ローム粒子・1cm大のパミス少量。
3. 灰黄褐色土層(10YR4/2)
4. 黒褐色土層(10YR2/3)
5. 暗褐色土層(10YR3/4)　しまりなし。黄褐色土(10YR5/6)のP1の小ブロック多量。
6. 暗褐色土層(10YR3/3)
7. 暗褐色土層(10YR3/4)
8. 黄褐色土層(10YR5/6)
9. 明褐色土層(7.5YR5/6)　黄褐色土のP1が主。
10. 暗褐色土層(10YR3/3)
11. にぶい黄橙色土層(10YR4/3)
12. 暗褐色土層(10YR3/3)　黄褐色土の小ブロック多量。

第20図　H3号住居址及び出土遺物実測図

（3）H3号住居址　（第20図）

本住居址は、西調査区北よりであるソ-5、タ-4・5、チ-4・5Grに位置する。残存状態は北西側が調査区域外となる。新旧関係はD2より本址の方が古い。

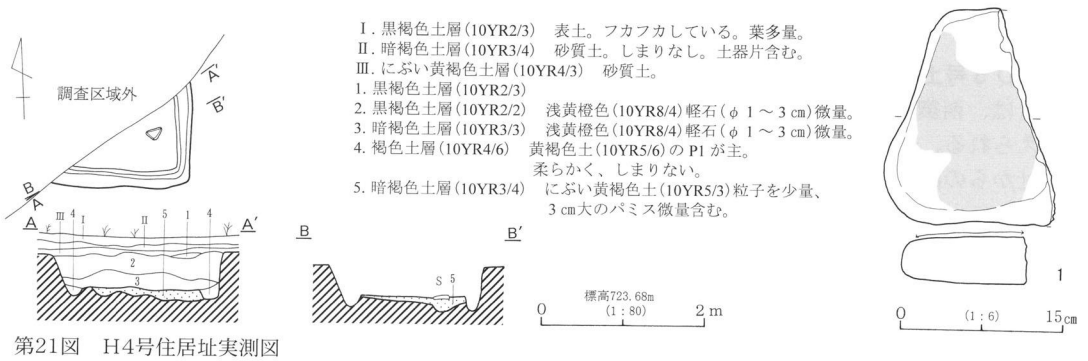
形態は方形と考えられる。規模は北壁2.28m（検出）・南壁7.22m・西壁0.35m（検出）・東壁5.35mで、壁高さは南東コーナーで16cmを測る。壁は緩やかに上がる。主軸方位は南壁を軸とするとN－80°－Wを示す。住居址の床面積は28.4㎡を測る。覆土は自然堆積であった。ピットは掘り方検出時も含め7ヶ所確認され、規模はP1が径55cm・深さ57cm、P2が径40cm・深さ18cm、P3が径27cm・深さ30cm、P4が径37cm・深さ22cm、P5が径30cm・深さ4cm、P6が径44cm・深さ18cm、P7が径23cm・深さ13cmを測る。壁溝は検出部分で全周し、規模は幅10～42cm・深さ6～18cmを測る。炉やカマドは検出されなかった。

本址からの出土遺物は所産時期の幅があるものが多く、床面全面に散らばった状態で出土した。1～3は土師器坏であり、1と2は須恵器模倣のタイプである。4は高坏の坏部で、丁寧なミガキが施されている。5～7は甕あるいは壺の口縁部と底部である。7は内面に黒色処理を施す。8は弥生の壺で頸部に櫛描文を施す。9は弥生の壺の胴部で、頸部に櫛描文を施す。10は壺の口縁部で内外面赤彩を施す。11は高坏坏部で内外面赤彩と丁寧なミガキを施す。12は小型の鉢で丁寧なミガキを施す。13は器台か高坏の脚部で円形の透かしがある。14と15は縄文土器片で、14は諸磯C式、15は曽利式と考えられる。

本址からの出土遺物は1～3が古墳後期、4～7が古墳中期、8～13が弥生終末、14～15が縄文である。これらのいかなる時期の遺物が本址に伴うかであるが、縄文については混入遺物と考えられる。床面上の遺物はほとんど同レベルである。かつ、また、炉とカマドの存在については、北壁にカマドがあった可能性、北西に炉がよっている可能性のいずれもが指摘できる。また、住居址の形態もいずれの時期もあてはまる。よって現時点での時期決定は保留したい。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	土師器	坏	13.6	－	5	ヨコナデ→ヘラケズリ→ミガキ	ミガキ	完全実測　底部1/4・口縁一部	
2	土師器	坏	14.2	－	〈5.3〉	ミガキ	ミガキ	回転実測　口縁1/3	
3	土師器	坏	－	－	〈7.8〉	ヨコナデ・ヘラケズリ→ミガキ	ミガキ	完全実測　底部2/3	
4	土師器	高坏	19.8	－	〈5.8〉	ミガキ	ミガキ	完全実測　口縁1/2	タ－5
5	土師器	甕	18.4	－	〈7.4〉	口縁・胴部:ミガキ	口縁:ミガキ　胴部:ナデ	回転実測　口縁破片(一部)	
6	土師器	甕	14.0	－	〈5.9〉	ヨコナデ→ハケ目	ミガキ	回転実測　口縁1/8 ※磨耗	
7	土師器	甕	－	7.6	〈7.2〉	胴部・底部:ミガキ	ミガキ→黒色処理	完全実測　底部完存	D2、P12ｱｷ
8	弥生	壺	15.2	－	〈7.5〉	ヨコナデ→ハケ目→ミガキ 頸部:櫛描簾状文→櫛描垂下文(8本2条:4ヶ所)	ハケ目	完全実測　口縁1/3	P1
9	弥生	壺	－	－	－	ミガキ→赤色塗彩 櫛描横走平行線文→櫛描垂下文	口縁:ミガキ→赤色塗彩	拓本　破片　※内面剥離	
10	弥生	壺	23.2	－	〈4.1〉	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測　口縁1/10	
11	弥生	高坏	17.0	－	〈7.7〉	ミガキ→赤色塗彩	坏部:ミガキ→赤色塗彩　脚部:ハケ目	完全実測　口縁1/2	
12	土師器	小形鉢	11.2	4.4	4.8	ミガキ	ミガキ	完全実測　ほぼ完存 ※磨耗	
13	土師器	高坏	－	－	－	ヨコナデ→脚柱部:ハケ目	ヨコナデ	※透かし有(5コ位?焼成前穿孔)	P1
14	縄文	深鉢	－	－	－		ナデ	拓本　破片　※諸磯	H2
15	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ・ミガキ		破片実測　破片　拓本	

第13表　H3号住居址出土遺物観察表



第21図　H4号住居址実測図

（4）Ｈ４号住居址　（第21図）

本住居址は、西調査区中央であるソ-5Grに位置する。残存状況は良好であるが、ほとんどが調査区域外となり、住居址の南東コーナーのみの検出となった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は検出部分で南壁1.68m・東壁1.20mを測る。壁高さは南東コーナー部で43cmを測る。壁溝は調査部分全体で検出され、規模は幅16～24cm・深さ10～18cmを測る。床は全体に硬質で、6～13cmの厚さで貼られていた。

本址からの出土遺物は花崗岩の磨石1点が出土している。

第２節　土　坑

（1）Ｄ1号土坑　（第22図）

本址は、西調査区北よりのテ-2・3Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はＮ－24°－Ｗを示す。規模は長軸1.60m・短軸1.13m・深さ29cmを測る。

本址からの出土遺物は図示できるものはなく、弥生甕・壺片各1点があったのみである。本址の帰属時期を確定できるものはなかった。

（2）Ｄ２号土坑　（第22図）

本址は、西調査区北よりのチ-4Grに位置する。残存状態は西側が調査区外となる。形態は楕円形と考えられる。規模は検出部分で長軸1.35m・短軸1.03m・深さ73cmを測る。

本址より出土遺物は5点を図示した。1は土師器の甕であり、内外面丁寧なミガキが施されている。底部を欠損する。H3号住居址出土の破片と接合関係がある。2は土師器坏で5世紀代を指標とするタイプである。内面にミガキが施されている。3と4は縄文土器で、3は勝坂、4は諸磯Ｃの範疇に含まれる。5は敲き石である。本址はこれらの遺物から古墳時代中期から後期の所産と考えられる。

（3）Ｄ３号土坑　（第22図）

本址は、西調査区中央部のス-7・8Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は不明である。規模は検出部分で長軸1.23m・短軸0.35m・深さ28cmを測る。本址からは図示した弥生高坏が出土した。坏部の破片で内外面赤色塗彩が施されている。

本址の帰属時期は不確実ではあるが弥生終末から古墳初頭と考えられる。

（4）Ｄ４号土坑　（第22図）

本址は、西調査区北よりのソ-6Grに位置する。残存状態は良好であるが、南側がM2号溝状遺構により削平されている。形態は円形で、長軸方位はＮ－55°－Ｗを示す。規模は長軸1.15m・短軸0.98m・深さ26cmを測る。また、本址の底面にはピットが2ヶ所確認された。規模はＰ１が径19cm・深さ8cm、Ｐ2が径22cm・深さ8cmを測る。

本址からの出土遺物はなかった。

（5）Ｄ５号土坑　（第22図）

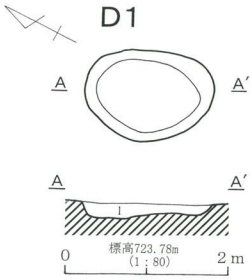
本址は、西調査区北よりのタ-6Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は円形と考えられる。規模は検出部分で長軸0.82m・短軸0.46m・深さ30cmを測る。

本址からの出土遺物はなかった。

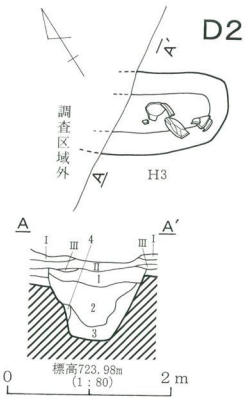
（6）Ｄ６号土坑　（第22図）

本址は、西調査区西よりのカ-12Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はＮ－2°－Ｅを示す。規模は長軸1.68m・短軸1.13m・深さ20cmを測る。

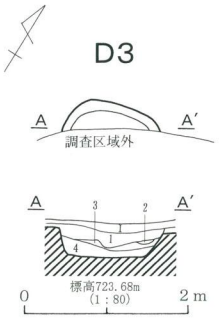
本址よりの出土遺物はなかった。



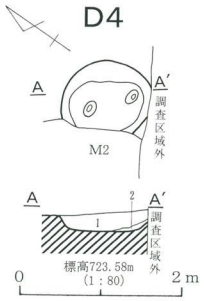
1. 黒褐色土層(10YR3/1)
　黒色土(10YR2/1)の小ブロック混入。



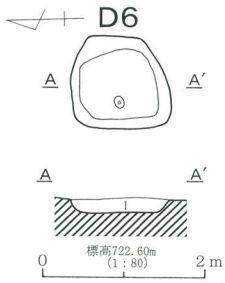
Ⅰ. 黒褐色土層(10YR2/3)
　表土。フカフカしている。葉多量。
Ⅱ. 暗褐色土層(10YR3/4)
　砂質土。しまりない。土器片含む。
Ⅲ. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)
　砂質土。
1. 黒褐色土層(10YR2/3)
　0.5～1 cm大の角礫・1～2 cm大の
　黄橙色(10YR8/6)軽石を少量。
　暗褐色土(10YR3/4)の小ブロック、
　まだら状に多量。
2. 暗褐色土層(10YR3/3)
　3～5 cm大の角礫・1～2 cm大の
　黄橙色(10YR8/6)軽石を少量。
　暗褐色土(10YR3/4)の小ブロック、
　まだら状に多量。炭・土器片出土。
3. 暗褐色土層(10YR3/4)
　黄褐色土(10YR5/6)P1のブロック多量。
4. 褐色土層(10YR4/6)
　明黄褐色土(10YR6/8)のP1が主。



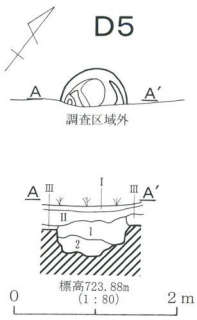
Ⅰ. 黒褐色土層(10YR2/3)
　表土。フカフカしている。葉多量。
1. 暗褐色土層(10YR3/4)
　にぶい褐色土(7.5YR5/4)のブロック・
　浅黄橙色土(10YR8/4)の軽石多量。
2. 極暗褐色土層(7.5YR2/3)
3. 暗褐色土層(10YR3/4)
4. 暗褐色土層(10YR3/3)
　にぶい褐色土(7.5YR)のブロック少量。



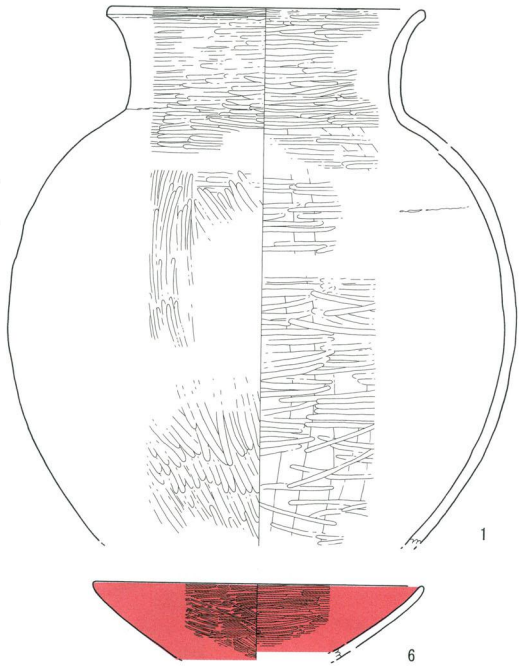
1. 黒褐色土層(10YR2/3)
　1 cm大の小石少量混入。
2. 暗褐色土層(10YR3/4)
　灰黄褐色土(10YR4/2)少量混入。



1. 黒褐色土層(10YR2/2)
　黒褐色土(10YR2/3)の
　小ブロック多量。



Ⅰ. 黒褐色土層(10YR2/3)
　表土。フカフカしている。葉多量。
Ⅱ. 暗褐色土層(10YR3/4)
　砂質土。しまりない。土器片含む。
Ⅲ. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)
　砂質土。
1. 暗褐色土層(10YR3/3)
　褐色土(7.5YR4/6)P1の小ブロック少量。
2. 灰褐色土層(7.5YR4/2)
　褐色土(7.5YR4/6)P1の小ブロック多量。



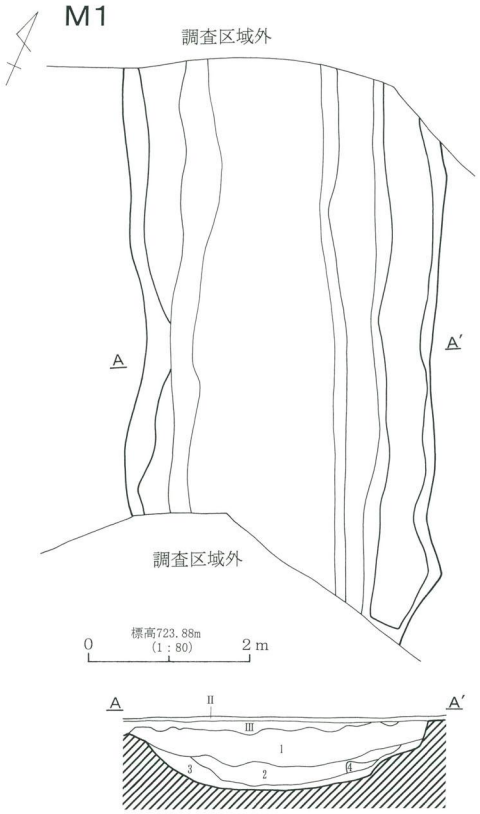
第22図　土坑及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	土師器	甕	19.6	－	〈32.8〉	ミガキ	口縁:ミガキ　胴部:ヘラナデ→ミガキ	回転実測　口縁1/3 ※外面剥離	D2、H3
2	土師器	坏	－	－	－	口縁:ヨコナデ　体部:ヘラケズリ	放射暗文	破片実測　破片	D2、H3
3	縄文	深鉢	－	－	－		ナデ	拓本　口縁破片	D2－4層
4	縄文	深鉢	－	－	－		ナデ	拓本　胴部破片	D2－4層
6	弥生	高坏	20.3	－	〈4.7〉	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測　口縁1/6	D3Ⅲ区、ｽ－7

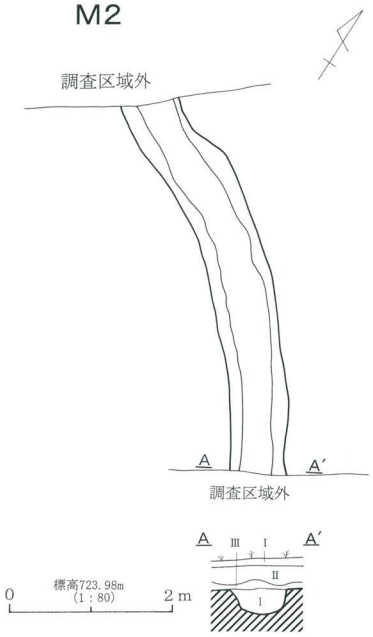
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
5	敲き石	安山岩	1/1	7.5	6.2	4.8	263.3	側面と平面に敲き痕あり	D2

第14表　土坑出土遺物観察表

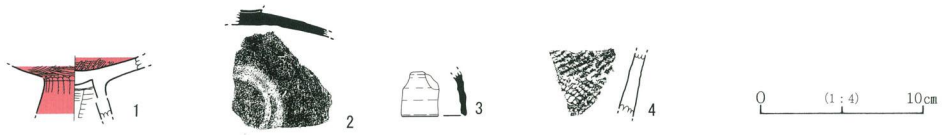
第３節　溝状遺構



Ⅱ. 暗褐色土層(10YR3/4)　砂質土。しまりない。土器片含む。
Ⅲ. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂質土。
1. 黒褐色土層(10YR3/1)　1㎝大のパミス・0.5㎝大の小石少量混入。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)　0.5㎝大の小石・黒色土、微量混入。
3. 褐色土層(10YR4/4)　褐色土のブロック。
4. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　黄色ローム粒子、少量混入。



Ⅰ. 黒褐色土層(10YR2/3)　表土。フカフカしている。葉多量。
Ⅱ. 暗褐色土層(10YR3/4)　砂質土。しまりない。土器片含む。
Ⅲ. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　砂質土。
1. 黒褐色土層(10YR2/2)　1～2㎝大の角礫微量。
明黄褐色土(10YR6/8)のP1小ブロック少量。



第23図　溝状遺構実測図

（1）M1号溝状遺構　　（第23図）

本址は、西調査区北端のト-2、ナ-1・2・3、ニ-2・3Grに位置する。残存状態は良好であるが、北側と南側が調査区域外となる。溝は南北方向に延び、溝断面形状は逆台形を示す。底面はほぼ平坦であったが、東側の溝立ち上がり部分には段状のテラスがある。覆土は自然堆積であった。規模は検出部分で全長6.10m、幅3.5～3.92m、深さ83～110cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示した2点は表層からの出土である。1は弥生高坏で内外面赤彩が施されている。2は須恵器蓋である。つまみ部分が僅かに残存する。

本址は田切台地を直交するような掘り方であり、何らかの区画溝と考えられるが、所産時期については出土遺物が少なく不明である。

（2）M2号溝状遺構　　（第23図）

本址は、西調査区中央のソ-6Grに位置する。残存状態は良好である。溝は南北方向から西方向にやや屈曲する形態で、溝断面形状は逆台形状を示す。規模は検出部分で全長4.80m、幅0.66～0.78m、深さ24～30mを測る。

本址より出土遺物は2点を図示した。いずれも表層からの出土であり、3は須恵器坏蓋の口縁部、4は羽状構成をとる縄文が施文されている。この他に破片で須恵器甕、土師器甕片、縄文片等が出土している。本址も出土遺物が少なく所産時期は不明である。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	高坏	－	－	(4.0)	ミガキ→赤色塗彩	坏部:ミガキ→赤色塗彩　脚部:ハケ目	回転実測　破片	M1－1層南
2	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ→天井部:回転ヘラケズリ→つまみ貼付(つまみ欠損)	ロクロナデ	拓本　天井部破片	M1－1層南
3	須恵器	杯蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測　口縁破片	M2－1層下部
4	縄文	深鉢	－	－	－	縄文RL、羽状構成	ナデ	拓本　胴部破片	M2－1層下部

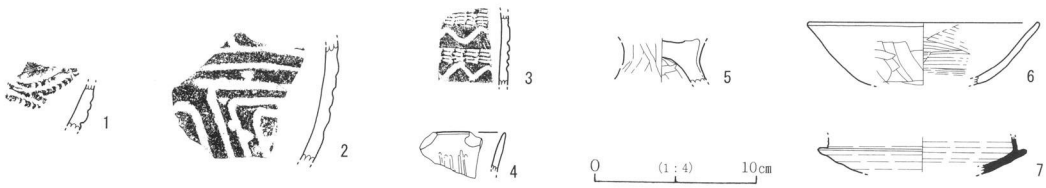
第15表　溝状遺構出土遺物観察表

第4節　　ピット

今回の西調査区では30個の単独ピットが検出されたが、調査面積の制約もあり遺構の性格までを言及できるものはなかった。なお詳細はピット計測表を参照。

第5節　　遺構外出土遺物

調査区からは図示したような遺物が遺構外より出土した。縄文から古墳まで多岐にわたる。



第24図　遺構外出土遺物実測図

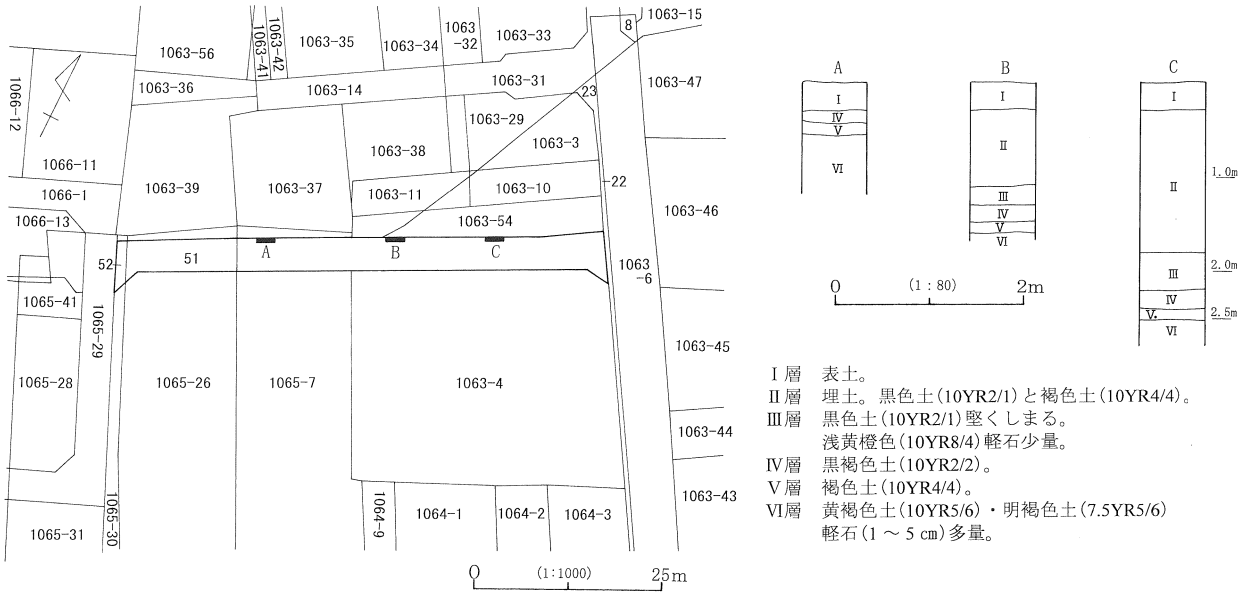
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	縄文	深鉢	－	－	－	細い粘土帯を上に半裁竹管	ナデ	拓本　破片	ツ-3
2	縄文	深鉢	－	－	－	太いL字状の沈線	ヘラナデ	拓本　胴部破片	ソ－6
3	弥生	壺	－	－	－	櫛描簾状文(4本)→ヘラ描連続山形文	ハケ目→ミガキ	拓本　頸部破片	コ－9
4	土師器	小形丸底壺	－	－	－	ミガキ→赤色塗彩(文様状に塗彩?)	ミガキ	破片実測	チ－3－2層
5	土師器	高坏	－	－	(2.7)	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測　接合部分	B地区1層
6	土師器	高坏	14.2	－	(3.9)	ヨコナデ→ヘラナデ	ハケ目→ヨコナデ	回転実測　口縁破片	テ－4
7	須恵器	坏	－	－	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測　破片	シ－7

第16表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	長径×短径×深さ	形　態	出土遺物	番号	出土位置	長径×短径×深さ	形　態	出土遺物
P1	カ−12	２２×２１×７.５	円形		P16	ス・セ−７	１４３×１１０×９２　(テラス36)	楕円形	古墳・甕2片
P2	カ−11	４８×２０×２２　(テラス18)	楕円形		P17	シ−７	８２×７２×８３　(テラス25)	不整形	
P3	キ−10	３７×２５×１７.５	楕円形		P18	セ−６	３７×３４×１７.５	円形	
P4	カ・キ−11	４０×〈３０〉×１９	円形？		P19	チ−５	２２×２１×３０	円形	
P5	カ−10・11	１００×８８×７５.５　(テラス49.5)	円形		P20	チ−５	１６×１２×９１	楕円形	
P6	カ−11	４０×３７×２２　(テラス17)	円形		P21	チ−５	１６×１１×６７	楕円形	
P7	キ−10	１０６×６３×８１　(テラス37)	楕円形		P22	チ−５	１３×１２×７０	円形	
P8	チ−４	８６×６４×２１.５	楕円形		P23	チ−５	１１×９×７５	円形	
P9	ツ・タ−５	７０×６７×３０	円形		P24	チ−５	１７×１６×６３	円形	
P10	ツ−４	１５５×１０２×１５０　(テラス145)	不整形		P25	チ−５	１９×１３×３３	楕円形	
P11	ツ−４	〈１００×８０〉×４０　(テラス17)	−		P26	チ−４	１９×１６×２５	楕円形	
P12	ツ−３	１２５×９２×１１８　(テラス106)	楕円形	古墳−坏4・甕2片	P27	チ−４	１５×１３×５６	円形	
P13	ツ−４・５	３７×３７×１７.５	円形		P28	タ−４	１７×１５×４３	円形	
P14	セ−７	１１３×７７×６４	楕円形		P29	チ−４	２２×１７×７５	楕円形	
P15	セ−７	５１×４１×２５　(テラス20)	楕円形		P30	サ−８	６７×５３×７２　(テラス22.5)	不整形	

第17表　ピット計測表

第６節　　調査地点東地区



Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　埋土。黒色土(10YR2/1)と褐色土(10YR4/4)。
Ⅲ層　黒色土(10YR2/1)堅くしまる。
　　浅黄橙色(10YR8/4)軽石少量。
Ⅳ層　黒褐色土(10YR2/2)。
Ⅴ層　褐色土(10YR4/4)。
Ⅵ層　黄褐色土(10YR5/6)・明褐色土(7.5YR5/6)
　　軽石(1～5㎝)多量。

第25図　調査地点東地区全体図

調査地点東地区は西地区より東へ約100m離れた場所に位置する。西地区と同様に田切地形のほぼ中央に位置する。現況はほぼ平坦な形状を呈する。しかし、遺構確認面と考えられる浅間軽石層（P1）まで表土を除去すると東側に向かって大きく地形が落ち込むことが確認された。図に示したＢＣ間では15mで1m下がる状況であった。よって周辺は未発達の田切か低地が東側に広がっていることか予想される。図に示したⅢ・Ⅳ層から出土遺物はなかった。

第７節　　調査のまとめ

今回の調査は道路幅と言うこともあり、検出された遺構も住居址は4軒にとどまった。また、H3号住居址やH4号住居址は出土遺物から所産時期を推定できなかった。幸い、調査区に接して北側が「中部横断自動車道」予定地となり、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われている。そちら側でH3・4号住居址などは続きが検出されているため、詳細な時期決定は県調査の報告書に委ねたい。

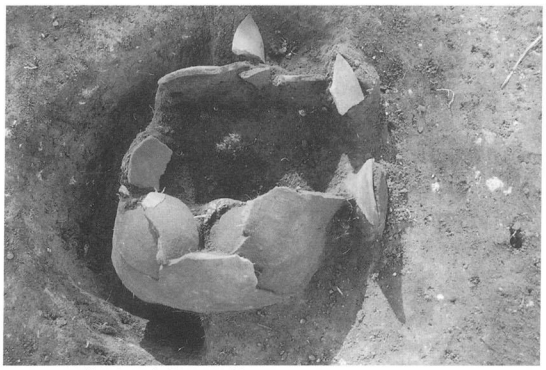
しかし、佐久地域では希少な時期となる弥生末から古墳初頭の集落の一部を調査できたことや、出土遺物の中にいわゆる「Ｓ字甕」があり資料蓄積には大きな成果であった。

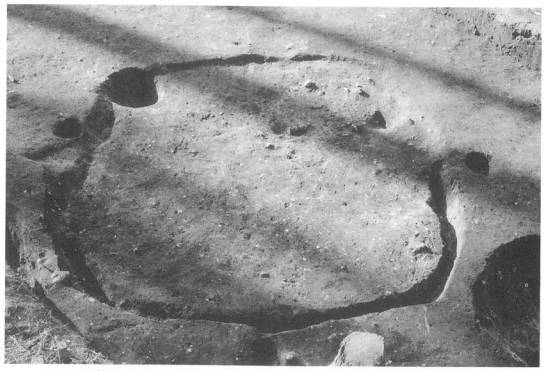
北近津遺跡Ⅱ西区全景（西から）

北近津遺跡Ⅱ東区全景（東から）

H1号住居址全景

H2号住居址遺物出土状況


H2号住居址遺物出土状況


H2号住居址全景

H3号住居址遺物出土状況

H4号住居址全景

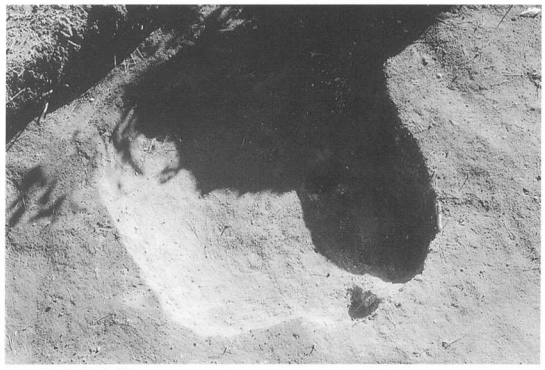
D1号土坑

D2号土坑

D3号土坑

D4号土坑

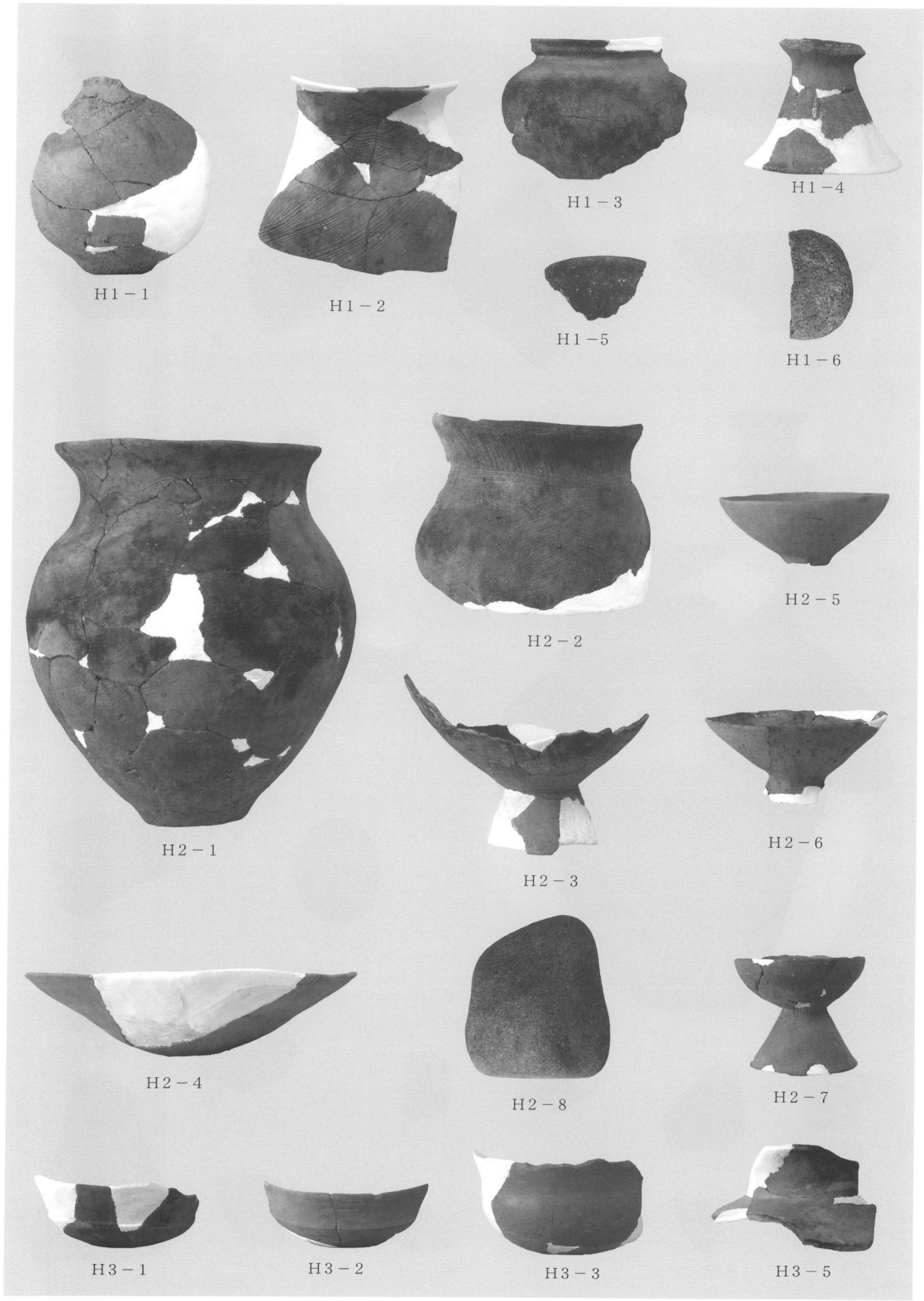
D5号土坑



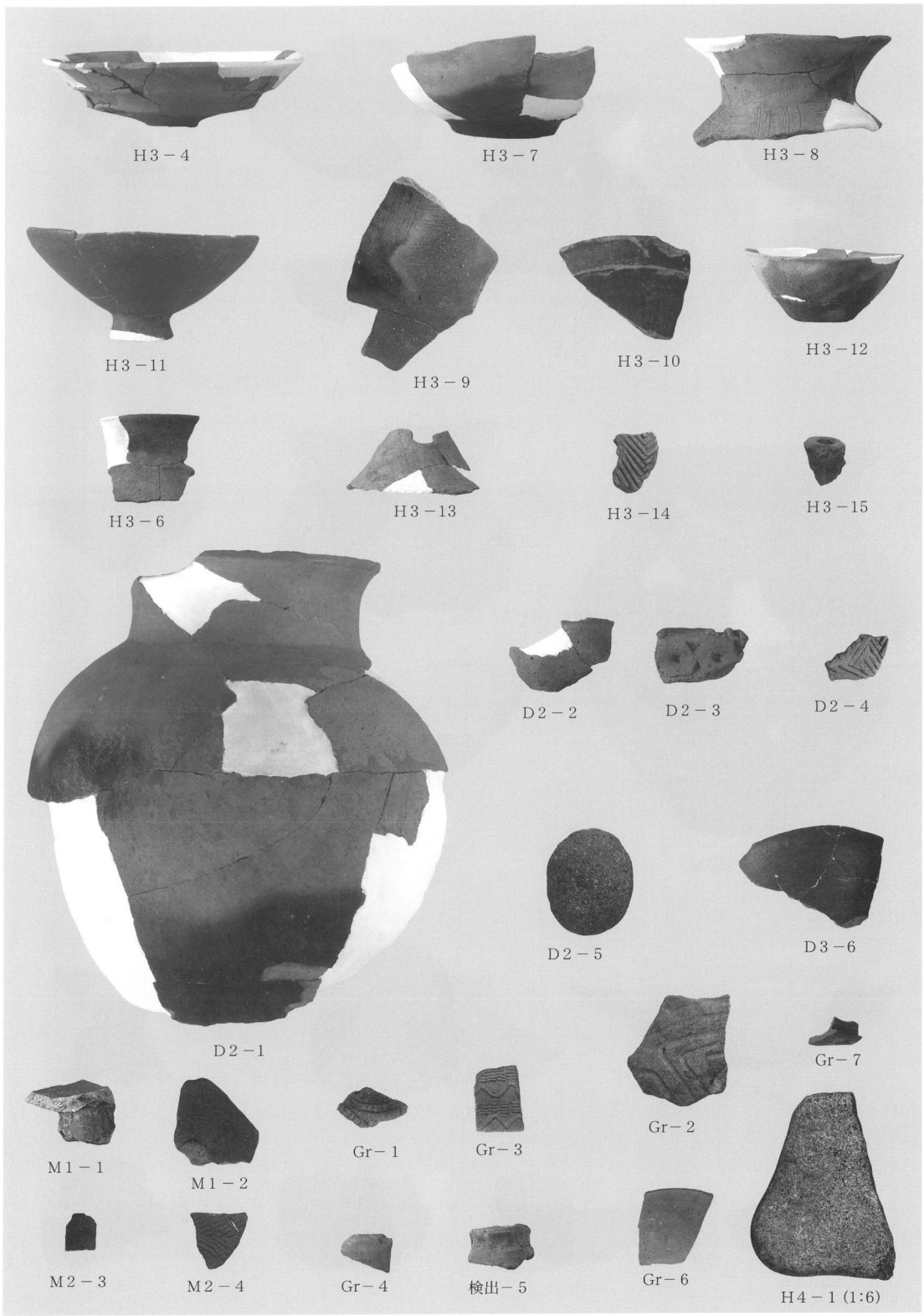
D6号土坑

M1号溝状遺構

M2号溝状遺構



H1・H2・H3号住居址出土遺物



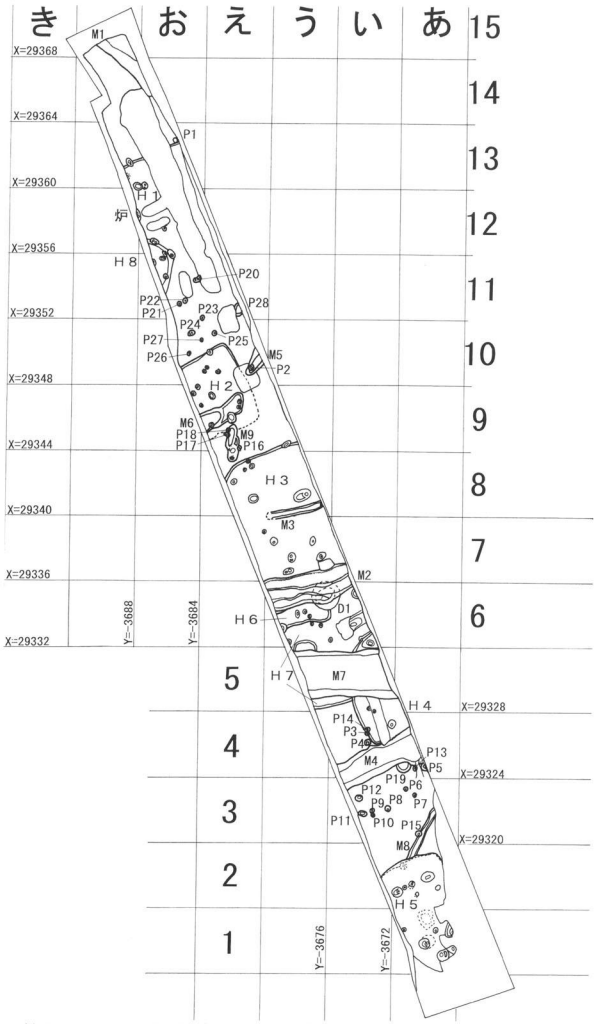
H3・4号住居址、D2・3号土坑、M1号溝状遺構、遺構外出土遺物

第Ⅰ章　遺跡の概要

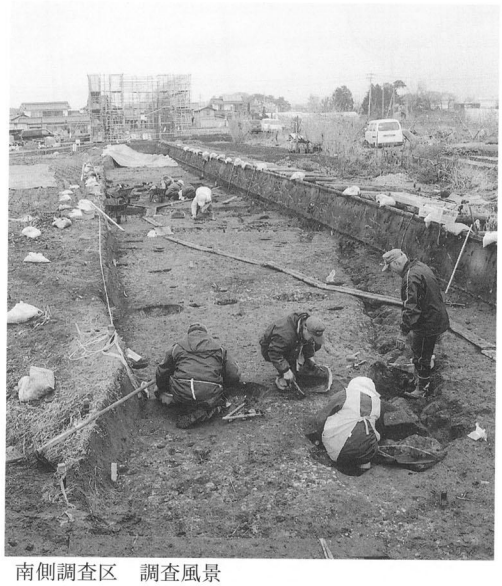
第１節　遺跡の概要

西一里塚遺跡Ⅲは遺跡中央を濁川が流れ、南には常木用水が走る。遺跡全体は水田地帯となっている。佐久平地区圃場整備事業に伴い、昭和47年に餅田遺跡、昭和48年に西一里塚遺跡が調査されている。餅田遺跡からは弥生時代後期以降と考えられる溝3本、西一里塚遺跡からは弥生時代後期以降の環濠と考えられる溝と後期の住居址11軒が調査され、表採資料であるが南関東系の壺口縁部も採集されている。また、近年では遺跡北側を通過する「中部横断自動車道」の建設に先立ち長野県埋蔵文化財センターが遺跡内を調査している。調査結果は弥生後期の住居址群や円形周溝墓等が検出され、土坑からは木製品も発見されている。

今回の調査地点は昭和48年に調査された地点の西側にあたり、「中部横断自動車道」に接する市道改良にともなう発掘調査である。



第26図　西一里塚遺跡Ⅲ調査全体図（1：400）



南側調査区　調査風景

南側調査区　奥の構造物が「中部横断自動車道」

第２節　基本層序

西一里塚遺跡が所在する塚原地籍は浅間山の火山噴火に起因する通称「赤岩泥流」と呼ばれる山体崩落により堆積した土壌に覆われている。中佐都・塚原地籍に転々と現存する「流れ山」はこの赤岩泥流が浸食されずに残った場所である。今回の調査地点は基盤層である赤岩泥流は確認されず、浅間軽石層が流水作用により二次堆積したと考えられる土壌が確認面となった。また、北側調査区は二次堆積の軽石層と砂層が堆積し低地化していた。

第３節　検出遺構と遺物の概要

遺　構	住居址	８軒	遺　物	弥生（栗林式・箱清水式）
	弥生中期・後期			土師器　須恵器
	土　坑	１基		石 器
	溝状遺構	９本		

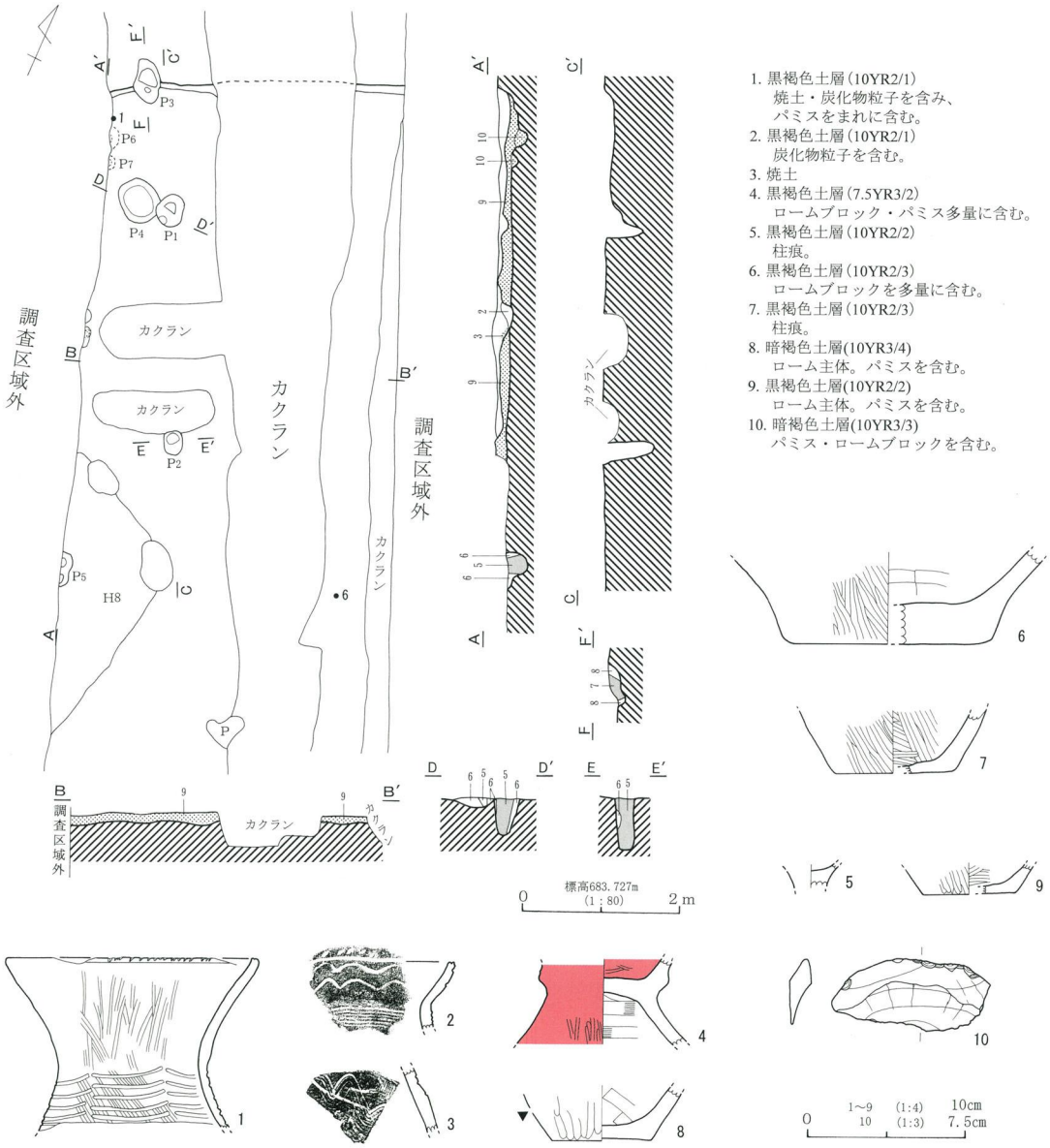
第27図　西一里塚遺跡Ⅲ周辺遺跡位置図（1：4000）

第Ⅱ章　　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

（１）Ｈ１号住居址　（第28図）

本住居址は、南調査区北側端であるオ-11・12・13、カ-11・12Grに位置する。残存状態は北壁が一部残存するのみである。形態は不明で、規模は検出部分で北壁3.72ｍで、壁高さは最大10cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは7ヶ所検出された。柱痕が確認されたものもあるが、主柱穴かは不明。貼床は検出部分全面に施されていたが軟弱である。



第28図　H1号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中のものが多く、また破片が多かった。1と3は壺の口縁部と頸部、2は甕口縁部、4は台付壺の底部と脚部の接合部と考えられる。これらの出土遺物より本址は弥生中期後半に位置づけられると考える。

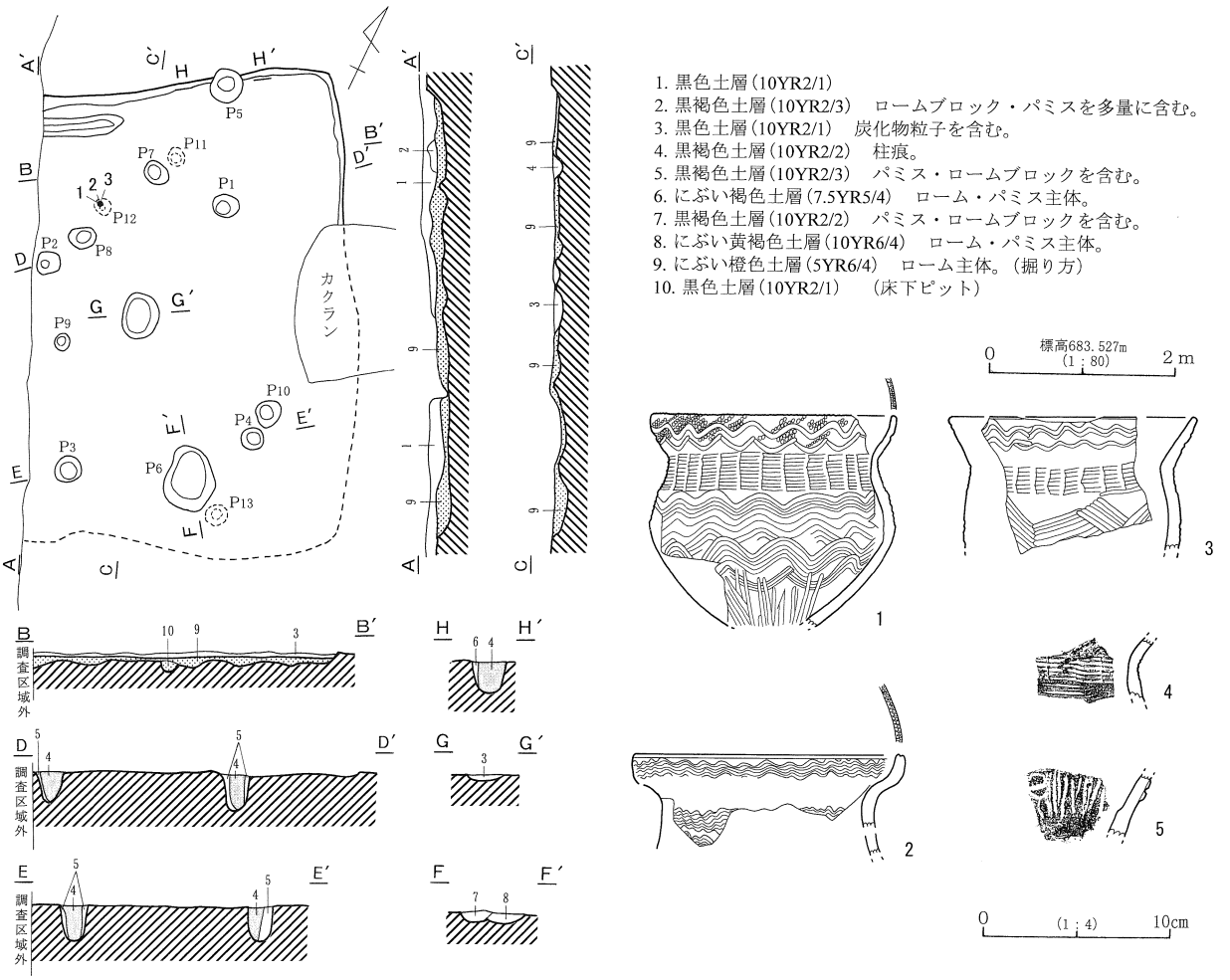
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	16.0	−	〈11.0〉	口縁部:刻目 ヘラミガキ→頸部:沈線文	ヘラミガキ	完全実測	
2	弥生	甕	−	−	−			断面実測	
3	弥生	壺	−	−	−			断面実測	
4	弥生	台付壺	−	−	〈5.5〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩　脚部:ヘラナデ	完全実測	P6
5	弥生	高坏	−	−	〈1.5〉			完全実測	
6	弥生	壺	−	13.2	〈5.9〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	回転実測	
7	弥生	甕	−	7.6	〈4.0〉	ヘラミガキ	ヘラケズリ	回転実測	
8	弥生	甕	−	6.4	〈3.4〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	
9	弥生	甕	−	5.8	〈1.8〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
10	横刃型石器	硬質砂岩	1/1	7.5	3.4	1.0	22.2	刃先に使用痕	

第18表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表

（２）Ｈ２号住居址　（第29図）

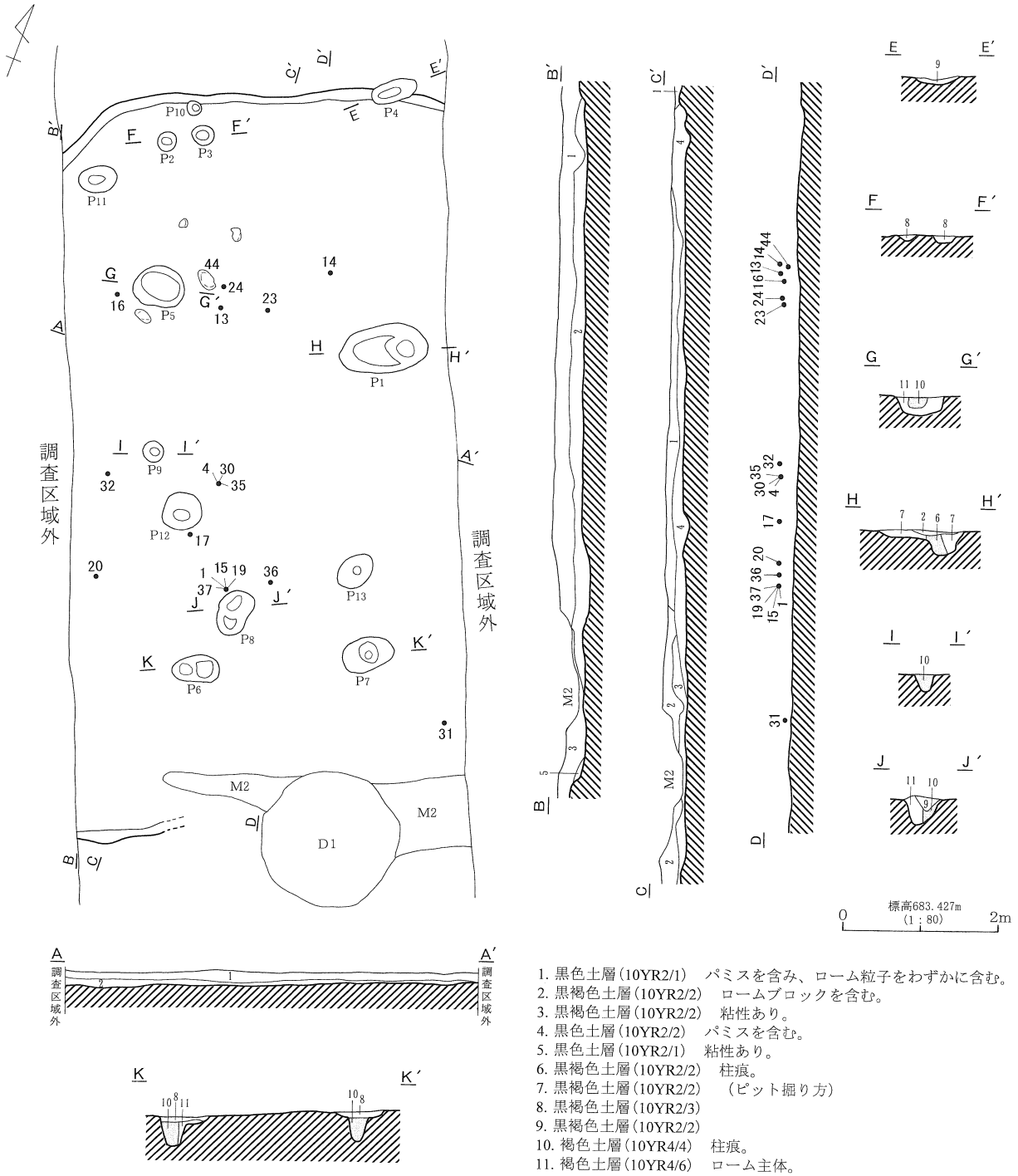
本住居址は、南調査区中央部であるエ-9・10、オ-9・10Grに位置する。残存状態は住居址西側1/3が調査区外となる。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁検出3.08m・東壁検出1.62m



第29図　Ｈ２号住居址及び出土遺物実測図

で、壁高さは北東コーナー部で最大6cmを測る。住居址の床面積は検出部分で16.5㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であり、南側は削平されている部分が多かった。北壁側に一部壁溝が検出された。ピットは13ヶ所確認され、Ｐ１～4が主柱穴と考えられる。また、住居址中央には炉が確認された。炉に顕著な焼土は確認されなかった。

出土遺物は少なく5点を図示した。いずれも甕の破片である。これらの資料により本址は弥生中期後半、栗林期に属すると考えられる。



1. 黒色土層(10YR2/1)　パミスを含み、ローム粒子をわずかに含む。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)　ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土層(10YR2/2)　粘性あり。
4. 黒色土層(10YR2/2)　パミスを含む。
5. 黒色土層(10YR2/1)　粘性あり。
6. 黒褐色土層(10YR2/2)　柱痕。
7. 黒褐色土層(10YR2/2)　(ピット掘り方)
8. 黒褐色土層(10YR2/3)
9. 黒褐色土層(10YR2/2)
10. 褐色土層(10YR4/4)　柱痕。
11. 褐色土層(10YR4/6)　ローム主体。

第30図　Ｈ３号住居址実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	甕	13.0	－	〈11.3〉	口縁部:縄文(RL)→波状沈線文 頸部:櫛描簾状文(10本一連止) 胴部:櫛描波状文→ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	
2	弥生	甕	14.2	－	〈5.2〉	口唇部:縄文(RL) 胴上部:櫛描波状文 口縁部:櫛描波状文(5本)	ナデ	完全実測	お-10
3	弥生	甕	13.2	－	〈7.1〉	口縁部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文 (6本一連止) 胴部:櫛描羽状文(6本)	ナデ	回転実測	
4	弥生	甕	－	－	－	頸部：櫛描簾状文	ナデ	断面実測	
5	弥生	甕	－	－	－	胴部：櫛描文に円形貼付文	ナデ	断面実測	炉

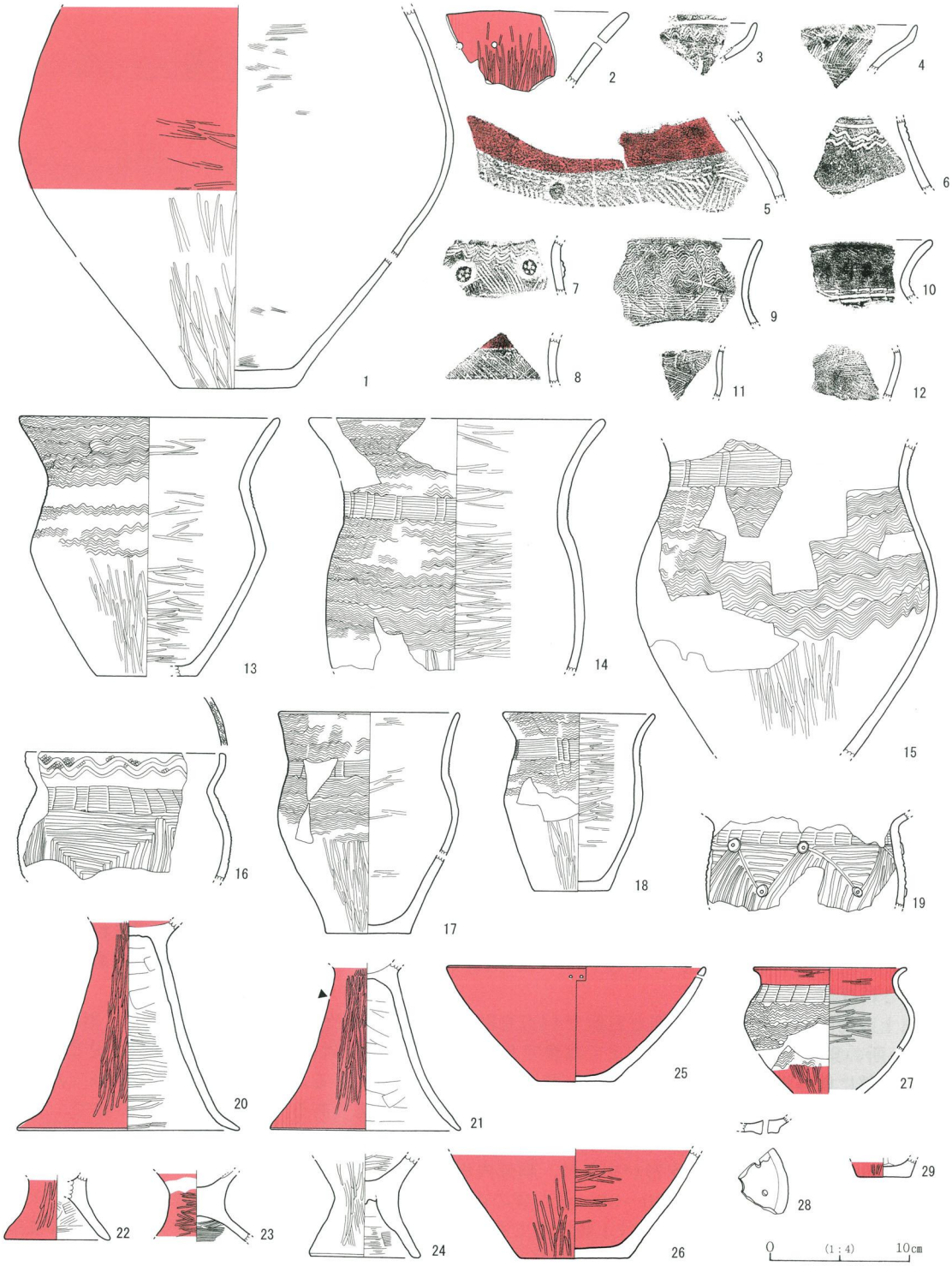
第19表　Ｈ２号住居址出土遺物観察表

（３）Ｈ３号住居址　（第30図）

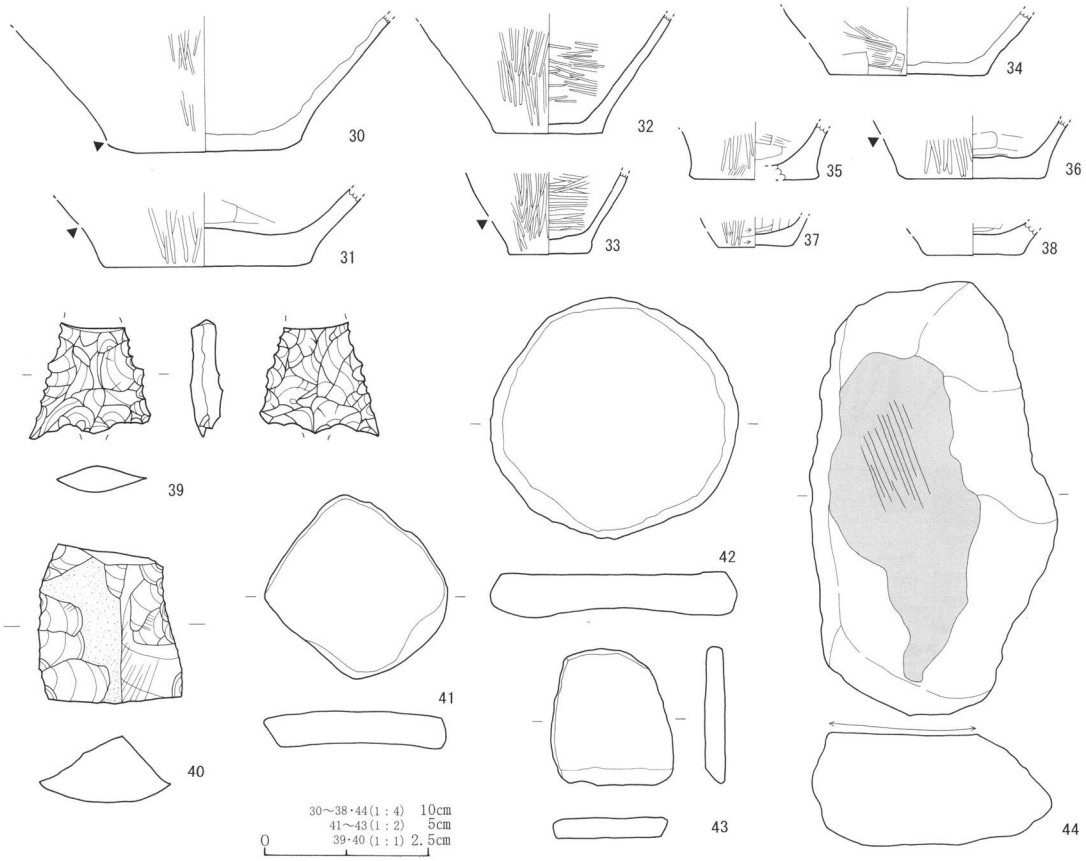
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	－	8.8	〈27.1〉	ハケ目→ヘラミガキ　赤色塗彩	ハケ目	回転実測	え-7
2	弥生	壺	－	－	－	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	穿孔2　破片実測	Ⅳ区　M2
3	弥生	壺	－	－	－	口唇部:縄文　口縁部:櫛描波状文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	Ⅲ区
4	弥生	壺？	－	－	－	櫛描斜走文	ヘラミガキ　赤色塗彩	断面実測　拓本	
5	弥生	壺	－	－	－	刺突文 貼付文 ヘラミガキ 赤色塗彩	ハケ目	断面実測　拓本	Ⅰ区
6	弥生	壺	－	－	－	ヘラ描山形文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	
7	弥生	甕	－	－	－	櫛描斜走文　櫛描波状文　貼付文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	え-8
8	弥生	壺	－	－	－	ヘラミガキ　赤色塗彩	ハケ目	断面実測　拓本	Ⅳ区
9	弥生	甕	－	－	－	櫛描波状文　櫛描簾状文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	
10	弥生	甕	－	－	－	櫛描簾状文(一連止)	ヘラミガキ	断面実測　拓本	
11	弥生	甕	－	－	－	櫛描斜走文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	
12	弥生	甕	－	－	－	櫛描斜走文	ヘラミガキ	断面実測　拓本	え-7
13	弥生	甕	18.6	7.2	(18.5)	櫛描波状文　櫛描簾状文(6本二連止) ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	え-8
14	弥生	甕	21.2	－	〈18.0〉	櫛描波状文(9本) 櫛描簾状文(9本二連止)　ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区　え-7
15	弥生	甕	－	－	〈22.6〉	ヘラミガキ　櫛描波状文 櫛描簾状文(14本二連止)	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区　え-7
16	弥生	甕	14.4	－	〈9.1〉	口唇・口縁部:縄文(LR) ヘラ描波状文(2段)　コの字文 櫛描簾状文(10本一連止)	ヘラミガキ	回転実測	
17	弥生	甕	12.9	6.1	15.8	櫛描波状文(8本) 櫛描簾状文(8本二連止)　ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	
18	弥生	甕	10.9	5.6	12.8	櫛描波状文 櫛描簾状文(9本三連止)5ヶ所 ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区
19	弥生	甕	－	－	〈6.7〉	櫛描簾状文(4本一連止) ヘラ描三角文　貼付文	ヘラミガキ	回転実測	え-8
20	弥生	高坏	－	16.0	〈15.0〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	坏部:ヘラミガキ・赤色塗彩 脚部:ハケ目・ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区　M2
21	弥生	高坏	－	13.7	〈11.9〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラナデ	完全実測	Ⅲ区
22	弥生	高坏	－	7.6	〈4.6〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ハケ目	回転実測	
23	弥生	高坏	－	－	〈5.1〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	坏部:ナデ　脚部:ハケ目	完全実測	
24	弥生	台付甕	－	7.9	〈7.3〉	ハケ目→ヘラミガキ	ヘラミガキ　脚部:ハケ目	完全実測	
25	弥生	鉢	18.6	5.6	8.2	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	穿孔2　回転実測	え-8
26	弥生	鉢	－	7.8	〈7.8〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラミガキ　赤色塗彩	回転実測	
27	弥生	甕	11.0	－	〈9.0〉	ヘラミガキ　赤色塗彩 櫛描簾状文(7本一連止)　櫛描波状文	口縁部:ヘラミガキ・赤色塗彩 胴部:ヘラミガキ・黒色処理	回転実測	Ⅰ区
28	弥生	蓋？	－	－	－	ナデ	ナデ	破片実測　穿孔あり	Ⅳ区
29	弥生	鉢	－	3.8	〈1.4〉	ヘラミガキ　赤色塗彩	ヘラナデ	完全実測	
30	弥生	壺	－	11.9	〈8.2〉	ヘラミガキ	剥落	完全実測	
31	弥生	甕	－	12.7	〈4.7〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	
32	弥生	甕	－	6.6	〈7.3〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
33	弥生	甕	－	4.9	〈5.0〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	
34	弥生	甕	－	9.7	〈4.1〉	ハケナデ	剥落	完全実測	Ⅰ区
35	弥生	甕	－	8.0	〈3.5〉	ハケ目→ヘラミガキ	ハケナデ	回転実測	
36	弥生	甕	－	9.0	〈3.7〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	
37	弥生	甕	－	4.5	〈1.9〉	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	
38	弥生	甕	－	6.2	〈2.0〉	ナデ	ヘラナデ	完全実測	Ⅳ区
41	弥生	土製円盤	5.6	5.6	1.1				
42	弥生	土製円盤	7.3	7.6	1.4				Ⅰ区

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
39	石鏃	黒灰色チャート	1/2	1.8	1.9	0.5	1.32	有茎と先端が欠損	
40	？	黒耀石	1/3	2.5	2.2	1.0	5.7	石鏃の未製品？	え-8
43	片刃石斧?	軽石	1/1	4.2	3.8	0.6	4.3	形態は片刃石斧によく似る。	え-8
44	砥石	軽石	1/1	26.6	15.2	9.2	1691.6	深い擦痕のある磨り面	

第20表　Ｈ３号住居址出土遺物観察表



第31図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図①



第32図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図②

本住居址は、南側調査区中央であるイ-7、ウ-6・7・8、エ-7・8Grに位置する。残存状態は西側と東側が調査区域外となる。M2・3号溝状遺構・1号土坑と重複関係にあり、本址が一番古い。

形態は隅丸方形で、規模は北壁検出部4.90m・南壁検出部1.12mで、壁高さは北壁部分で6cmを測る。住居址の床面積は44.1㎡を測る。覆土は自然堆積であった。ピットは13ヶ所確認され、柱痕が確認されたピットもあった。Ｐ１とＰ5～7は主柱穴と考えられるがやや不規則な配列である。炉は確認されなかった。

出土遺物は非常に多く、土器と石器で44点を図示した。1～6及び8は壺と考えられる。2は口縁部に2ヶ所の穿孔がある。7と9～19までは甕である。13・17・18はほぼ全容が解る残存状況で、いずれも頸部に櫛描簾状文、口縁部と胴部が櫛描波状文が施されている。20～23は高坏の脚部である。20と21は大型の、22と23は小型の高坏である。24は台付甕脚である。25と26は赤彩の鉢で、25は口縁部に2ヶ所の穿孔がある。27は広口の壺であり、頸部に櫛描簾状文、胴部に櫛描波状文を施す。口縁部内外面と胴部下半は赤彩が施され、胴部内面は黒色処理のように黒色化している。28は蓋と考えられるが確証を得ない。30～38は壺か甕の底部付近と考えられる。39は黒耀石の石鏃で、欠損しているが有茎である。41と42は土製円盤である。43は軽石の石器で、形状は片刃の磨製石斧状態である。44は砥石と考えられる。本址の出土遺物には弥生中期・栗林期のものも含まれるが、壺・甕の大勢から弥生後期・箱清水期の所産と考えられる。

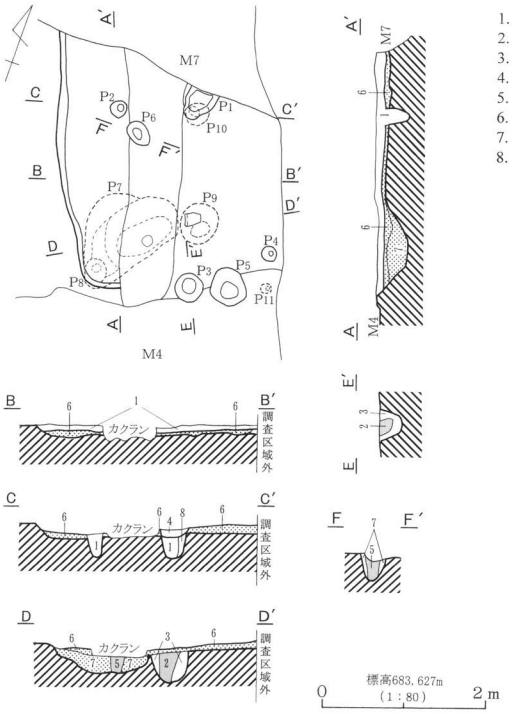
（4）Ｈ４号住居址　（第33図）

本住居址は、南側調査区の南側であるア-4・5、イ-4・5Grに位置する。残存状況は北側と南側をM7号溝状遺構とM4号溝状遺構に削平され、東側は調査区外となる。

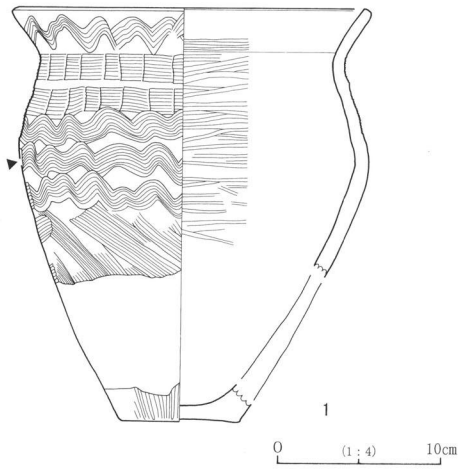
形態は唯一南西コーナーが検出された為、方形と考えられるが不明。規模は南壁0.46m（残存）・西壁3.07m（残存）で、壁高さは西壁で11cmを測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体に軟質であったが、床の厚みは最大7cmあった。ピットは掘り方時のものも含め11ヶ所確認され、主柱穴と確定できるものはなかった。

出土遺物は少なく、図示できたものはＰ9より出土した甕1点のみである。1は頸部に2段の櫛描簾状文、口縁部と胴部上半に櫛描波状文、胴部下半に櫛描斜線文が施されている。

本址は出土遺物が非常に少なく位置づけに苦慮するが、図示した甕は弥生後期前半に位置づけられる。



1. 黒色土層(10YR2/1)　パミス・ローム粒子を含む。粘性あり。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)　柱痕。
3. 黒褐色土層(10YR2/3)　ロームブロック・パミスを多量に含む。
4. 黒褐色土層(10YR2/2)　ローム粒子・パミスを含む。
5. 黒褐色土層(10YR2/3)　柱痕。
6. 黒褐色土層(10YR2/3)　ロームブロック・パミス混在。(掘り方)
7. 暗褐色土層(10YR3/3)　ローム・パミス主体。
8. 暗褐色土層(10YR3/3)　ローム・パミスを多く含む。(ピット掘り方)



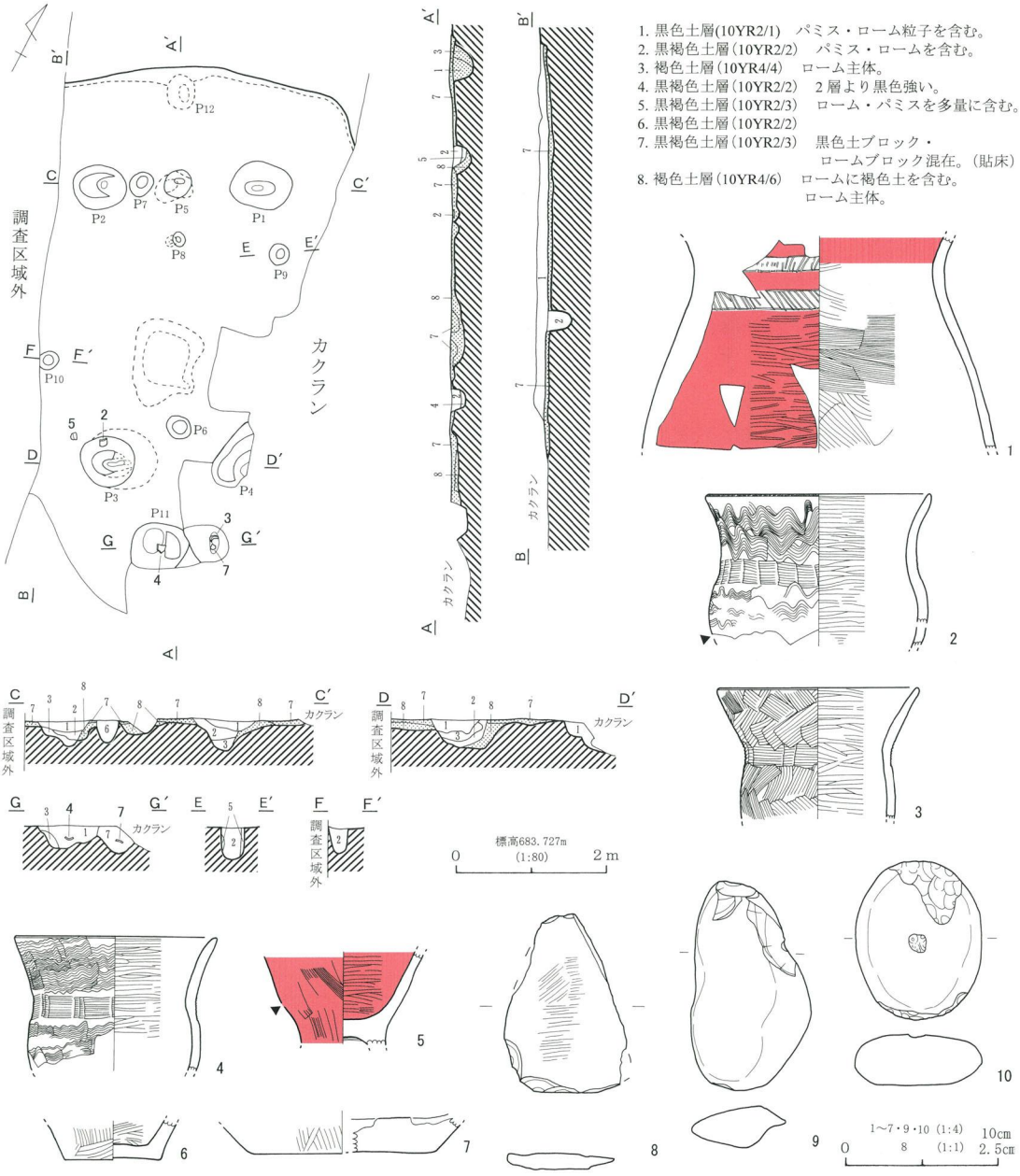
第33図　Ｈ４号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	甕	23.0	7.4	25.4	口縁・胴上部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(8本一連止) 胴下部:櫛描斜線文(8本)	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区 P9（旧P2）

第21表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表

（5）Ｈ５号住居址　（第34図）

本住居址は、南側調査区南端であるア-1・2、イ-1・2Grに位置する。残存状態は南東側がカクランによりほとんど削平されている。形態は北東コーナー部から隅丸方形と考えられる。規模は北壁3.67mで、壁高の高さはほとんど確認されなかった。住居址の床面積は検出部分で18.9m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であったが、貼床は1～13cmの厚さで貼られていた。ピットは12ケ所で検出され、Ｐ１～4が主柱穴と考えられる。規模はP1が径84cm・深さ40cm、P2が径70



第34図　Ｈ５号住居址及び出土遺物実測図

cm・深さ37cm、P3が径73cm・深さ39cm、P4が径82cm・深さ41cmを測る。

出土遺物は10点を図示した。1は弥生壺の胴部から頸部の破片で、頸部に横走文が施されている。2～4は甕の口縁部から胴部で、2と4は頸部櫛描簾状文、口縁部と胴部が櫛描波状文が施されている。3は頸部が櫛描簾状文、口縁部と胴部が櫛描羽状文が施されている。5は台付甕の底部破片であり、内外面赤彩が施されている。8は磨製石鏃の未成品と考えられる。9と10は敲石である。

本址はこれらの出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	－	－	〈14.0〉	頸部:ヘラ描斜走文 ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ　頸部:赤色塗彩	回転実測	P11-3層
2	弥生	甕	14.8	－	〈10.1〉	口唇部:縄文(RL) 口縁・胴部:櫛描波状文(8本) 頸部:櫛描簾状文(10本一連止)	ヘラミガキ	完全実測	1層
3	弥生	甕	13.0	－	〈8.6〉	口縁・胴部:櫛描横羽状文(8本) 頸部:櫛描簾状文(8本)	ヘラミガキ	回転実測	
4	弥生	甕	13.2	－	〈8.8〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(11本三連止)	ヘラミガキ	回転実測	
5	弥生	台付甕	－	－	〈6.0〉	ヘラナデ→赤色塗彩	胴部:ヘラミガキ→赤色塗彩 脚部:ヘラナデ	完全実測	
6	弥生	甕	－	6.4	〈2.6〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	1層
7	弥生		－	12.2	〈3.3〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
8	磨製石鏃未製品	石英片岩	1/1	2.9	2.0	0.3	2.2	両面に磨り痕跡	
9	敲石	硬質砂岩	1/1	13.7	7.9	2.7	362.0	上下端部・右側面に敲打痕	1層
10	敲石	花崗岩	1/1	10.3	8.3	3.6	403.0	上下端部・正面に敲打痕	P3

第22表　Ｈ５号住居址出土遺物観察表

（６）Ｈ６号住居址　（第35図）

本住居址は、南側調査区中央であるウ-6Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外、北側がM2号溝状遺構に削平されており、住居址の南東コーナー部のみの検出に止まった。

形態は不明である。規模は南壁2.54m（残存）・東壁0.60m（残存）で、壁高さは南壁で最大7cmを測る。床は全体的に軟質であった。貼床は3～15cmの厚みで貼られていた。ピットは7ヶ所確認された。規模はP1が径34cm・深さ12cm、P2が径48cm・深さ11cm、P3が径24cm・深さ1cm、P4が径28cm・深さ15cm、P5が径24cm・深さ17cm、P6が径25cm・深さ17cm、P7が径43cm・深さ6cmを測る。

出土遺物は非常に少なく、1点を図示した。1は台付甕の脚端部と考えられる。住居址の所産時期は不明である。

（７）Ｈ７号住居址　（第35図）

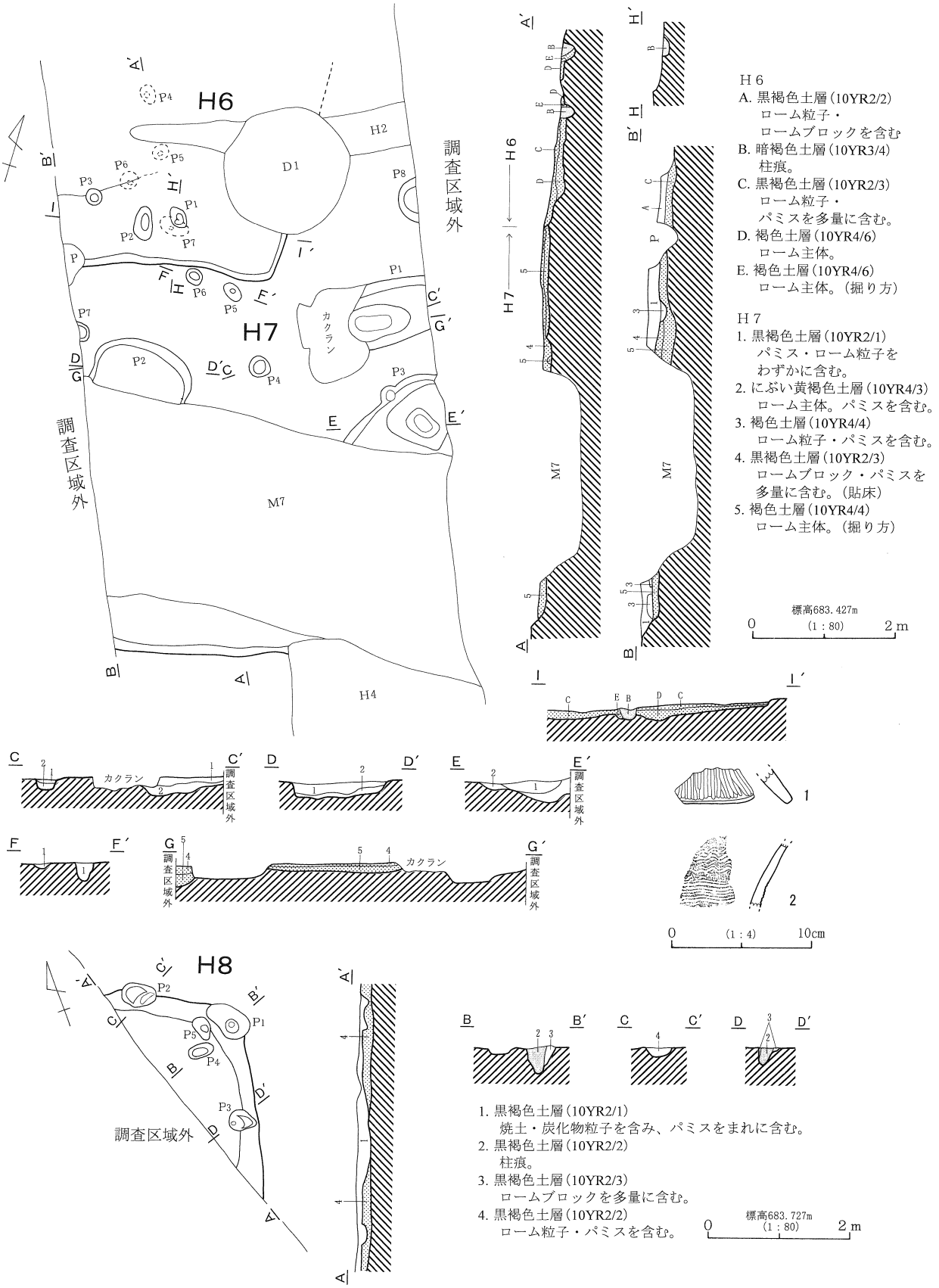
本住居址は、南側調査区中央であるイ-5・6、ウ-5・6Grに位置する。残存状態は西側と東側が調査区域外、中央がM7号溝状遺構に削平されていた。

形態は不明である。規模は南壁2.40m（検出）で、壁高さは南壁で最大9cmを測る。床は全体的に軟質であった。貼床は4～21cmの厚みで貼られていた。ピットは8ヶ所確認された。規模はP1が径115cm・深さ28cm、P2が径142cm・深さ28cm、P3が径138cm・深さ17cm、P4が径30cm・深さ5cm、P5が径31cm・深さ27cm、P6が径25cm・深さ8cm、P7が径30cm・深さ10cm、P8が径63cm・深さ13cmを測る。

出土遺物は非常に少なく1点を図示できたのみである。1は甕の頸部と考えられる。住居址の所産時期は不明である。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	台付甕？	－	－	－	ヘラミガキ	ナデ	破片実測	H6
2	弥生	甕	－	－	－	櫛描直線文　櫛描波状文	ヘラミガキ	断面実測	H7-P3

第23表　Ｈ６・７号住居址出土遺物観察表



第35図　H6・7・8号住居址及び出土遺物実測図

（8）Ｈ８号住居址　（第35図）

本住居址は、南側調査区北側であるオ-11・12Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となり、住居址の北東コーナー部のみの検出となった。H1号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

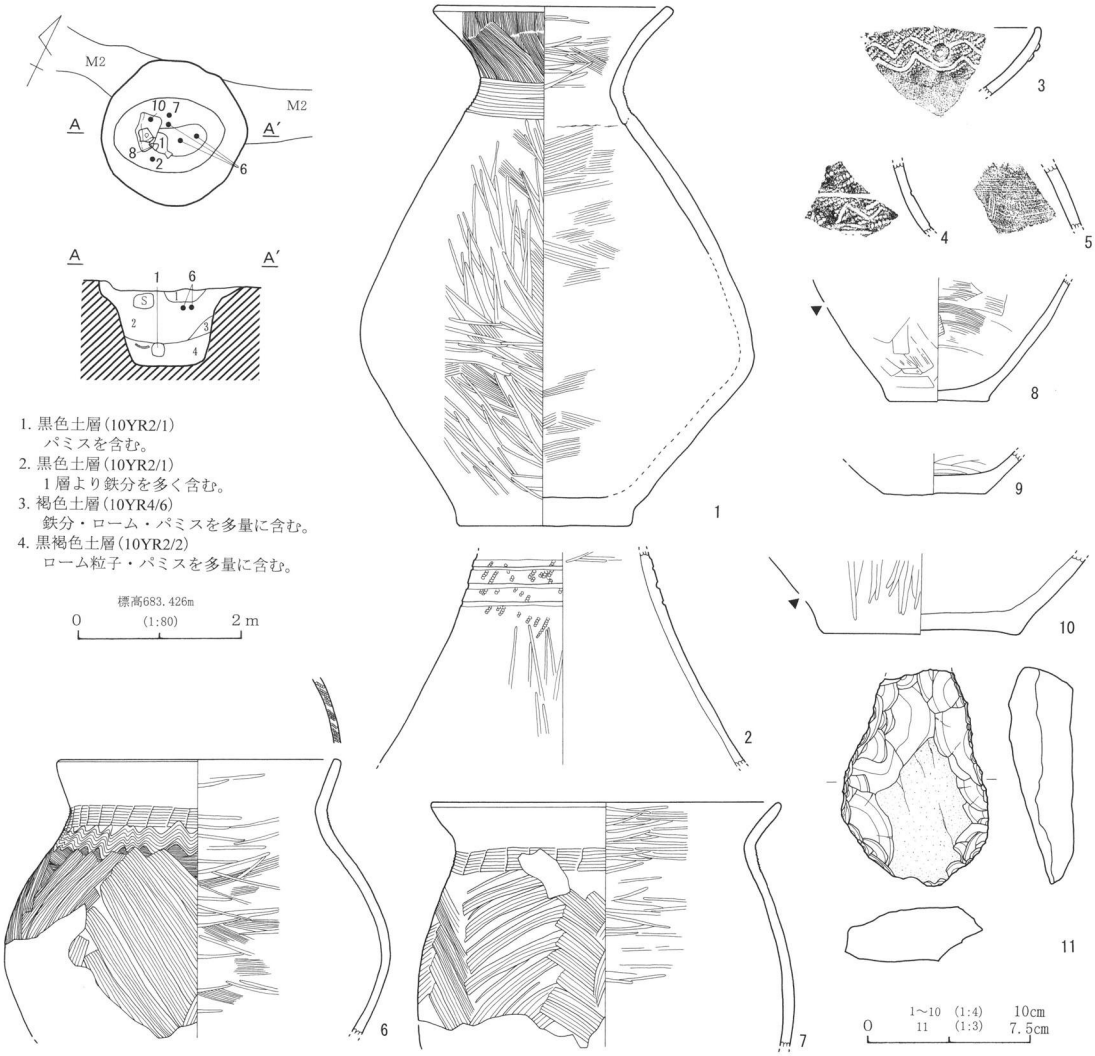
形態は不明である。規模は北壁1.90m（検出）・東壁2.64m（検出）で、壁高さは東壁で最大4cmを測る。床は全体的に軟質であった。ピットは5ヶ所確認された。規模はP1が径64cm・深さ33cm、P2が径47cm・深さ14cm、P3が径37cm・深さ25cm、P4が径36cm・深さ9cm、P5が径34cm・深さ18cmを測る。

出土遺物は非常に少なく、図示できるものは無かった。住居址の所産時期は不明である。

第２節　土　坑

（1）Ｄ1号土坑　（第36図）

本址は、南側調査区中央のイ-6、ウ-6Grに位置する。残存状態は良好である。M2号溝状遺構とH3・6・7号住居址と重複関係にあり、新旧関係は新しい方からM2号溝状遺構→本址→H3・6・7号



第36図　Ｄ1号土坑及び出土遺物実測図

住居址である。形態は円形で、規模は長軸179cm・深さ117cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的多く、11点を図示した。1は壺で完形である。頸部に2段の櫛描横線文を施す。2～5も壺の破片である。6と7は甕であり、6は口唇部に縄文、頸部に櫛描簾状文と櫛描波状文、胴部に櫛描文を縦位の羽状構成に施す。7は頸部が櫛描簾状文、胴部に櫛描文を縦位の羽状構成に施す。11は打製石斧である。本址の帰属時期は1の壺から弥生中期末から後期初頭と考えられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	14.7	10.6	31.9	ハケ目→ヘラミガキ 頸部:櫛描横線文(6本2段)	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	D1
2	弥生	壺	－	－	〈13.1〉	縄文(LR) ヘラ描沈線 ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	D1 北・南区
3	弥生	壺	－	－	－	ハケ目 縄文(LR) 円形浮文貼付 ヘラ描波状文(2段)	ヘラミガキ	拓本	D1 北区
4	弥生	壺	－	－	－	縄文(LR) ヘラ描山形文 ヘラ描横線文	ヘラミガキ	拓本	D1 北区
5	弥生	壺	－	－	－	ハケ目	ハケ目		D1 北区
6	弥生	甕	17.4	－	〈16.9〉	口唇部:縄文 体部:櫛描斜走文 頸部:櫛描簾状文(7本一連止) ・櫛描波状文 ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ	回転実測	D1 H3-Ⅰ区
7	弥生	甕	21.4	－	〈15.0〉	櫛描斜走文 櫛描簾状文(7本一連止)	ヘラミガキ	回転実測	D1 M2-2層
8	弥生	甕	－	6.3	〈7.6〉	ハケナデ	ハケナデ	完全実測	D1
9	弥生	甕	－	6.3	〈2.7〉		ヘラナデ	完全実測	D1-4層
10	弥生	甕	－	12.3	〈4.9〉	ヘラミガキ	剥落	完全実測	D1

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
11	打製石斧	硬質砂岩	2/3	9.9	6.8	2.8	193.8	上部欠損	D1

第24表　Ｄ１号土坑出土遺物観察表

第３節　　溝状遺構

（１）Ｍ１号溝状遺構　　（第37図）

本址は、南側調査区北端のオ-14、カ-14・15Grに位置する。残存状態は良好であるが、大部分が調査区域外となるため、全容は不明である。溝は南北方向に延びる。規模は検出部分で全長4.28m、幅1.90m、深さ34～45cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示できたものは1の弥生壺のみである。小型の壺で、頸部に櫛描簾状文と櫛描波状文を施す。外面は赤彩を施す。

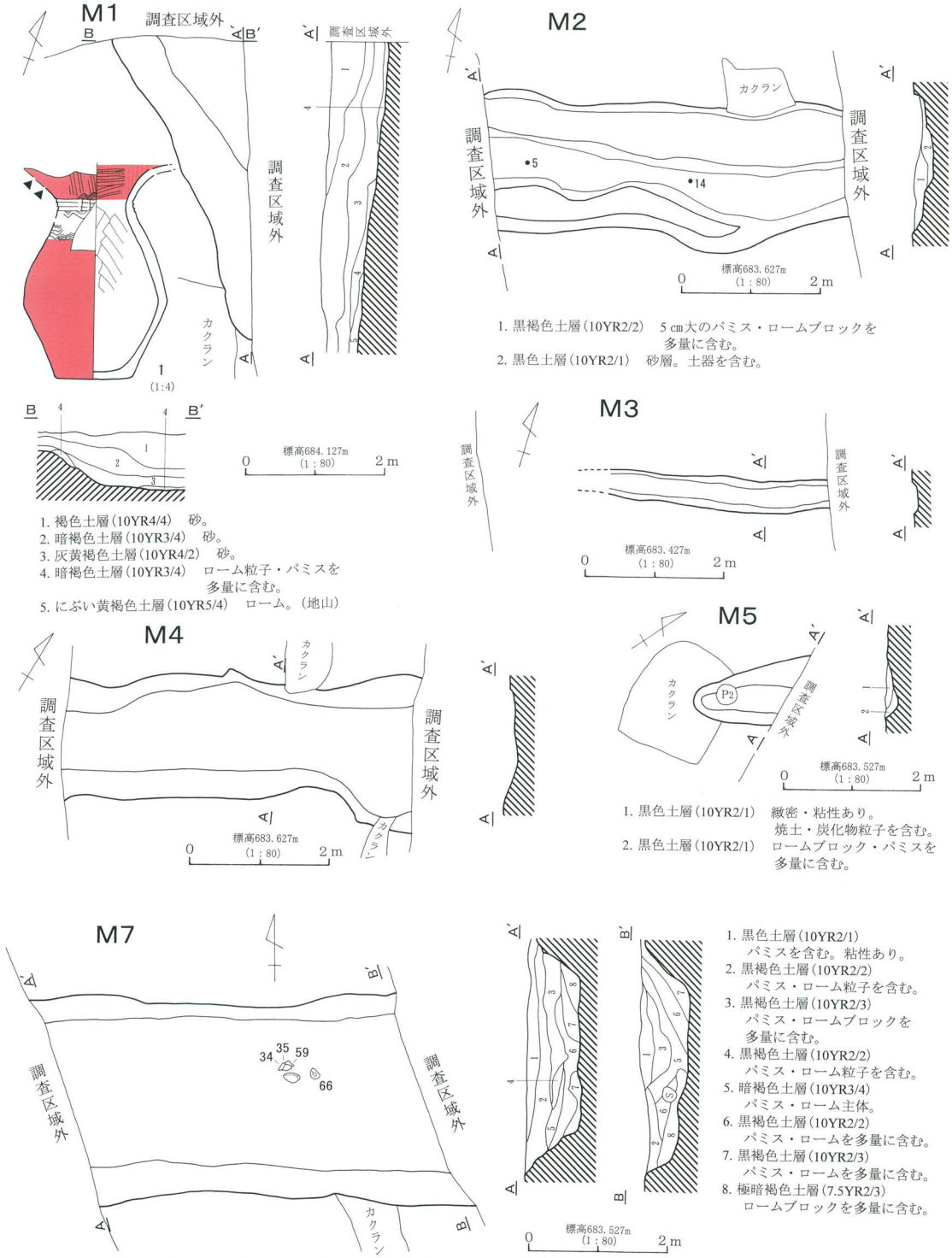
（２）Ｍ２号溝状遺構　　（第37図）

本址は、南側調査区中央のイ-6・7、ウ-6・7Grに位置する。残存状態は良好である。溝は東西方向にのびる。溝断面形状は皿状を示す。規模は検出部分で全長5.06m、幅1.53～2.06m、深さ15～31cmを測る。本址の出土遺物は比較的多く2～16を図示した。2は広口壺の口縁部と考えられ、頸部には櫛描簾状文が施されている。口縁部内外面は赤彩されている。3～9は甕である。いずれも頸部に櫛描簾状文、口縁部と胴部に櫛描波状文を施す。10と11は弥生壺である。12は鉢か高坏の破片で、内外面に赤彩を施す。13は高坏脚部で坏部との接合部分には突帯が巡る。14と15は単孔の甑である。

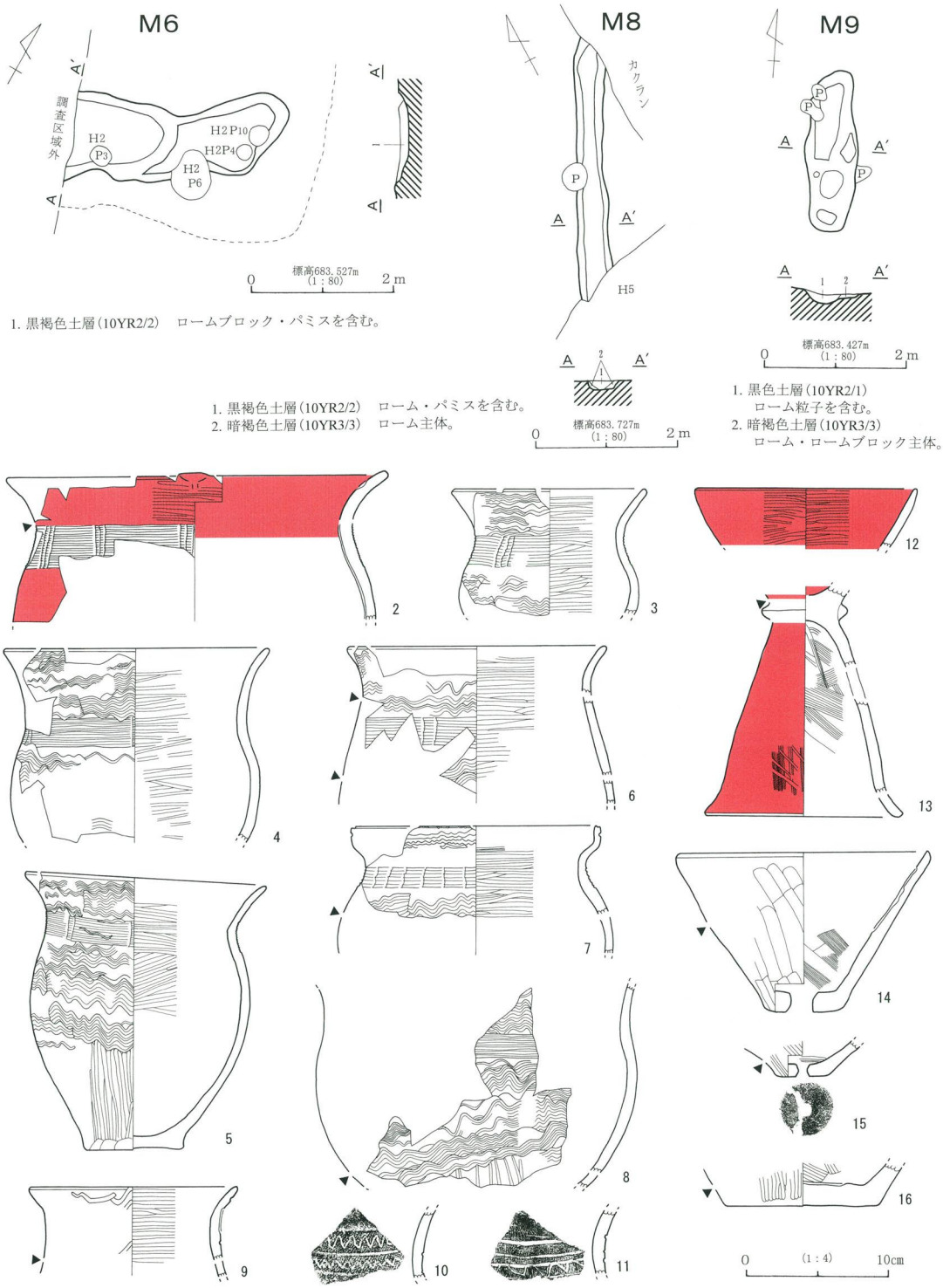
これらの遺物より本址は弥生後期の所産と考えられる。

（３）Ｍ３号溝状遺構　　（第37図）

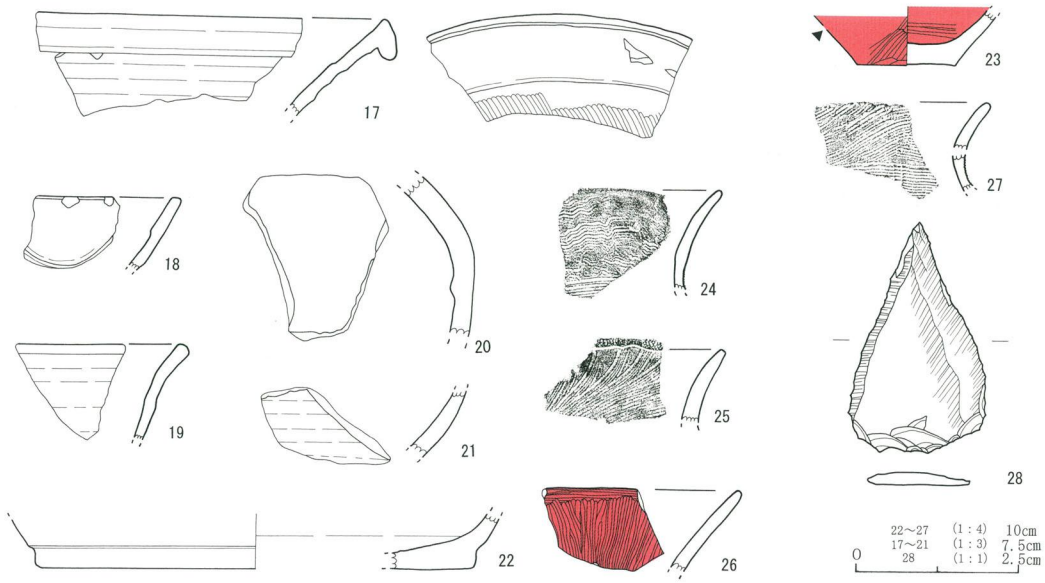
本址は、南側調査区中央のウ-18Grに位置する。残存状態は良好であるが、西側は自然に消滅する。溝は東西方向に延び、溝断面形状は逆台形を示す。規模は検出部分で全長3.16m、幅0.35～0.48m、深さ4～7cmを測る。本址から図示できる出土遺物は無かった。



第37図　M1～5・7号溝状遺構及び出土遺物実測図



第38図　M６・８・９号溝状遺構及びM２号溝状遺構出土遺物実測図



第39図　Ｍ４・６・８号溝状遺構出土遺物実測図

（４）Ｍ４号溝状遺構　　（第37図）

本址は、南側調査区南端のア-4、イ-3・4Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側と西側が調査区域外となる。溝は東西方向に延び、溝断面形状は薄い皿状を示す。規模は検出部分で全長5.04m、幅1.42～2.26m、深さ13～25cmを測る。

本址からの出土遺物は6点を図示した。17はすり鉢、18は灰釉片口鉢、19は植木鉢、20は常滑の甕、21は鉄釉碗、22は火鉢である。20を除くといずれも近世から近代の所産であり、本址の時期もこれら出土遺物に準じると考えられる。

（５）Ｍ５号溝状遺構　　（第37図）

本址は、南側調査区中央のエ-10Grに位置する。溝は北方向に延びると考えられる。溝断面形状はU字形を示す。規模は検出部分で全長1.32m、幅0.40～0.88m、深さ6～17cmを測る。

本址から図示できる出土遺物は無かった。

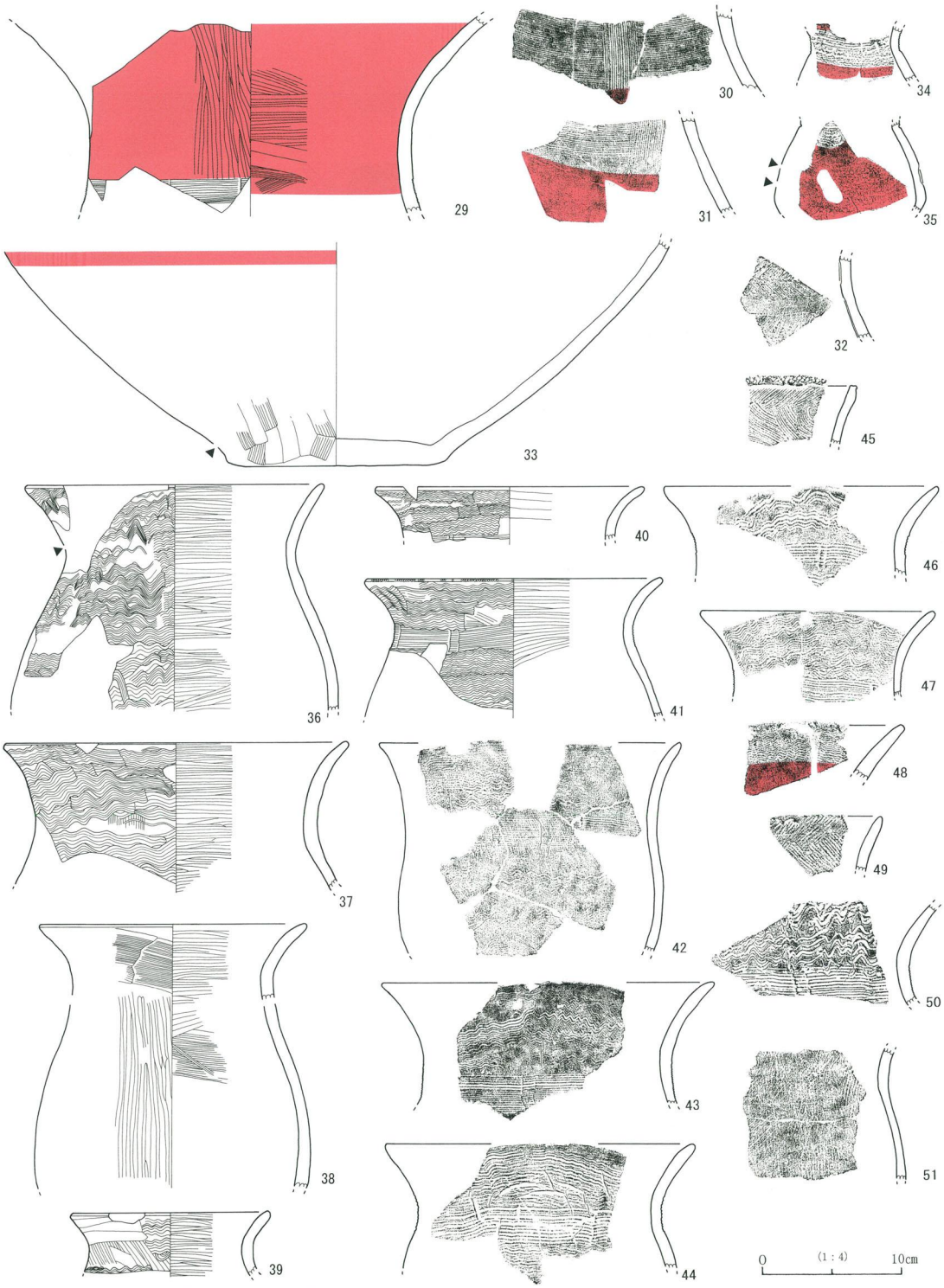
（６）Ｍ６号溝状遺構　　（第38図）

本址は、南側調査区中央のエ-9Grに位置する。溝は東西方向に延びると考えられる。溝断面形状はU字形を示す。規模は検出部分で全長3.02m、幅0.90～1.26m、深さ8～17cmを測る。

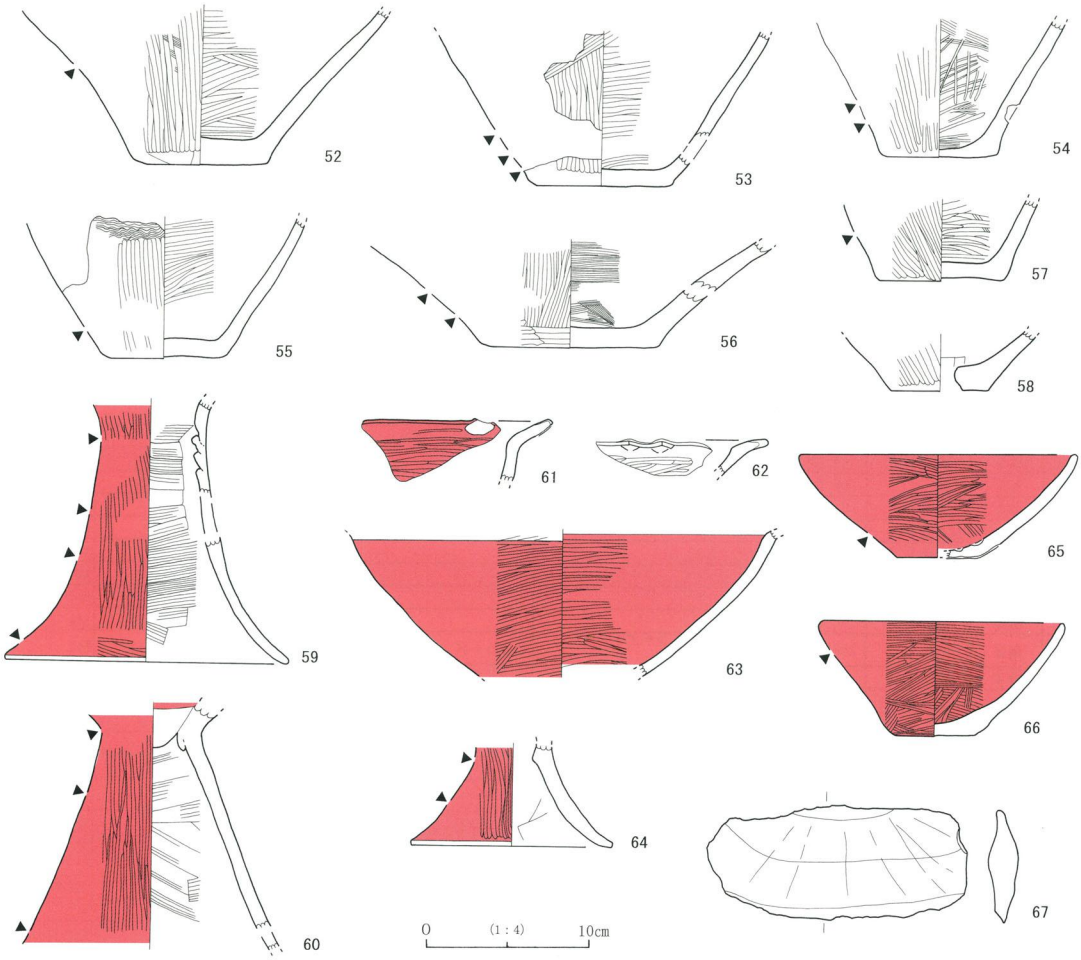
本址からの出土遺物は少なく1点を図示した。23は弥生鉢で、内外面赤彩が施されている。

（７）Ｍ７号溝状遺構　　（第37図）

本址は、南側調査区中央南よりのイ-5、ウ-5Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側と西側が調査区域外となる。溝は東西方向に延び、溝断面形状は逆台形を示す。規模は検出部分で全長5.10m、幅2.68～3.06m、深さ41～63cmを測る。本址からの出土遺物は非常に多く、29～67の39点を図示した。29～35は弥生壺と考えられる。34と35は小型の壺で同一個体の可能性がある。36～51は甕である。いずれも櫛描文の施文がなされているが、38のみ無文であり、出土層位が1層中と言うこともあり混入の可能性がある。59～64は高坏の脚部か或いは坏部である。61と62はいずれも口縁部



第40図　M7号溝状遺構出土遺物実測図①



第41図　M7号溝状遺構出土遺物実測図②

に突起をもつ。65と66は鉢であり内外面に赤彩されている。67は横刃型の石器で、形状より穂摘具の可能性がある。これらの出土遺物より本址は弥生後期の所産であり、形状より「環濠」の可能性がある。

（8）Ｍ８号溝状遺構　　（第38図）

本址は、南側調査区南端のア-2・3Grに位置する。残存状態は良好であるが、北側がカクラン、南側がH5号住居址に削平されている。溝は南北方向に延び、溝断面形状は逆台形を示す。規模は検出部分で全長3.68m、幅0.35～0.48m、深さ6～16cmを測る。本址からの出土遺物は24～28の5点を図示した。24・25・27は甕の口縁部破片である。26は壺の口縁部で内外面赤彩されている。28は磨製石鏃の未製品と考えられる。

（9）Ｍ９号溝状遺構　　（第38図）

本址は、南側調査区中央のエ-8・9Grに位置する。溝は南北方向に延び、溝断面形状はU字形を示す。規模は検出部分で全長2.28m、幅0.50～0.76m、深さ8～34cmを測る。本址から図示できる出土遺物は無かった。また、検出状況から本址はM5号溝状遺構と一連である可能性が指摘できる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	−	5.6	〈15.3〉	頸・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(3本) ヘラミガキ→赤色塗彩	ハケ目→ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	M1　M2-1・2層
2	弥生	広口壺	27.0	−	〈10.4〉	頸部:櫛描簾状文(17本三連止) ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	M2-1層・砂層 M1-1層
3	弥生	甕	13.4	−	〈8.8〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(10本二連止)	ヘラミガキ	回転実測	M2-1層
4	弥生	甕	18.4	−	〈12.6〉	頸部:櫛描簾状文(13本二連止) 口縁・胴部:櫛描波状文	ヘラミガキ	回転実測	M2-1層
5	弥生	甕	16.9	7.0	19.5	頸部:櫛描簾状文(12本一連止) 口縁・胴部:櫛描波状文(8本) ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	M2-砂層
6	弥生	甕	18.2	−	〈11.1〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(9本二連止)	ヘラミガキ	回転実測	M2-1層
7	弥生	甕	17.4	−	〈9.0〉	口唇部:縄文　胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(6本一連止)	ヘラミガキ	回転実測	M2-2層
8	弥生	甕	−	−	〈14.4〉	頸部:櫛描簾状文(11本) 胴部:櫛描波状文	ヘラミガキ	回転実測	M2-1層
9	弥生	甕	14.6	−	〈6.3〉	櫛描波状文	ヘラミガキ	回転実測	M2-1層
10	弥生	壺	−	−	−			断面実測・拓本	M2
11	弥生	壺	−	−	−			断面実測・拓本	M2
12	弥生	鉢?	15.8	−	〈4.1〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	M2-1層
13	弥生	高坏	−	14.0	〈16.1〉	ハケ目→ヘラミガキ→赤色塗彩	坏部:赤色塗彩　脚部:ハケ目	完全実測	M2-2層　う-6
14	弥生	甑	−	5.4	〈11.2〉	ヘラケズリ	ヘラナデ	完全実測	M2-2層　D1
15	弥生	甑	−	3.6	〈2.4〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測　底部:拓本	M2-2層
16	弥生	壺	−	10.8	〈3.0〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	M2-1層
17	陶器	擂り鉢	−	−	−			破片実測	M4　い-3
18	陶器	片口鉢	−	−	−			破片実測	M4
19	陶器	植木鉢	−	−	−			破片実測	M4
20	陶器	甕	−	−	−			破片実測	M4
21	陶器	碗	−	−	−			破片実測	M4
22	陶器	火鉢	−	20.0	〈2.5〉	胴下端部:回転ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	ロクロナデ	回転実測	M4
23	弥生	鉢?	−	6.0	〈3.4〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	M6
24	弥生	甕	−	−	−	口縁部:櫛描波状文　頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M8
25	弥生	甕	−	−	−	口唇部:縄文　頸部:櫛描斜線文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M8
26	弥生	壺	−	−	−	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	破片実測	M8
27	弥生	甕	−	−	−	口縁部:櫛描斜線文　頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M8
29	弥生	壺	−	−	〈13.5〉	ヘラミガキ→赤色塗彩 頸部:櫛描簾状文(15本)	ハケ目→ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	M7-2層
30	弥生	壺	−	−	−	赤色塗彩 頸部:櫛描直線文・櫛描垂下文	ヘラミガキ→赤色塗彩	断面実測・拓本	M7-1層
31	弥生	壺	−	−	−	ヘラミガキ→赤色塗彩 頸部:櫛描直線文・櫛描垂下文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M7-2層
32	弥生	壺	−	−	−	?	赤色塗彩	断面実測・拓本	M7下層
33	弥生	壺	−	15.4	〈15.8〉	ハケ目→ヘラミガキ→赤色塗彩	剥落	完全実測	M7
34	弥生	壺	−	−	〈4.0〉	ヘラミガキ→赤色塗彩 頸部:櫛描簾状文(9本)・櫛描波状文	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測・拓本	M7
35	弥生	壺	−	−	〈6.6〉	ヘラミガキ→赤色塗彩 頸部:縄文・櫛描波状文 ヘラ描横走沈線文	ヘラナデ→ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測・拓本	M7
36	弥生	甕	21.2	−	〈16.0〉	櫛描波状文(8本)	ヘラミガキ	完全実測	M7　M7-1・2層
37	弥生	甕	24.4	−	〈10.6〉	櫛描波状文(8本)	ヘラミガキ	回転実測	M7　M7-1層
38	弥生	甕	19.0	−	〈18.7〉	ハケ目　ヘラミガキ	ハケ目　ヘラミガキ	回転実測	M7-1層　う-5
39	弥生	甕	14.2	−	〈4.5〉	ハケ目→ヘラナデ　櫛描波状文	ヘラミガキ	回転実測	M7下層
40	弥生	甕	19.2	−	〈3.7〉	口縁部:櫛描波状文(8本) 頸部:櫛描簾状文	ヨコナデ	回転実測	M7　M7-2層
41	弥生	甕	21.2	−	〈9.8〉	口唇部:櫛状のものを押圧? 頸部:櫛描簾状文(13本) 口縁・胴部:櫛描波状文(13本)	ヘラミガキ	回転実測	M7
42	弥生	甕	21.0	−	〈14.8〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	回転実測・拓本	M7
43	弥生	甕	23.6	−	〈8.6〉	口縁部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(17本)	ヘラミガキ	回転実測・拓本	M7-2層
44	弥生	甕	22.0	−	〈8.8〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(10本)	ヘラミガキ	回転実測・拓本	M7-1・2層
45	弥生	甕	−	−	−	口唇部:縄文　櫛描横羽状文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M7-1層
46	弥生	甕	19.4	−	〈6.4〉	口縁・胴部:櫛描波状文 頸部:櫛描簾状文(7本二連止)	ヘラミガキ	回転実測・拓本	M7-2層
47	弥生	甕	16.4	−	〈6.0〉	口縁部:櫛描波状文(6本) 頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	回転実測・拓本	M7-1層
48	弥生	甕	−	−	−	口縁部:櫛描波状文 ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	断面実測・拓本	M7
49	弥生	甕	−	−	−	櫛描横羽状文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M7-1層
50	弥生	甕	−	−	−	櫛描波状文　頸部:櫛描簾状文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M7
51	弥生	甕	−	−	−	櫛描斜線文	ヘラミガキ	断面実測・拓本	M7-2層
52	弥生	甕	−	8.2	〈9.7〉	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	M7-2層
53	弥生	甕	−	8.8	〈9.5〉	ヘラミガキ　胴部:櫛描斜線文	ヘラミガキ	完全実測	M7-2層・下層

第25表　溝状遺構出土遺物観察表①

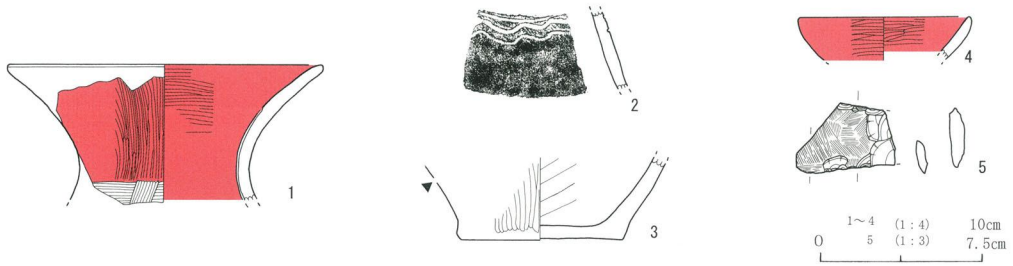
No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
54	弥生	甕	−	7.2	〈8.4〉	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	M7　M7-2層
55	弥生	甕	−	7.6	〈8.5〉	胴部:櫛描波状文 ハケ目→ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	M7-1・2層
56	弥生	壺	−	11.0	〈6.5〉	ヘラミガキ	ハケ目	完全実測	M7-1層
57	弥生	甕	−	7.8	〈5.0〉	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	M7下層
58	弥生	甑	−	6.0	〈3.6〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	回転実測	M7-2層
59	弥生	高坏	−	17.4	〈16.1〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ハケ目	完全実測	M7　M7-2層
60	弥生	高坏	−	−	〈14.9〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	坏部:ヘラミガキ→赤色塗彩 脚部:ハケ目	完全実測	M7　M7-2層
61	弥生	高坏?	−	−	−	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	破片実測	M7
62	弥生	高坏?	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ→赤色塗彩	破片実測	M7-1層
63	弥生	高坏	−	−	〈9.0〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	M7　M7-1・2層
64	弥生	高坏	−	12.4	〈6.3〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	脚部:ヘラナデ	完全実測	M7-1層
65	弥生	鉢	17.0	5.0	〈7.3〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	M7 M7-1層 う-5
66	弥生	鉢	14.9	5.2	7.0	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	完全実測	M7

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
28	磨製石鏃	粘板岩	1/1	3.5	2.1	0.2	1.8	両面研磨、未製品の可能性あり	M8
67	横刃型石器	花崗岩	1/1	5.2	11.9	1.3	101.8	使用痕跡は不明瞭	M7

第26表　溝状遺構出土遺物観察表②

第４節　遺構外出土遺物

本遺跡は遺構検出時に包含層化した黒色土から多くの弥生期の土器と石器が出土した。ここでは遺構に伴わない資料であるが実測し提示しておく。



第42図　遺構外出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	弥生	壺	19.4	−	〈8.5〉	頸部:櫛描直線文・櫛描垂下文 ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	い-5
2	弥生	壺	−	−	−	ヘラ描横走文　ヘラ描波状文	ハケ目	断面実測	お-10
3	弥生	甕	−	10.2	〈5.0〉	ヘラミガキ	ヘラナデ	完全実測	え-8
4	弥生	鉢?高坏?	10.6	−	〈2.7〉	ヘラミガキ→赤色塗彩	ヘラミガキ→赤色塗彩	回転実測	お-10

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
5	石包丁	粘板岩	1/6	3.2	4.5	0.7	11.5	一部、刃部が残存	南区

第27表　遺構外出土遺物観察表

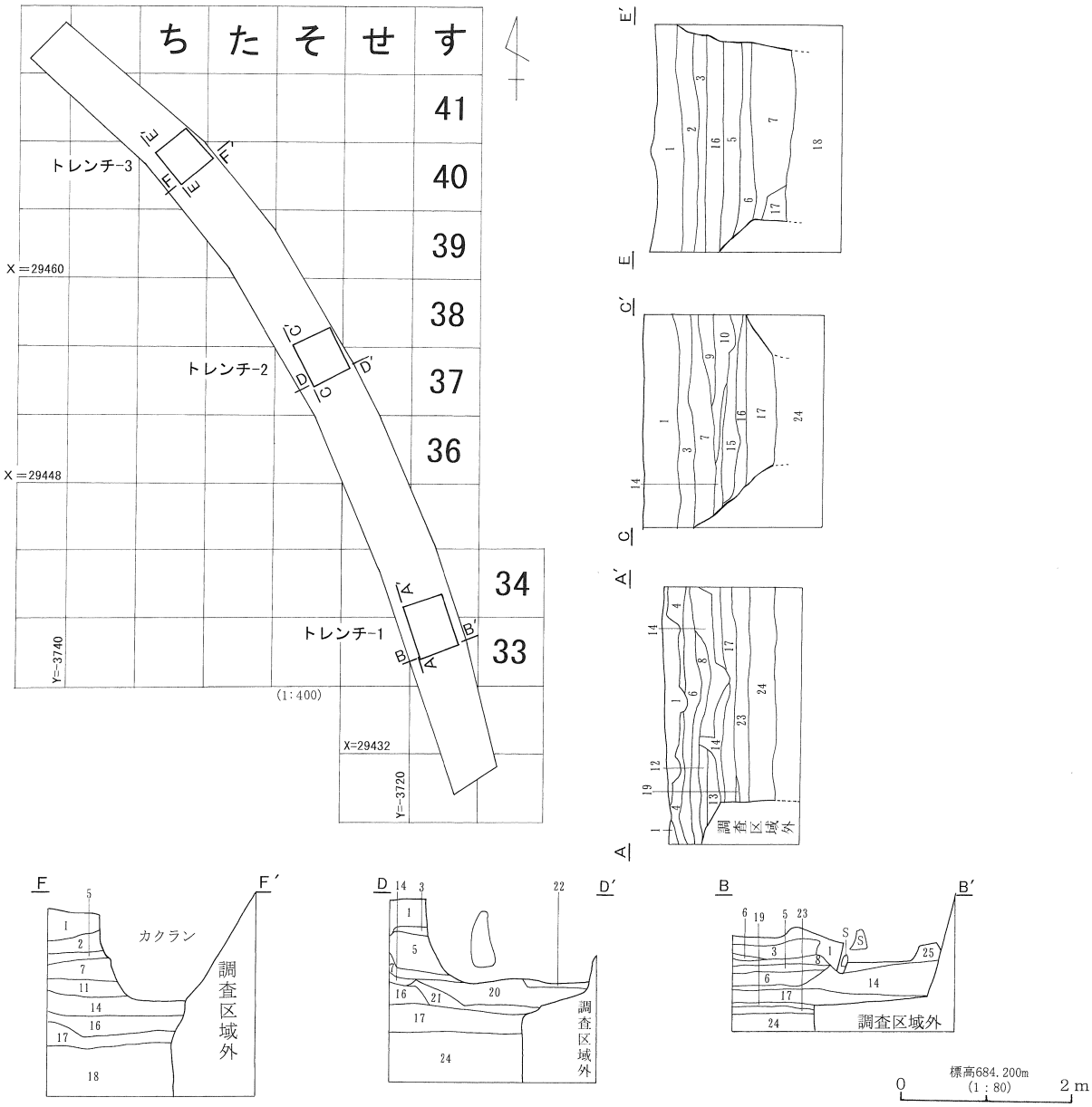
第５節　調査のまとめ

今回の調査では住居址8軒の検出に止まったが、道路幅5mの発掘調査であり面積的な制約から、遺構については詳細が不明なものが多かった。ただ遺物に関しては弥生後期の土器群が出土し、後期初頭のいわゆる「吉田式」を考える上で貴重な資料が含まれている。

周辺部は長野県埋蔵文化財センターが中部横断自動車道予定地として発掘調査を行っており、弥生後期の住居址や円形周溝墓が検出されている。それらが報告されれば今回の調査地点の位置づけも確定できるであろう。

第６節　北側調査区

北側調査区は低地で遺構が検出されなかった為、土層堆積状態を提示する。



1. 暗褐色土層(10YR3/3)　砂層。鉄分を多量に含む。
2. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　灰色の砂が混じる。
3. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　水田層に砂が混じる。
4. オリーブ黒色土層(5GY2/1)　粘性あり。砂が混じる。
5. 暗褐色土層(10YR3/3)　砂層。砂と５㎜大の小石が混じる。粘性なし。
6. 黒色土層(2.5GY2/1)　オリーブシルトを含む。粘性あり。
7. 褐灰色土層(10YR4/1)　砂と小礫を含む。粘性ややあり。
8. オリーブ黒色土層(5GY3/1)　粘性あり。緻密。
9. 黒褐色土層(10YR2/2)　砂。
10. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　シルト質土。粘性少しあり。
11. 黒褐色土層(10YR2/3)　シルト層・小礫・シルト層混在。
12. オリーブ黒色土層(7.5Y3/1)　オリーブ色土を含む。粘性あり。緻密。
13. オリーブ黒色土層(5Y3/1)　粘性あり。砂を含む。
14. 黒褐色土層(10YR3/1)　緻密な土。粘性あり。小礫を含む。
15. 灰黄褐色土層(10YR5/2)　シルト質土。緻密。粘性なし。
16. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　砂層。
17. 灰色土層(5Y4/1)　粘性あり。パミス・ローム粒子・砂を含む。
18. 灰色土層(7.5Y4/1)　砂質。
19. 灰色土層(7.5Y4/1)　砂質。
20. 黒色土層(5Y2/1)　砂礫を含む。粘性なし。
21. オリーブ黒色土層(5Y3/1)　非常に細かい砂。
22. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　砂。
23. 灰色土層(7.5Y5/1)　多量に砂を含む。
24. オリーブ黒色土層(5Y3/1)　粘質土。緻密。
25. 褐灰色土層(10YR4/1)　水田層。粘質土。

第43図　北側調査区全体図

西一里塚遺跡Ⅲ全景

H1号住居址全景（東より）

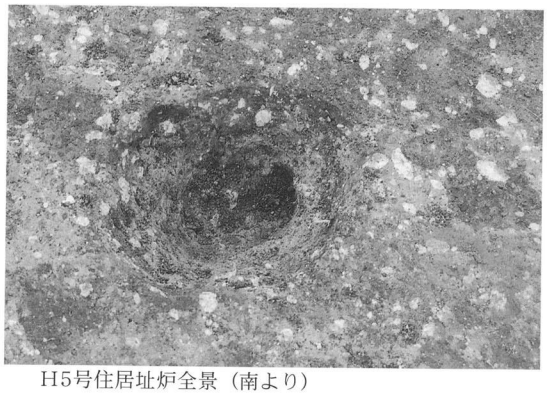
H2号住居址全景（南より）

H3・H6号住居址全景（北より）

H3号住居址全景（南より）

H4号住居址全景（西より）

H5号住居址全景（南より）


H5号住居址炉全景（南より）

H6・H7号住居址掘り方全景（南より）

M1号溝状遺構東西セクション

M2号溝状遺構全景（西より）

M4号溝状遺構全景（東より）

M7号溝状遺構全景（西より）

M8号溝状遺構全景（西より）

D1号土坑遺物出土状況（北より）

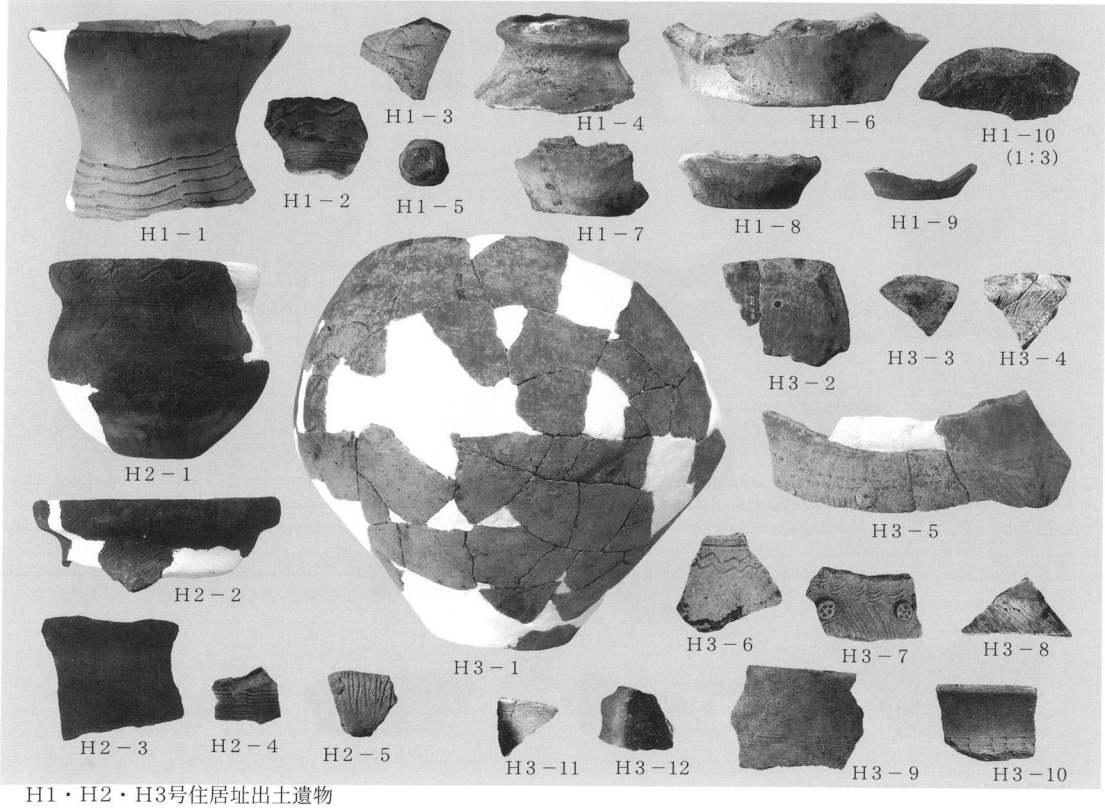
M9号溝状遺構全景

北区No.1トレンチセクション（東より）

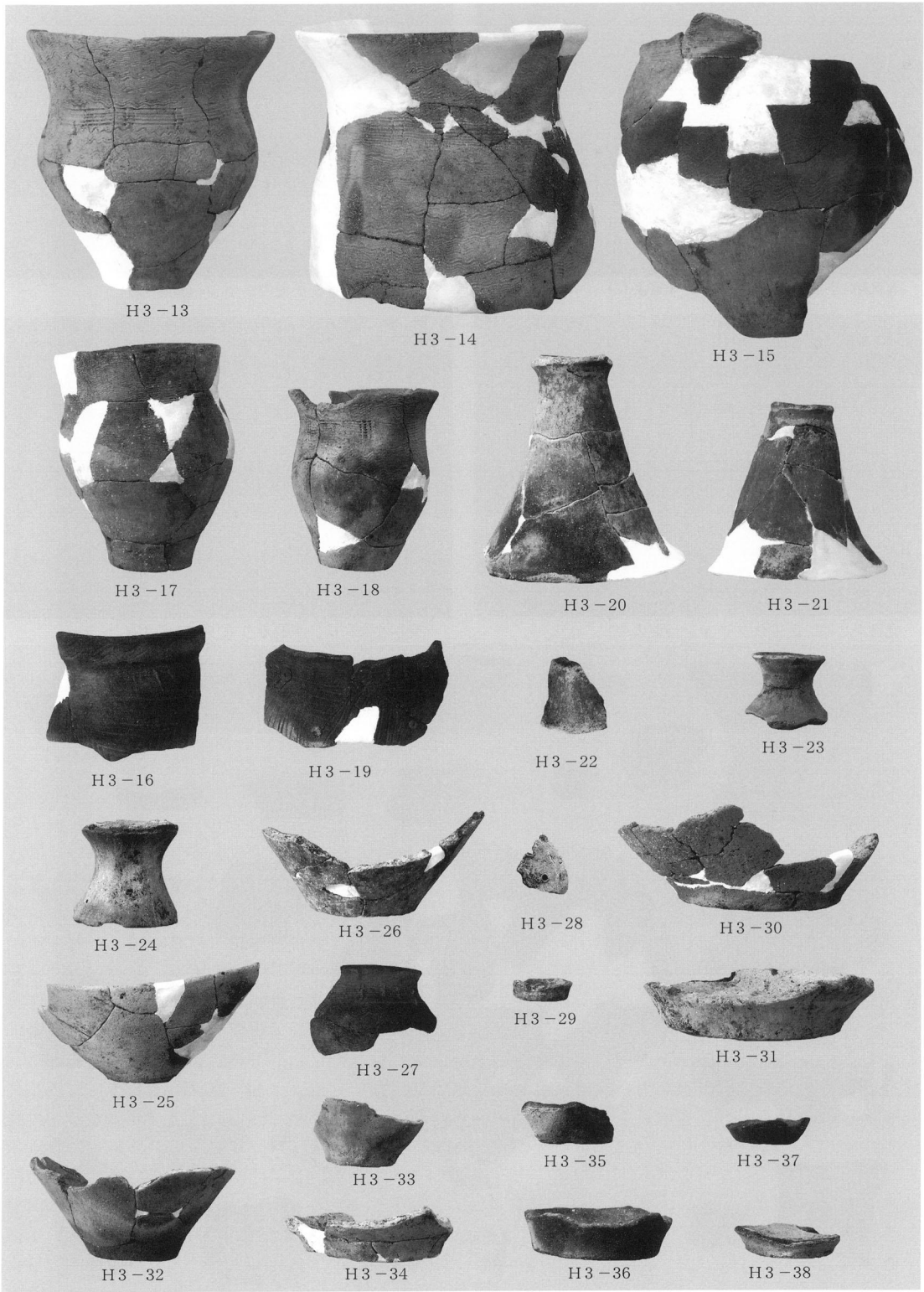
北区No.1トレンチセクション（東より）

北区No.2トレンチセクション（東より）

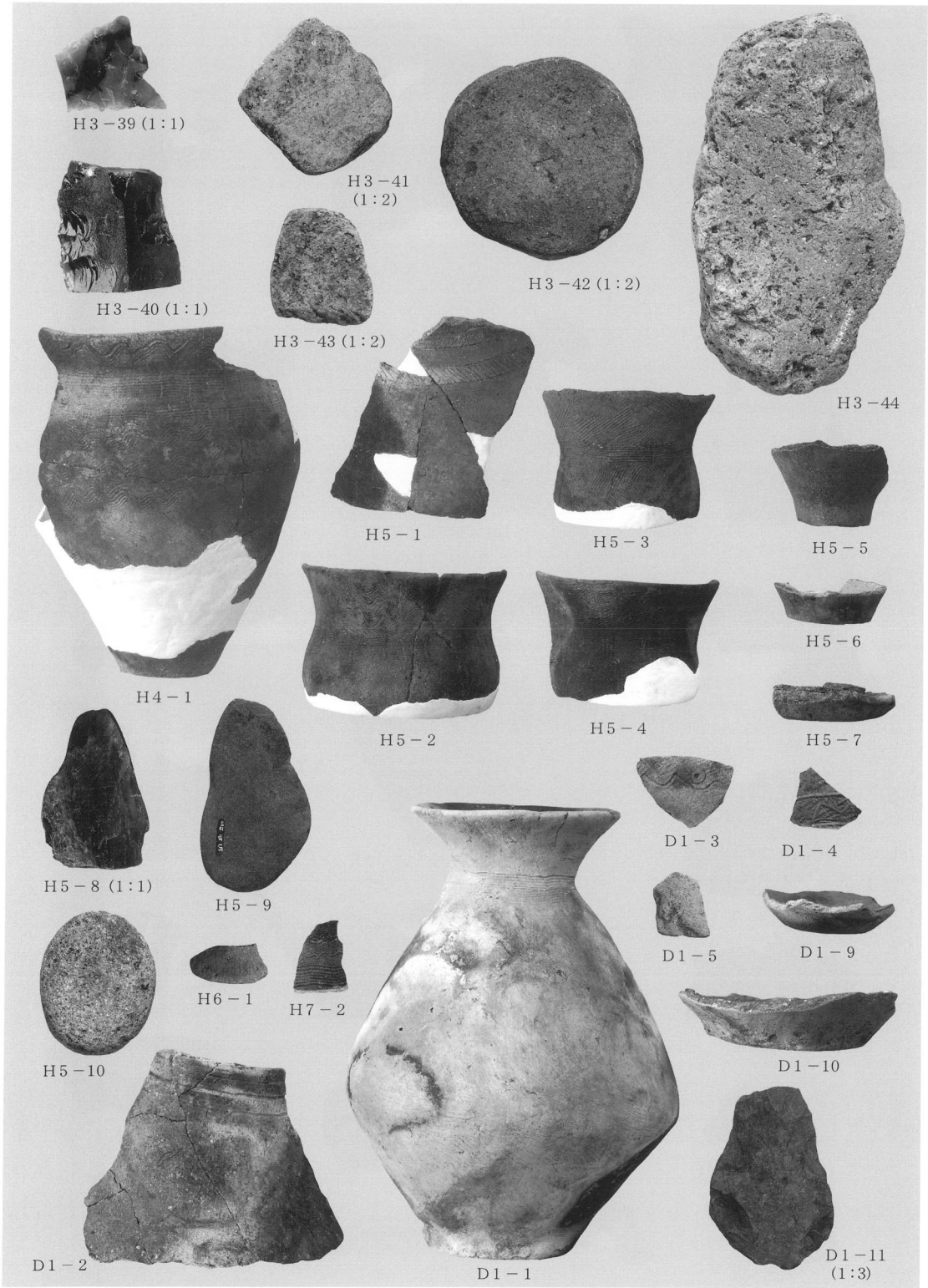
北区No.3トレンチセクション（東より）



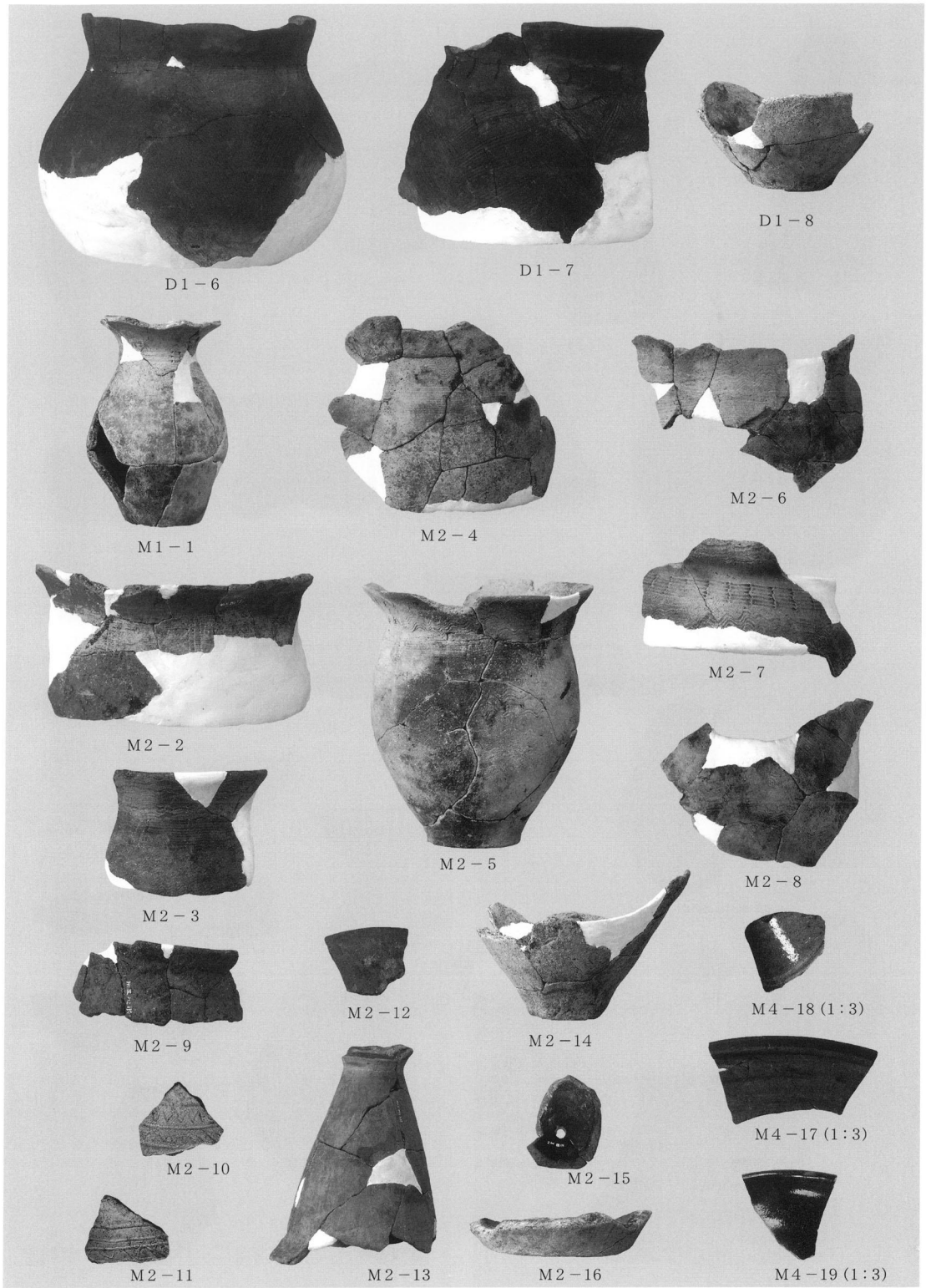
H1・H2・H3号住居址出土遺物


H3－13
H3－14
H3－15
H3－17
H3－18
H3－20
H3－21
H3－16
H3－19
H3－22
H3－23
H3－24
H3－26
H3－28
H3－30
H3－29
H3－31
H3－25
H3－27
H3－33
H3－35
H3－37
H3－32
H3－34
H3－36
H3－38

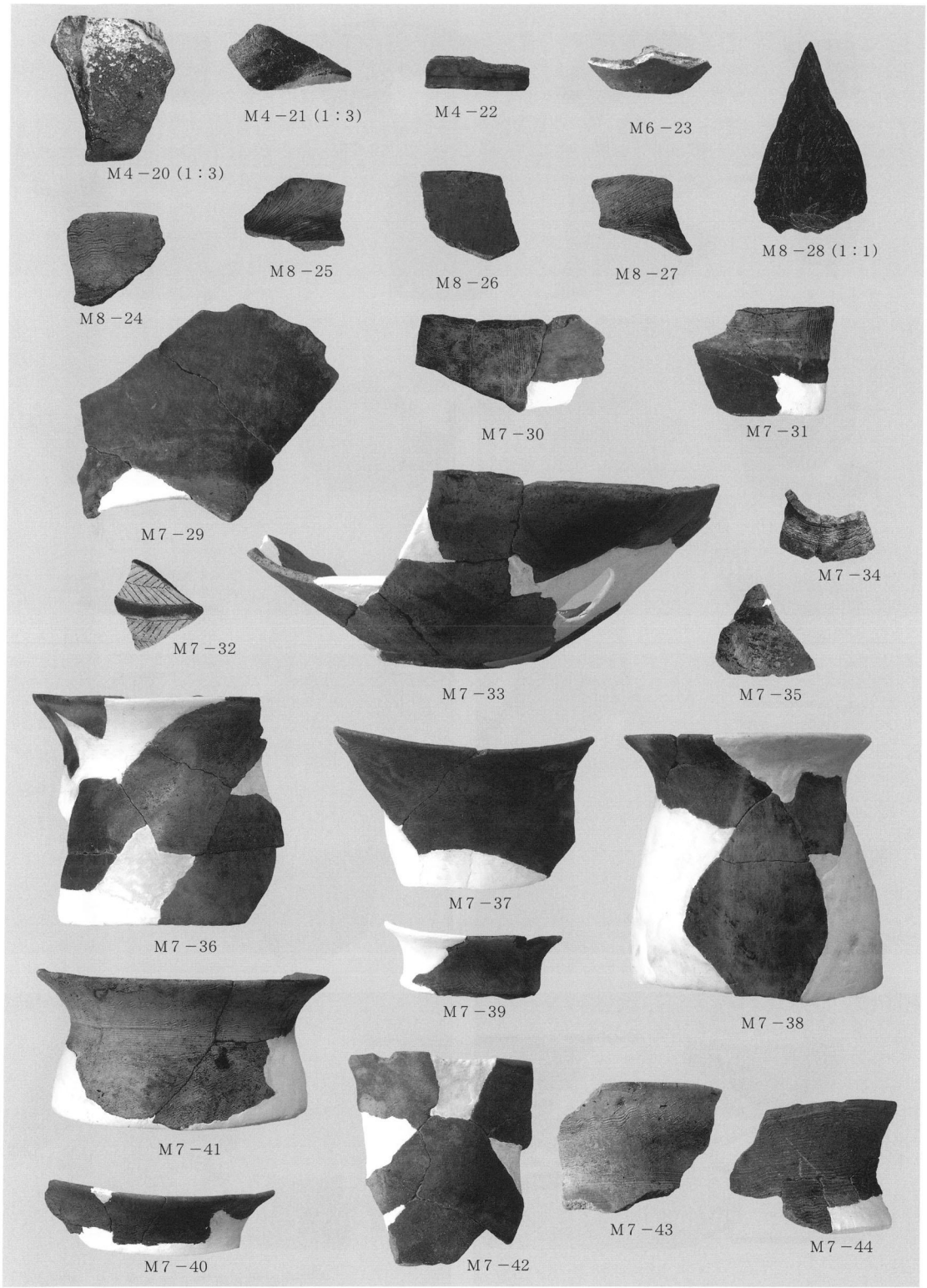
H3号住居址出土遺物



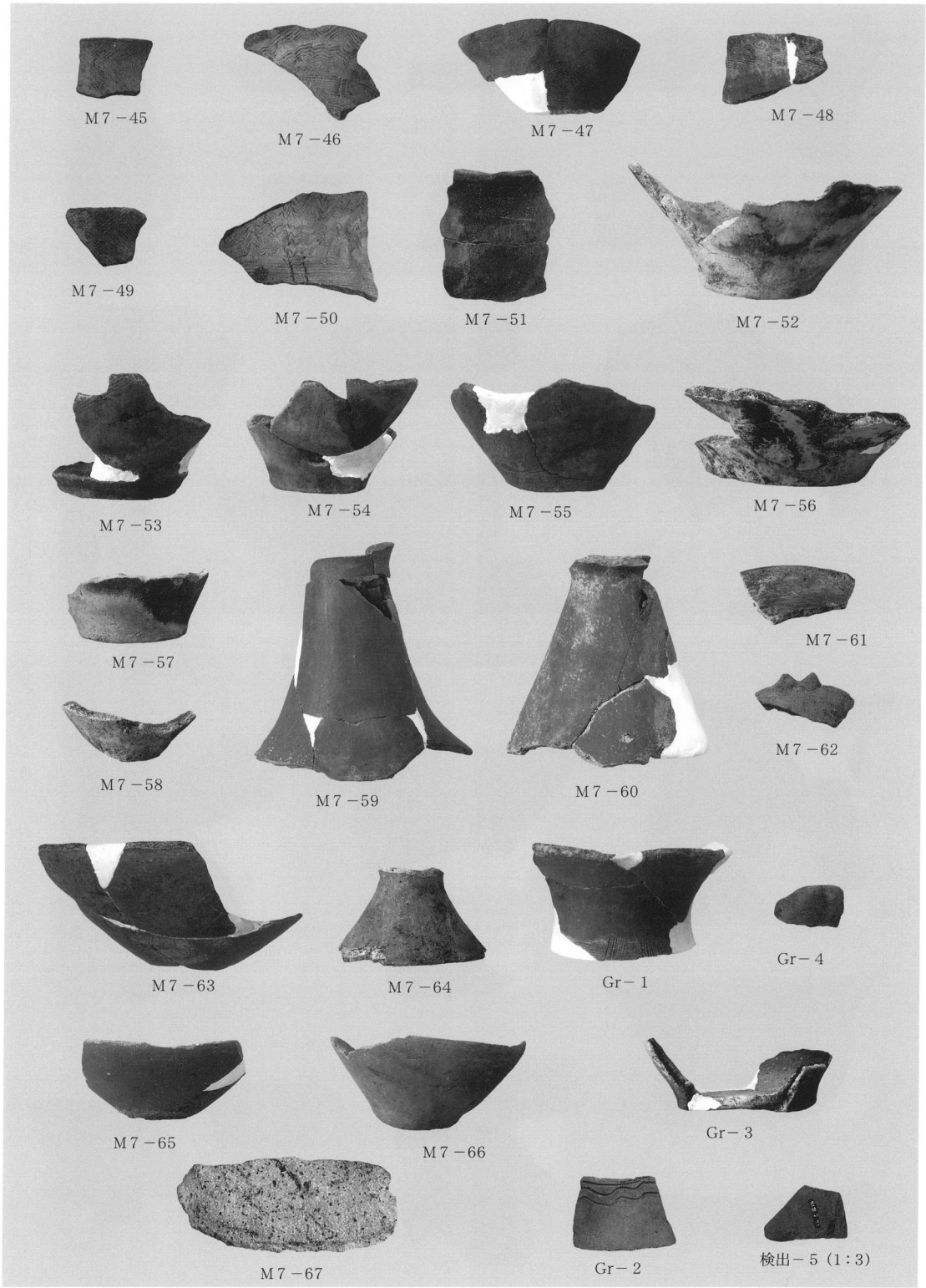
H3～7号住居址、D1号土坑出土遺物



D1号土坑、M1・M2.・M4号溝状遺構出土遺物



M4・M6・M7・M8号溝状遺構出土遺物



M7号溝状遺構、遺構外出土遺物

第Ⅰ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

大豆田遺跡Ⅲは周防畑遺跡群に含まれ、佐久市長土呂地籍に所在する。遺跡周辺はいわゆる田切地形の谷部が消滅し平坦地形となる部分である。平坦部は現在水田として利用され、田切台地上は畑地として利用されている。今回調査された地点はこの台地と平坦地の境目にあたり、小さな田切が消滅する部分にあたる。

近年では遺跡西側を通過する「中部横断自動車道」の建設に先立ち数多くの遺跡が調査されている。長野県埋蔵文化財センターが調査した西近津遺跡では、弥生後期から平安時代に及ぶ大集落が調査され、弥生時代後期の超大型竪穴住居址や古代の銅印が発見されている。また、今回の調査区に接する大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱでは「大井」の刻書や動物・雲・花が印刻された灰釉陶器小瓶が出土している。

今回の調査地点は「中部横断自動車道」に接する市道改良にともなう発掘調査である。

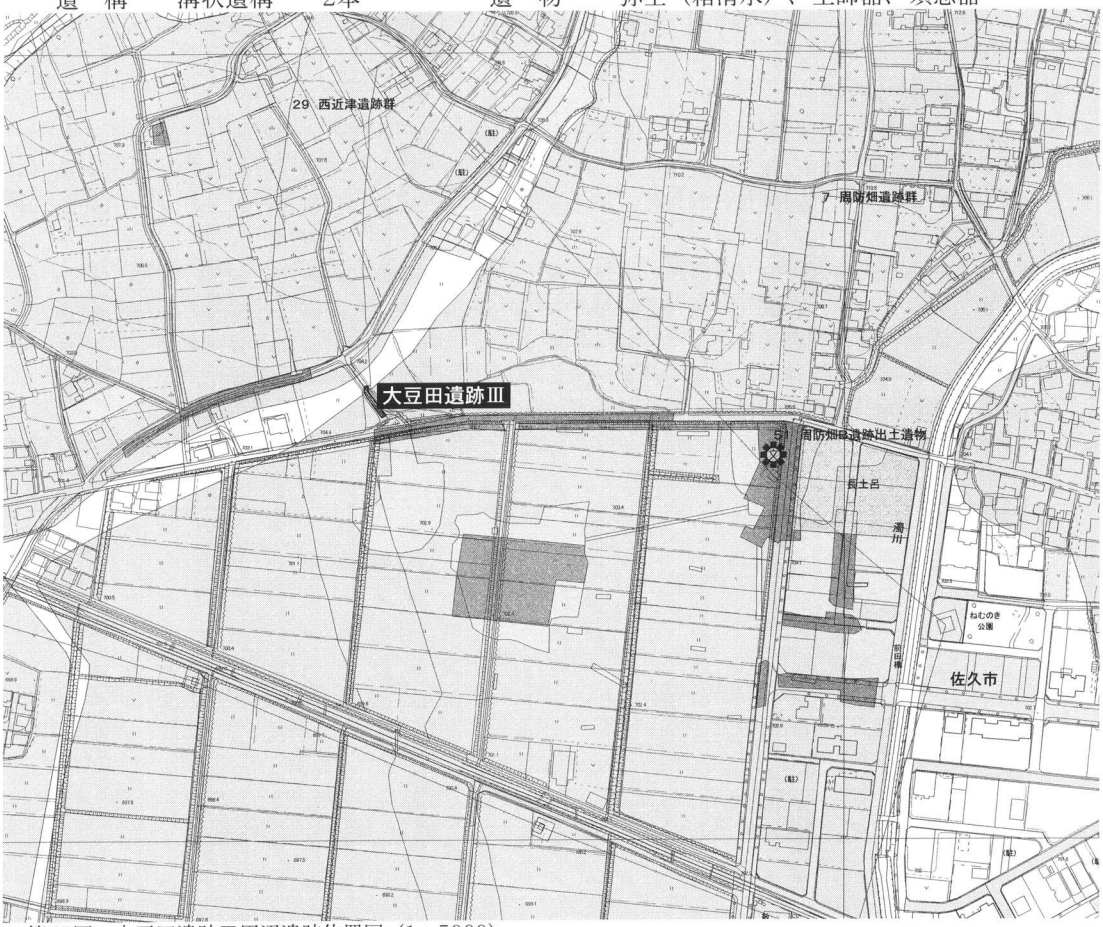
第44図　大豆田遺跡Ⅲ調査全体図（1：1000）

第２節　基本層序

調査地点は浅間第一軽石流の堆積台地が濁川などにより浸食され形成された台地末端に位置する。大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ地点では暗褐色土が遺構確認であり、強粘質の泥炭層が存在したが、今回の調査区は浅間軽石流層（P1）の黄色土層であった。

第３節　検出遺構と遺物の概要

遺　構　　溝状遺構　　2本　　遺　物　　弥生（箱清水）、土師器、須恵器



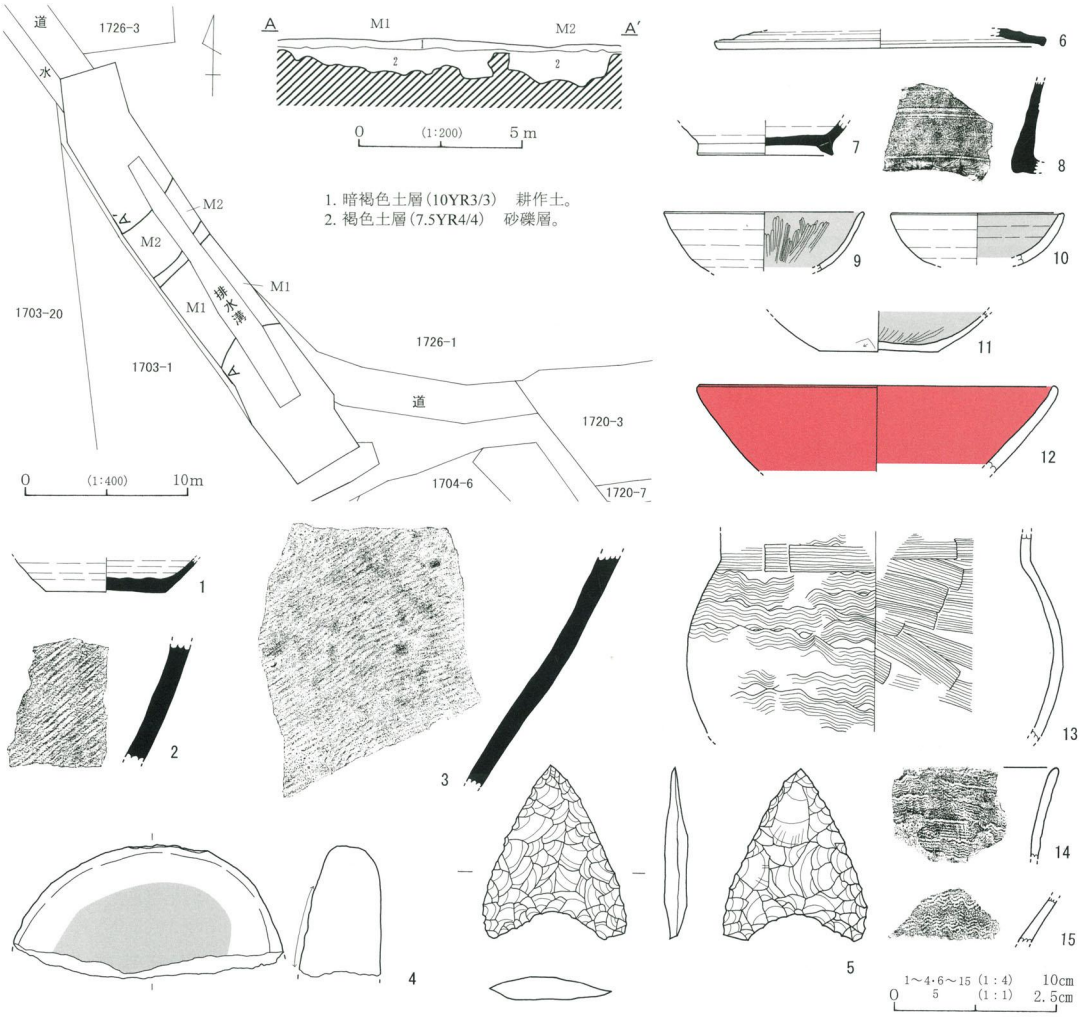
第45図　大豆田遺跡Ⅲ周辺遺跡位置図（1：5000）

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　溝状遺構　（第46図）

今回の調査では調査区を北東から北西に抜ける2本の溝状遺構が検出された。この2本の溝は北側に存在する小さな田切低地に添うような形であった。規模はM1号溝状遺構が幅7m・深さ0.85m、M2号溝状遺構が幅3.2m、深さ1.10mである。どちらの溝も底面は凹凸が激しく、覆土も砂や砂礫層が主体であった。本址からの出土遺物はどちらも時代が多様であり、かつ、また小片が多かった。M1号溝状遺構から出土した1は須恵器坏の底部である。2と3は須恵器甕の胴部破片であり、いずれも外面は平行タタキが行われている。4は擦りと敲きが行われている礫で、5は石鏃である。M2号溝状遺構からは、6が須恵器蓋、7が須恵器小型壺の破片である。8は須恵器甕の頸部から口縁部付近であり沈線により区画されている。9～11は土師器杯である。12は弥生時代の高杯か鉢の口縁部と考えられる。13～15は弥生甕であり、いずれも櫛描文が施されている。

これらの状況から本址の所産時期は古代以降と考えられる。遺構の性格は不明瞭な部分もあるが礫や砂を多く含み、流水の可能性もあることから、地形に添うように走る自然流路の跡とも考えられる。



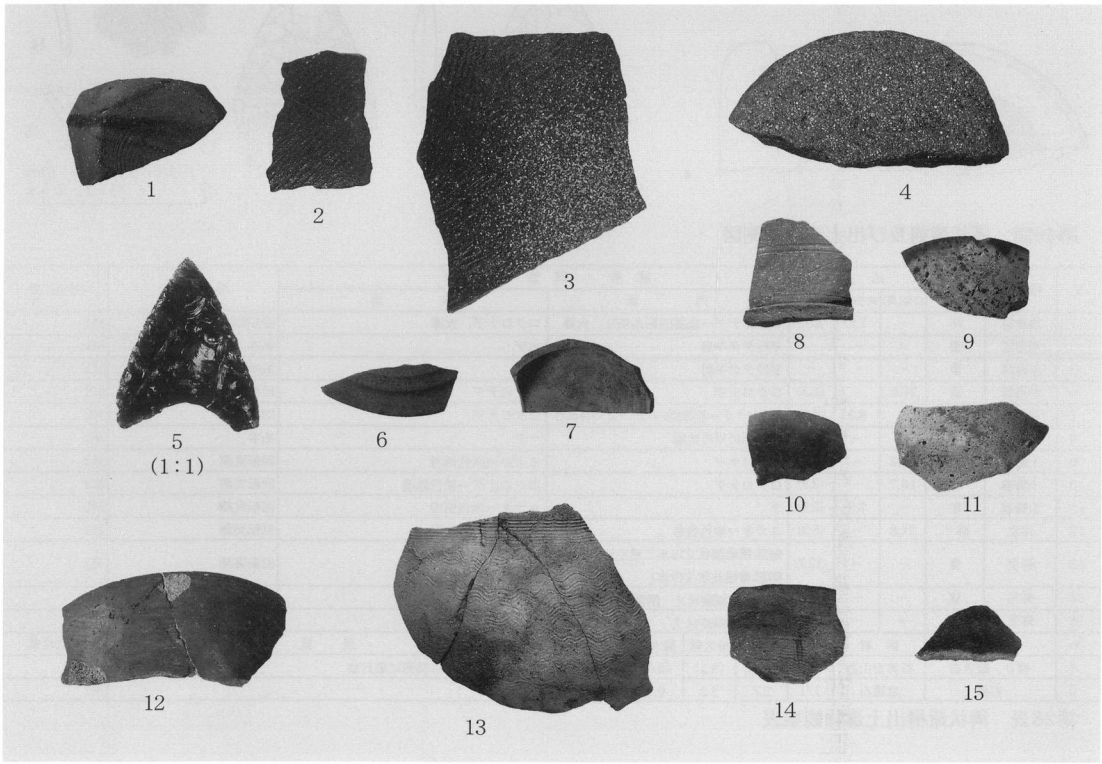
第46図　溝状遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面		
1	須恵器	坏	−	7.5	〈2.1〉	ロクロナデ→底部回転糸切り、火襷	ロクロナデ、火襷	回転実測	M1
2	須恵器	甕	−	−	−	平行タタキ目	ナデ	拓本	M1
3	須恵器	甕	−	−	−	平行タタキ目	ナデ	拓本	M1
6	須恵器	蓋	20.0	−	〈1.3〉	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	M2
7	須恵器	壺？	−	8.3	〈2.2〉	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)→付高台	ロクロナデ	回転実測	M2
8	須恵器	甕	−	−	−	口縁部に平行沈線	ナデ	拓本	M2
9	土師器	坏	12.2	−	〈3.7〉	ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	回転実測	M2
10	土師器	坏	10.7	−	〈3.2〉	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理	回転実測	M2
11	土師器	坏	−	7.3	〈2.5〉	？	ミガキ→黒色処理	回転実測	M2
12	弥生	鉢？	21.8	−	〈5.3〉	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	回転実測	M2
13	弥生	甕	−	−	〈12.7〉	頸部:櫛描簾状文(9本二連止) 胴部:櫛描波状文(9本)	ハケ目	回転実測	M2
14	弥生	甕	−	−	−	頸部：櫛描簾状文　胴部：櫛描波状文	ナデ	拓本	M2
15	弥生	甕	−	−	−	胴部：櫛描波状文	ナデ	拓本	M2

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
4	擦り・敲き石	石英安山岩	1/3	(16.5)	(8.1)	(5.0)	(882.4)	正面にすり面、右側面に敲打痕	M1
5	石鏃	黒曜石	1/1	2.7	2.2	0.4	1.46	無茎	M1

第28表　溝状遺構出土遺物観察表

大豆田遺跡Ⅲ全景　（南より）



M1・2号溝状遺構出土遺物

付編　科学分析

森平遺跡・大豆田遺跡Ⅲ出土の動物遺体

樋岳 泉二（早稲田大学）・孔　智賢（パレオ・ラボ）

1. はじめに

佐久市横和に所在する森平遺跡は、湯川の第一河岸段丘面に位置する。発掘調査の結果、弥生時代～平安時代の集落址が確認された。ここでは、古墳時代？～古代の遺構から検出された歯および骨片資料の同定結果を報告する。

2. 資料と分析方法

資料は、4遺構から採集された12資料（41点）である。いずれも覆土から取り上げられたものだが、採集方法の詳細は不明である。

H1・H3号住居址の出土地点Ⅰ～Ⅳ区は、住居址を任意的に四等分した区画である。北東の角からⅠ区となり左隣をⅡ区、その下をⅢ区、そして右隣をⅣ区と仮称した。H1号住居址の歯は覆土の下層から床面にかけて出土したが、本遺構の床面が不自然で住居址かどうかの確証が得られなかった。出土遺物からは古墳の周溝内とも考えられる。またH3号住居址は小鍛冶遺構の可能性も想定されている。

クリーニングは、筆に水を付けて洗浄した後、接合可能な資料については、接合を行った。同定は国立歴史民俗博物館西本豊弘氏所蔵の現生標本との比較によって行った。

3. 結果および考察

同定結果を表1に示す。資料はすべて哺乳類の歯または骨片である。全般的に溶解が進行しており、保存状態は悪い。以下、遺構ごとに内容を述べる。

森平遺跡　H1号住居址（資料No.1～6．古墳時代?）

ウマ Equus ferus の臼歯がまとまって採集されている。顎骨は検出されず、歯だけが残っている状態である。資料No.1（右下顎臼歯3点）、No.3（右上顎臼歯2点）、No.4-7～9（左上顎臼歯3点）、No.4-10～13（左下顎臼歯4点）は、それぞれ同一個体のものと思われる。歯種の重複がない（最小個体数＝1）ことから、すべての歯が同一個体に由来する可能性もあるが、確実ではない。歯のみの出土だが、頭骨のみが埋蔵されていたのか、もともとは他の骨も存在していたが埋蔵過程で骨が溶解消滅した結果、歯だけが残されたのかは判断できない。本資料の性格については、出土状況を踏まえた上で検討する必要がある。

森平遺跡　H2号住居址（資料No.7．平安時代）

哺乳類の小骨片2点が採集されている。種の判定は困難である。

森平遺跡　H3号住居址（資料No.8～11．平安時代）

シカCervus nipponの脛骨の可能性のある骨片が1点みられたが、小破片のため断定できない。ほかに獣骨片が若干採集されているが、種の判定は困難である。

森平遺跡　遺構外一括（資料No.13-27～32．年代不明）

シカの大腿骨とシカの脛骨の可能性のある骨片、種同定の困難な肋骨および部位不明破片が若干採集されている。

大豆田遺跡Ⅲ　M1号溝状遺構（資料No.13-25・26．古代）

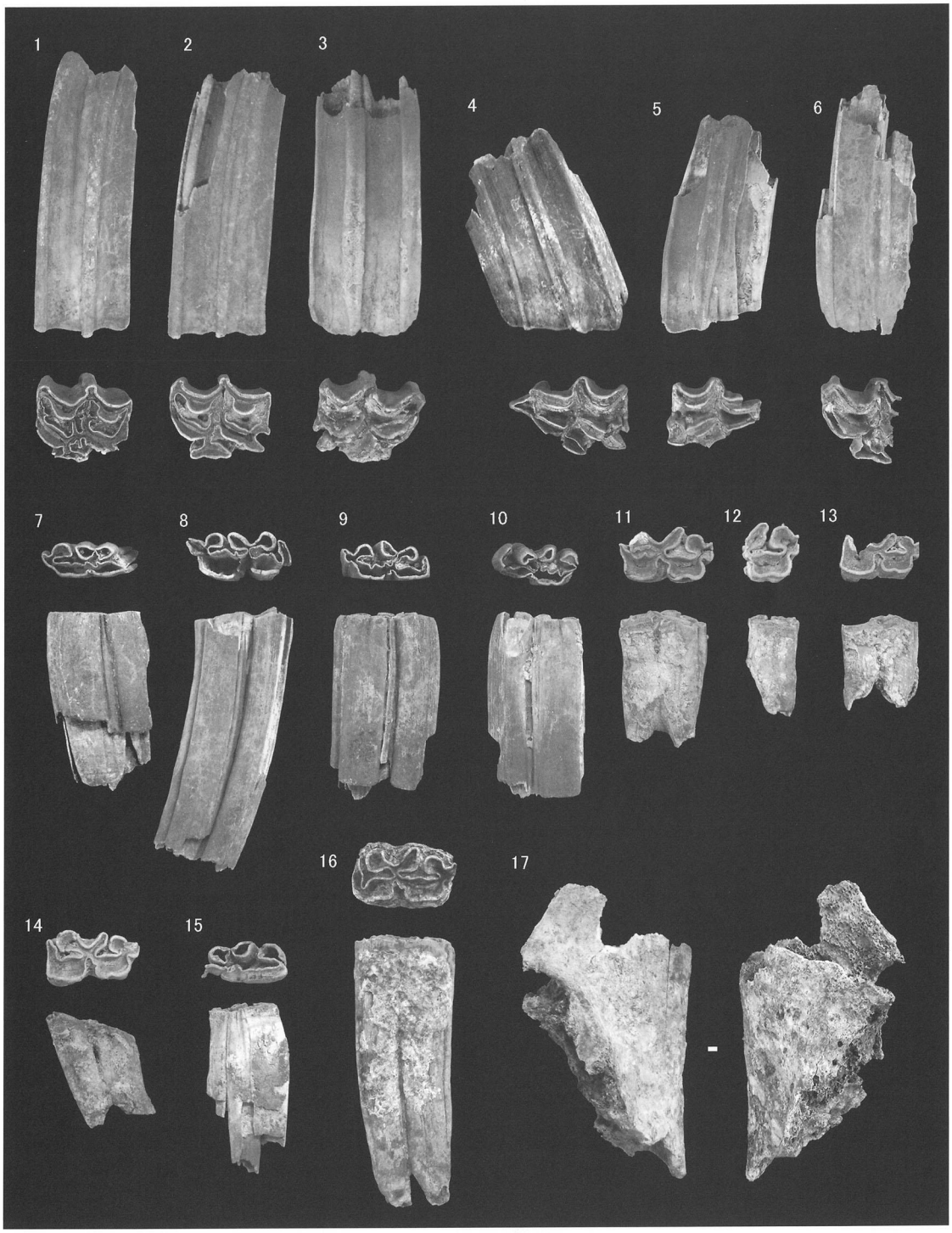
ウマの下顎臼歯と尺骨が採集されている。

4. おわりに

森平遺跡からはウマ・シカを含む哺乳類遺体が出土した。とくに古墳時代？のH1号住居址から同一個体の可能性のあるウマの臼歯がまとまって出土した点は注目されるが、その性格については出土状況との比較検討を要する。大豆田遺跡Ⅲからはウマの歯と骨が確認された。

表1. 森平遺跡・大豆田遺跡Ⅲ出土動物遺体の同定結果

資料No.	No.	森平遺跡	出土地点	種類	部位	残存状態	左右	数	備考
1	1	H1号住居址	Ⅰ区①	ウマ	下顎P4	エナメル質のみ	R	1	
1	2	H1号住居址	Ⅰ区①	ウマ	下顎M1	エナメル質のみ	R	1	同一個体
1	3	H1号住居址	Ⅰ区①	ウマ	下顎M2	エナメル質のみ	R	1	
2	4	H1号住居址	Ⅰ区②	ウマ	下顎臼歯（P3～M2のいずれか）	エナメル質のみ	L	1	
3	5	H1号住居址	Ⅲ区①	ウマ	上顎臼歯（P3～M2のいずれか）		R	1	同一個体
3	6	H1号住居址	Ⅲ区①	ウマ	上顎臼歯（P3～M2のいずれか）		R	1	
4	7	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	上顎臼歯		L	1	
4	8	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	上顎臼歯		L	1	同一個体
4	9	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	上顎臼歯		L	1	
4	10	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	下顎臼歯（P3～M1のいずれか）	エナメル質のみ	L	1	
4	11	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	下顎臼歯（P3～M1のいずれか）	エナメル質のみ	L	1	同一個体
4	12	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	下顎臼歯（P3～M1のいずれか）	エナメル質のみ	L	1	
4	13	H1号住居址	Ⅲ区②	ウマ	下顎M2	エナメル質のみ	L	1	
5	14	H1号住居址	Ⅲ区③	ウマ	上顎P2		L	1	
5	15	H1号住居址	Ⅲ区③	ウマ	上顎臼歯（P3～M2のいずれか）		R	1	
6	16	H1号住居址	Ⅳ区①	ウマ	下顎臼歯	エナメル質のみ	L	1	
7	17	H2号住居址		哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	2	
8	18	H3号住居址	Ⅱ区掘り方	同定不可	不明	破片	-	2	
9	19	H3号住居址	Ⅲ区	シカ？	脛骨？	破片	-	1	No.13-29と骨の質感が類似する
9	20	H3号住居址	Ⅲ区	哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	焼骨, No.11-24と接合
9	21	H3号住居址	Ⅲ区	哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	
9	22	H3号住居址	Ⅲ区	哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	3	
10	23	H3号住居址	焼土①	哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	焼骨
11	24	H3号住居址	焼土②	哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	焼骨, No.9-20と接合
12	-	D5土坑		ヒト	1個体分　詳細は別紙で記載				
13	27	-		シカ	大腿骨	遠位端	R	1	破片2点は接合
13	28	-		哺乳類・種同定不可	肋骨	破片	-	1	シカまたはイノシシ？
13	29	-		シカ？	脛骨？	破片	-	3	骨の質感は同じだが、接合しない
13	30	-		哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	焼骨
13	31	-		哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	1	破片3点は接合
13	32	-		哺乳類・種同定不可	不明	破片	-	4	
資料No.	No.	大豆田遺跡Ⅲ	出土地点	種類	部位	残存状態	左右	数	備考
13	25	M1号溝状遺構	覆土	ウマ	下顎臼歯(P3～M2のいずれか)		L	1	
13	26	M1号溝状遺構	覆土	ウマ	尺骨	近位端	R	1	



図版1　森平遺跡出土の動物遺体（1-15:H1号住居址）大豆田遺跡Ⅲ出土（16・17：M1号溝状遺構）
1-3.ウマ 上顎臼歯R（No.5・No.6・No.15） 4-6.ウマ 上顎臼歯L（No.14・No.7・No.8） 7-9.ウマ 下顎臼歯R（No.1・No.3・No.2） 10-16.ウマ 下顎臼歯L（No.4・No.10・No.11・No.12・No.13・No16・No.25）17.ウマ 尺骨 近位端R（No.26）スケールバー 5cm

図版2　森平遺跡出土の動物遺体（23・24：H2号住居址, 19・25-27：H3号住居址, 18・20-22・28:遺構外）
18.シカ　大腿骨　遠位端R（No.27）　19・20.シカ?　脛骨?（No.19・No.29）　21.哺乳類・種同定不可　肋骨（No.28）
22-28.哺乳類・種同定不可 不明（No.31・No.17・No.17・No.24・No.20・No.23・No.30）スケールバー 5cm

森平遺跡出土の人骨鑑定

梶ヶ山 真里・孔　智賢（パレオ・ラボ）

1. はじめに

佐久市横和に所在する森平遺跡からは、弥生時代～平安時代の集落址が検出された。ここでは、D5号の土坑から検出された人骨の鑑定結果を報告する。

2. 人骨所見

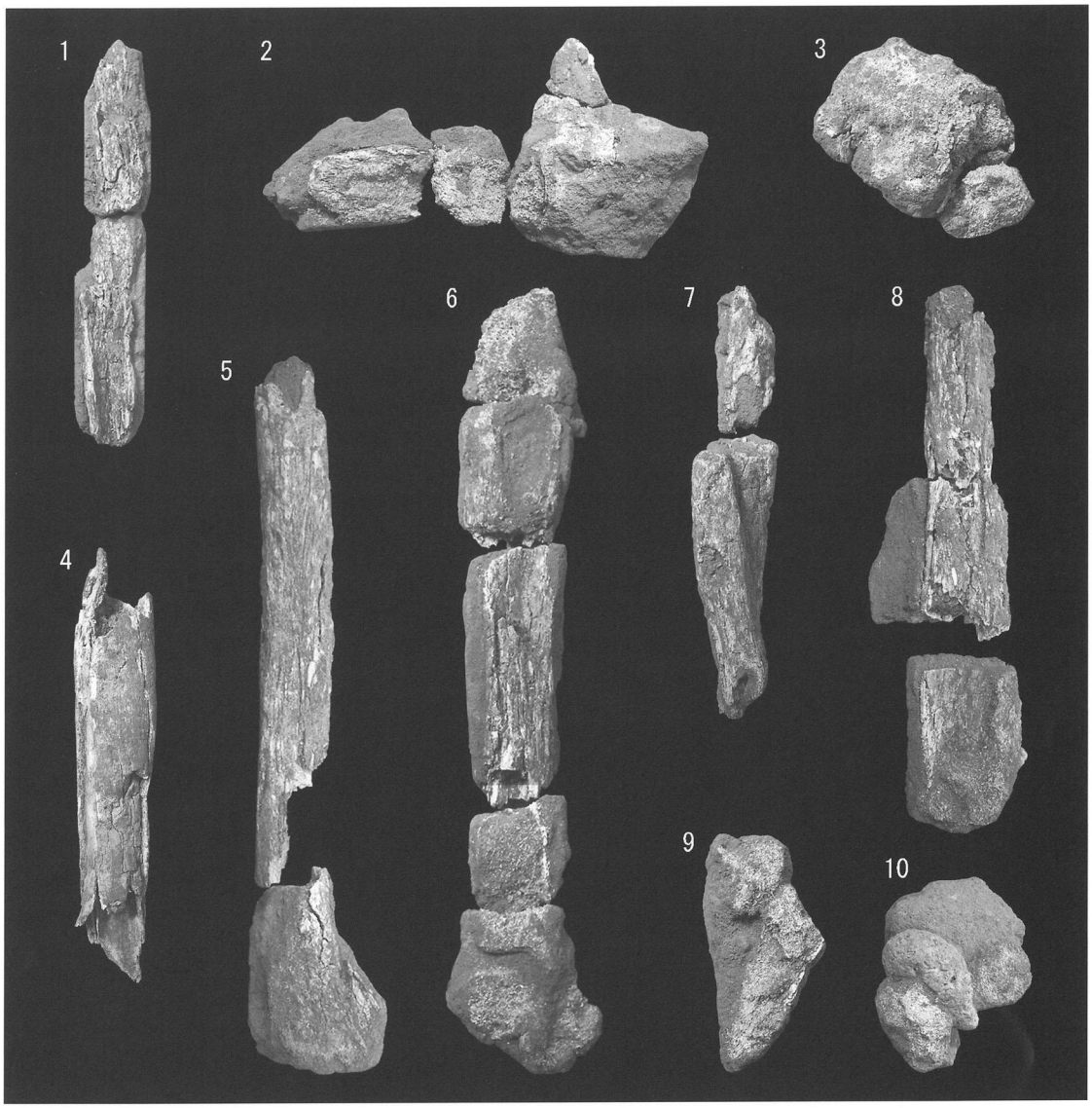
《D5土坑》　時期は、土坑の形態により中世？と想定されている。北に頭を向け、右側を下にした屈葬である。取り上げた部位ごとに番号がつけられている。以下、取り上げ番号順に部位を記載した。保存状態は非常に悪く、クリーニングすることで骨表面がはがれ、原形が保たれない可能性が考えられたため、鑑定および写真撮影は泥がついた状態でおこなった。

資料No.	No.	部位	左右	備考
12	1	上腕骨	L	
12	2	橈骨	L	
12	3	尺骨	L	
12	4	寛骨片		保存状態非常に悪い・右(？)寛骨臼周辺残存
12	5	寛骨片	L	寛骨臼部分保存
12	6	大腿骨	L	骨体近位半部保存.骨体の近位部周径85mm 骨体後面粗線付柱形成・骨体やや太い
12	7	大腿骨	R	骨体35cm保存.骨表面風化・剥離.中央周89mm
12	8	骨端		左右大腿骨いずれかの骨端
12	9	脛骨・距骨	L	脛骨骨体断片的
12	12	腓骨骨体	L・R	
12	10	脛骨	R	骨体部分断片的
12	11	部位不明骨端		

頭と思われる部分と、腹部に比較的大きな石がおかれている。頭骨の破片は保存されていないが、全体的に保存状態が悪く風化による傷みが強いことから判断すると、頭部がないわけではなく、土壌化してしまった可能性が考えられる。大腿骨の骨体周は、左右とも江戸時代男性平均値（87.2mm）にほぼ匹敵する。骨体は骨表面の風化が強いものの、後面粗線が比較的明瞭に確認できる。したがって、この個体が男性である可能性が非常に高い。脛骨および腓骨も保存されているが、骨体中央部分が断片的であり、詳細は不明である。年齢は歯や年齢を示す部位の特徴が保存されていないので、成人としかわからない。

3. おわりに

森平遺跡のD5号土坑から出土した人骨は1体で、成人男性である。



図版1　森平遺跡出土の人骨

1.左上腕骨(No.1) 2.寛骨片(No.4) 3.左寛骨片(No.5) 4.左大腿骨(No.6) 5.右大腿骨(No.7) 6.左脛骨・左距骨(No.9) 7.左右腓骨 骨体(No.9)　8.右脛骨(No.10) 9.骨端(No.8) 10.骨端(No.11) スケールバー 5cm

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第165集
森平遺跡・北近津遺跡Ⅱ・西一里塚遺跡Ⅲ・大豆田遺跡Ⅲ

2009年3月24日

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市志賀5953
TEL0267-68-7321

印　刷　所　キクハラインク（有）

報告書抄録

ふりがな	もりだいらいせき・きたちかついせきに・にしいちりづかいせきさん・おおまめだいせきさん
書名	森平遺跡・北近津遺跡Ⅱ・西一里塚遺跡Ⅲ・大豆田遺跡Ⅲ
副書名	
巻　次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第165集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　社会教育部　文化財課
所在地	〒385-0006　　長野県佐久市志賀5953
発行年月日	平成21年（2009）3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度 °′″	経度 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
森平遺跡	森平　936-1他			36° 15′ 29	138° 26′ 54	2006.12.4～ 2007.1.25	471	市道改良
北近津遺跡Ⅱ	長土呂1069-8　他		6	36° 17′ 28	139° 47′ 55	2006.9.5～ 2006.11.14	769	市道改良
西一里塚遺跡Ⅲ	平塚210　他		92	36° 16′ 4	139° 47′ 21	2006.11.27～ 2006.12.21	540	市道改良
大豆田遺跡Ⅲ	長土呂1704-6		7	36° 16′ 55	139° 47′ 27	2007.1.5～ 2009.1.19	127	市道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森平遺跡	集落址	弥生時代 (中期)	竪穴住居址　3軒	弥生土器（栗林式）	
		平安時代	竪穴住居址　2軒	土師器・須恵器	
			溝状遺構　2本		
北近津遺跡群 北近津遺跡Ⅱ	集落址	古墳時代	竪穴住居址　4軒 土　坑　6基 溝状遺構　2本 ピット	古式土師器	
西一里塚遺跡Ⅲ	集落址	弥生時代 (中期・後期)	竪穴住居址　7軒 土　坑　1基 溝状遺構　7本	弥生中期・後期前半	
周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅲ	集落址	古代	溝状遺構　2本		

要　約

４遺跡はいずれも「中部横断自動車道路」建設に関連した市道改良工事のため、いずれも調査範囲が４ｍほどの道路幅という限られた調査であった。そのため、検出遺構についても住居址などは全体が調査されたものも少なく資料的な制約もあった。

しかし、森平遺跡については弥生中期栗林期の集落の広がりが確認され、北近津遺跡Ⅱにおいては佐久平で希少な弥生末から古墳初頭と考えられる住居址群が発見された。また、西一里塚遺跡Ⅲからは「環濠」と考えられる溝状遺構が検出された。

このように極狭い調査範囲ではあったが、多くの成果があり、隣接して調査された中部横断自動車道路予定地の調査成果と合わせると、より一層に遺跡の理解度が増すと考えられる。